

COC+R
令和4年度
事業報告書

PENTAS YAMANASHI



未来を見据え 学問のさらなる探求と 研究・教育力の向上による 新たな価値の創造を

事業責任大学 山梨県立大学
学長 早川 正幸

山梨県立大学は「地域を愛し、地域を育て、地域をつなぐ」をスローガンに、未来を見据え、学問のさらなる探求と研究・教育力の向上による新たな価値の創造を目指しています。

令和2年度に、本学が提案した教育プログラムが文部科学省の「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業(COC+R)」に採択されました。

採択事業の「VUCA時代の成長戦略を支える実践的教育プログラム」は、本学を中心に山梨大学、山梨英和大学の3大学、山梨県、県内の基幹産業関連団体、関連企業が協力して、不安定で不確実な現代社会に対応した高付加価値を持つ人材を養成するために、大学と出口（就職先）が一体となって教育プログラムを構築し、地方創生人材の育成を図ることを目指しております。

令和3年度から本事業の教育プログラムが本格的にスタートし、「観光高度化人材育成プログラム」、「地域づくり加速化人材育成プログラム」の2つのプログラムが開講いたしました。

さらに、令和4年度からは新たに「ビジネス構想力・経営マインド醸成プログラム」、「多文化共生対応人材育成プログラム」、「次代を担うアントレプレナー養成プログラム」の3プログラムが開講し、計5つのプログラム体制が完成いたしました。

本事業では外部機関と協働して教育プログラムの開発から修了証の発行までを一貫して行うことにより、学生の地元定着率の向上を図ることとしております。また、このプログラムは社会人にも開放し、学生と社会人の共学に基づく学びは今後の教育モデルとなっていくものであります。また、全国初の大学等連携推進法人として文部科学省から認定された「大学アライアンスやまなし」は、本学と山梨大学との連携により、地域を支える人材育成に寄与することをその目的の一つとしており、連携開設科目としての参加大学への科目開放等を進めることにより、本事業の教育プログラムを大きく発展させていくものと期待しております。

本書は、これらの取り組みの詳細をご覧頂くために「COC+R令和4年度事業報告書」として取りまとめたものでございますので、ご一読頂ければ幸いと存じます。今後も本事業へのご支援、ご協力をお願いいたします。

目次

00

はじめに P2

01

事業概要 P4

02

令和4年度活動状況 P8

03

令和4年度授業実施状況 P15

04

令和4年度事業運営体制 P79

05

補助事業に関する経費 P81

参加校

- ・山梨県立大学
- ・山梨大学
- ・山梨英和大学

事業協働機関

- ・山梨県
- ・公益財団法人山梨総合研究所
- ・公益財団法人やまなし産業支援機構
- ・公益社団法人やまなし観光推進機構
- ・株式会社タンザワ
- ・萌木の村株式会社
- ・昭和産業株式会社
- ・公益財団法人山梨県国際交流協会
- ・一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジン

01

事業概要

大学による地方創生人材教育プログラム構築事業

Centers of Community –
Project for Universities as Drivers of Regional Revitalization
through New Human Resources Education Programs



VUCA時代の成長戦略を支える 実践的教育プログラム

令和2年度に本学が提案した教育プログラムが、文部科学省の「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業（COC+R）」に採択されました。「PENTAS YAMANASHI」は、山梨県立大学「VUCA時代の成長戦略を支える実践的教育プログラム」の事業通称名です。

PENTASは、夏に星形の花を無数に咲かせる常緑性の宿根草で、花言葉は「希望が叶う」「願いごと」「博愛」です。英語では星形の花が半球状に咲く様子から「Star cluster（星団）」とも呼ばれています。本事業を通して、受講生の皆さんが山梨の地からそれぞれの希望を叶えていくことを願って、この名称がつけられました。

ARTとSCIENCEの 精神を兼ね備えた 創造的課題解決人材の育成

ARTとは？

自然を模範とし、美の精神で未来を創造する力

SCIENCEとは？

物事の本質を突き詰め、一般化する力

COC+Rとは？

文部科学省では、令和2年度から、地域の知の拠点としての大学が、他の大学等や地方公共団体、地域の企業等と協働し、地域が求める人材を養成するための教育改革を実行するとともに、出口（就職先）と一体となった教育プログラムを実施することで、若者の地元定着と地域活性化を推進する「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業（COC+R）」を実施しています。地方創生に向けては、当該地域にある高等教育機関が核となって、その地域の経済圏における教育と職業、教育と新たな産業を結びつけていく活動が不可欠です。人生100年時代においては、高等教育機関には多様な年齢層の多様なニーズを持った学生を教育できる体制が必要となるため、いわゆる就職氷河期世代も含めた様々な社会人に対しても受けやすく即効性のある出口一体型人材養成の確立が求められています。



令和4年度開講プログラム紹介

令和3年度よりスタートしたPENTASYAMANASHIに、新たに「ビジネス構想力・経営マインド醸成プログラム」、「多文化共生対応人材育成プログラム」、「次代を担うアントレプレナー養成プログラム」が誕生し、令和4年度は5つのプログラムを開講しました。

PENTAS YAMANASHI 5つの教育プログラム



各プログラムのVUCA科目、学部等開講科目(参加大学 学生のみ)、技能科目、実践科目より所定の単位数を取得した者に修了証が授与されます。修了要件は学生と社会人で異なります。

参加大学学生 18単位以上 (VUCA科目3単位、学部開講等科目8単位、技能科目3単位、実践科目4単位)

社会人等 10単位以上 (VUCA科目3単位、技能科目3単位、実践科目4単位)

※「次代を担うアントレプレナー養成プログラム」は、学部等開講科目はなく、学生・社会人ともに9単位以上を取得した者に修了証が授与されます。
※プログラム修了証は、事業協働機関とともに発行いたします。

各プログラム概要

観光高度化人材育成プログラム

地域資源の活用方法を学び観光の高度化を図ることができる人材を育成するとともに、新たな地域資源を対象に教育プログラム化し、実務家や専門家から本県の自然・歴史文化財の活用方法を学んでいきます。

- 地域資源を活用した先進事例の紹介
- ワイン県ならではのワイン関連科目
- 自然環境のマネタイズ手法を学び、自然文化からの価値創造を図る
- 観光業で活かせる語学力とホスピタリティマインドの醸成

地域づくり加速化人材育成プログラム

地域づくりの中心を担い、社会変革力の醸成を担う事ができる人材の育成を目的に、更なる地域住民との交流・対話の場を設け、実践的な授業を展開していきます。

- 高い志をもった公務員の育成
- ハイレベルなコンピテンシーを身に付けた人材の育成
- 地域の課題を発掘する手法の習得
- 実践的な企画立案能力の醸成

ビジネス構想力・経営マインド醸成プログラム

県の基幹産業である製造業等において求められる人材を育成するため、実務家教員を最大限活用し、新規でビジネスを構想する力を養うとともに、経営マインドの醸成を図ります。

- 企業がチャレンジしている経営革新の紹介
- 事業計画の作成やイノベーション創造までの実践的手法
- 食を通じた地域経済への貢献手法
- トренд予測やブランディング等、ビジネス構想力の醸成

多文化共生対応人材育成プログラム

医療・福祉・教育の現場の国際化・多文化化の課題を理解し、解決するための方策を見出すことのできる人材を育成します。

- 多文化共生の現場を訪問
- 多様な背景をもつ人々とのコミュニケーション力の醸成
- 芸術をとおした多様な人々との協働の体験
- 多文化化する保健・医療・福祉現場で活躍できる人材育成

次代を担うアントレプレナー養成プログラム

自らの課題をビジネスの手法で解決する能力を養い、「起業家精神」を有する人材を養成するとともに、学生と社会人が相互に学び合い、新たな視点で事業を構想することのできる場を提供していきます。

- 起業家（実務家教員）による実践的な授業
- 世界で通用するビジネススキルの獲得（山形大学アントレプレナーシップ育成プログラムの活用）
- ビジネスプランコンテストへの出場とマルチステークホルダーによるメンタリング

02

令和4年度活動状況報告

1. 広報活動

参加大学や事業協働機関の協力を得て対象地域に広くリーフレット等を配布し、本事業の周知を行った。また、授業の様子や講座の終了報告や成果報告をウェブサイトやFacebookで発信し受講生やコーディネーターがシェアしたことで、本事業の知名向上に貢献した。

(1) PENTAS Program、PENTAS Magazineの作成

学生から社会人まで幅広い方に取組が認知されるよう、冊子を作成して周知を行った。PENTAS Program2022が第51回山梨広告賞の奨励賞を受賞するなどデザイン面でも高い評価を得ることができた。



(2) プロモーションビデオの作成

PENTAS YAMANASHIの認知度向上とブランド確立を目的に、コンセプトや授業風景をまとめたプロモーションビデオを作成し、ホームページや県内の大学等に設置されているデジタルサイネージなどで周知を行った。



(3) その他

リクルート進学総研発行の「カレッジマネジメント」や、環境省が作成した「新時代の地域づくりハンドブック」にPENTAS YAMANASHIの取組が掲載されるなどにより、県内外に広く周知することができた。

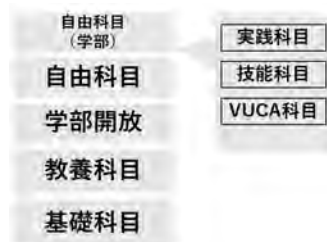


2. 教育課程への位置づけ

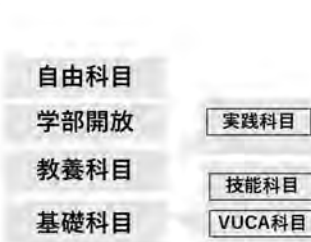
PENTAS YAMANASHIのVUCA科目、実践科目及び技能科目について、令和4年度から山梨県立大学の全学共通科目（教養教育課程）として正課内に位置付けることとした。

また、山梨大学の学生には大学等連携推進法人の特例である連携開設科目として、山梨英和大学の学生には「大学コンソーシアムやまなし」の単位互換科目として、それぞれ履修できることとした。

【令和3年度の位置づけ】



【令和4年度の位置づけ】



3. 高校生の科目等履修生制度の導入

高校生の学ぶ意欲に応えるとともに、高等学校等と大学との円滑な接続を図ることを目的として、高校生が授業科目を履修した場合に、入学後、既修得単位として単位認定の申請をすることができる制度を導入した。

PENTAS YAMANASHIの科目は36名（延べ43名）が履修し、うち14名が山梨県立大学への入学につながった。

4. 寄附講座の導入

事業協働機関の協力を得て、観光高度化人材育成プログラムの「おもてなしマイスター養成講座」を（公社）やまなし観光推進機構の経費負担により開講した。

5. プログラムごとの受講者数（延べ人数）

	学生	社会人	高校生	合計
VUCA科目	89人	9人	8人	106人
観光高度化人材	128人	151人	3人	282人
地域づくり加速化人材	69人	4人	1人	74人
ビジネス構想力・経営マインド	120人	28人	6人	154人
多文化共生対応人材	61人	38人	3人	102人
次代を担うアントレプレナー	44人	3人	22人	69人
合計	511人	233人	43人	787人

6. 数値目標と実績

	令和2年度		令和3年度		令和4年度		令和5年度		令和6年度	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
開講プログラム数	0	0	2	2	4	5	4		5	
学生総受講者	0	0	40	86	100	168	110		125	
卒業者のうち受講済者数	－	0	－	4	－	48	－		－	
地元就職者数	0	0	10	1	60	15	70		85	
地元定着者数	0	0	10	0	60		70		85	
社会人受講者数	0	0	40	117	70	182	100		110	
うち県外からの受講者数	0	0	5	35	10	52	15		20	
社員教育に利用する企業数	0	0	3	30	6	25	9		10	
学外の実務家教員の割合	－	－	20%	76%	22%	77%	25%		25%	
教員数	－	0	－	17	－	31	－		－	
実務家教員数	－	0	－	13	－	24	－		－	

7. 教育課程表（科目一覧）

観光高度化人材育成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
学部等 開講科目	山梨学Ⅰ	選択	8単位 (学生のみ)	(全学共通)	2	講義	○	○
	山梨学Ⅱ	選択		(全学共通)	2	講義	○	○
	山梨の観光	選択		(国際政策)	2	講義		○
	文化とコミュニケーション	選択		(国際政策/全学共通)	2	講義	○	○
	日本の歴史	選択		(国際政策/全学共通)	2	講義	○	○
	観光実務	選択		(国際政策)	2	講義		○
	山梨観光演習	選択		(国際政策)	1	演習		○
	海外インターンシップ	選択		(国際政策)	1	実習		○
	観光ビジネス論	選択		(国際政策)	2	講義		○
技能 科目	地域資源の保全と活用	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	料理とワインのマリアージュ	選択		1～4	1	講義	○	○
	まちづくりの思想と技術（旧：地域課題解決）	選択		1～4	2	講義	○	○
	ローカルガストロノミー論	選択		1～4	1	講義	○	○
実践 科目	ローカルデザイン実践演習（旧：地域課題解決演習）	選択	4単位	1～4	1	演習	○	○
	事業づくりの技法（旧：地域課題創造的解決演習）	選択		2～4	1	演習	○	○
	通訳入門実践	選択		1～4	1	演習	○	○
	実用中国語	選択		1～4	1	演習	○	○
	ネイチャーガイド演習1	選択		1～4	1	演習	○	○
	ネイチャーガイド演習2	選択		1～4	1	演習	○	○
	日本ワイン歴史マイスター養成講座	選択		1～4	1	講義	○	○
	おもてなしマイスター養成講座	選択		1～4	1	講義	○	○
	観光実践マネジメント講座	選択		1～4	1	講義	○	○
	やまなしワイン入門講座	選択		1～4	1	演習		○

地域づくり加速化人材育成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
学部等 開講科目	地域プロジェクト論	選択	8単位 (学生のみ)	(国際政策)	2	講義		○
	環境社会学	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	公共人材論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		
	山梨の政策課題	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	政策法務論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		
	地域企業実践論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
技能 科目	ワークショップデザイン（旧：コミュニケーション手法）	選択	3単位	1～4	2	講義	○	○
	まちづくりの思想と技術（旧：地域課題解決）	選択		1～4	2	講義	○	○
	情報発信の手法	選択		1～4	2	演習	○	○
実践 科目	事業づくりの技法（旧：地域課題創造的解決演習）	選択	4単位	2～4	1	演習	○	○
	政策づくりの技法（旧：地域づくり人材育成講座）	選択		2～4	1	演習	○	○
	ローカルデザイン実践演習（旧：地域課題解決演習）	選択		1～4	1	演習	○	○
	事業づくり実践演習（旧：地域づくり人材育成演習1）	選択		2～4	1	演習	○	○
	政策づくり実践演習（旧：地域づくり人材育成演習2）	選択		2～4	1	演習	○	○

ビジネス構想力・経営マインド醸成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
学部等 開講科目	簿記論	選択	8単位 (学生のみ)	(国際政策/全学共通)	2	講義	○	○
	簿記演習	選択		(国際政策/全学共通)	1	演習	○	○
	経営学	選択		(国際政策)	2	講義		○
	経営組織論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	会計学	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	上級簿記	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	金融論	選択		(国際政策)	2	講義		
	地域企業実践論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	経営史/経営戦略論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	経営分析論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	マーケティング論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	国際経営論	選択		(国際政策)	2	講義		○
	技能 科目	企業がチャレンジする経営革新		必修	3単位	1～4	1	講義
ローカルガストロノミー論		選択	1～4	1		講義	○	○
国際貿易実務		選択	1～4	1		講義	○	○
実践 科目	事業計画づくりワークショップ	選択	4単位	2～4	1	演習	○	○
	トレンド予測の手法	選択		1～4	1	演習	○	○
	イノベーション創造の基礎と実践	選択		2～4	1	演習	○	○
	ブランディング基礎と実践	選択		2～4	1	演習	○	○
	企業におけるレクチャーと現場研修	選択		1～4	1	演習	○	○

多文化共生対応人材育成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ 1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ 2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
学部等 開講科目	共生社会論	選択	8単位 (学生のみ)	(国際政策/全学共通)	2	講義	○	
	文化とコミュニケーション	選択		(国際政策/全学共通)	2	講義	○	○
	カウンセリング基礎	選択		(全学共通)	2	講義		
	未修外国語(中国語 I ab、スペイン語 I ab、韓国語 I ab、フランス語 I ab)	選択		(全学共通)	2	演習		
	留学英語	選択		(国際政策/全学共通)	1	演習		
	国際協力	選択		(看護/全学共通)	1	講義	○	
	看護英語	選択		(看護)	2	講義		
	医療英語 I	選択		(看護)	2	講義		
	医療英語 II	選択		(看護)	1	講義		
	国際看護学	選択		(看護)	2	講義		
	国際保健医療演習	選択		(看護)	2	演習		
	生・倫理・自立	選択		(人間福祉)	2	講義		
	子どもの人権	選択		(人間福祉)	2	講義		
	福祉と人権	選択		(人福-福祉コミュ)	2	講義		
	公的扶助論	選択		(人福-福祉コミュ)	2	講義		○
	ソーシャルワーク援助技術論Ⅲ	選択		(人福-福祉コミュ)	2	講義		
	多文化教育論（幼・小）	選択		(人福-人間形成)	2	講義		
	日本語教育概論	選択		(国際政策、 人福-人間形成)	2	講義		○
	日本語教育特講（外国籍児童生徒等）	選択		(国際政策、 人福-人間形成)	2	講義		○
	比較文化論(異文化理解)	選択		(国際政策)	2	講義		○
日本語の表現Ⅱ（コミュニケーション）	選択	(国際-国際コミュ)	2	講義		○		
多文化教育論（中・高）	選択	(国際政策)	2	講義				
福祉心理学	選択	(英和大学)	2	講義		○		
日本語教育概論	選択	(英和大学)	2	講義				
宗教と思想	選択	(英和大学)	2	講義				
多文化共生論	選択	(英和大学)	2	講義				
子どもと文化	選択	(英和大学)	2	講義				
技能科目	多文化共生地域課題（多文化社会における対人援助/外国人と人権）	必修	3単位	2～4	2	講義	○	○
	多文化社会とことば	選択		1～4	1	講義	○	○
	保健医療福祉における文化理解	選択		2～4	1	講義	○	○
	地域課題解決（多文化共生）	選択		1～4	1	講義	○	○
実践科目	多文化共生サービスラーニング	選択	4単位	2～4	2	演習	○	○
	芸術活動をととした多様性協働プロジェクト	選択		1～4	2	演習	○	○
	多文化共生の現場を歩く	選択		1～4	1	演習	○	○
	地域課題プロジェクト（多文化共生イベント企画）	選択		1～4	1	演習		○
	多文化対応人材育成演習（教育）	選択		2～4	1	演習	○	○
	多文化対応人材育成演習（保健・医療・福祉）	選択		2～4	1	演習	○	○

次代を担うアントレプレナー養成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当 年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
※学部等開講科目なし								
技能科目	アントレプレナーシップとスキル	選択	3単位	1～4	2	講義	○	○
	グローバルビジネススキル	選択		1～4	1	講義	○	○
実践科目	アイデア共創実践	選択	3単位	1～4	1	演習	○	○
	ビジネス共創実践	選択		1～4	2	演習	○	○

03

令和4年度授業実施状況

VUCA時代のキャリアレジリエンス

担当講師：水上篤、杉山歩

1. 科目の目的

現代は先の見えない時代(VUCA時代：Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性)) と呼ばれるようになりました。VUCA時代においては、自らのキャリアを形成していくに際して、様々な困難に直面していくことが予想されます。困難に直面した時に、しなやかに対応していく能力が求められます。本科目では、社会の変化にしなやかに対応していくためのマインドのあり方、手法について学ぶことを目的とします。

2. 授業内容

- 第1回 (4/13 水)：VUCA時代とは～hototoの人づくり～
水上篤 (山梨県立大学・特任教授、農業生産法人 (株) hototo代表取締役社長)
- 第2回 (4/20 水)：VUCA時代とキャリアデザイン/杉山歩・水上篤
- 第3回 (4/27 水)：地域循環を促す仕組みづくり/大木貴之氏 (ローカルスタンダード (株) 代表取締役社長)
- 第4回 (5/11 水)：柳ヶ瀬を楽しい町にする1/大前貴裕氏 (株) ミユキデザイン
- 第5回 (5/18 水)：柳ヶ瀬を楽しい町にする2/大前貴裕氏 (株) ミユキデザイン
- 第6回 (5/25 水)：ツーリズムの可能性～ワインツーリズムの展開～
大木貴之氏 (ローカルスタンダード (株) 代表取締役社長)
- 第7回 (6/1 水)：VUCA時代とキャリア/水上篤
- 第8回 (6/8 水)：VUCA時代とキャリア/濱田紗綾子氏 (株式会社チェリーチェーン 代表取締役)
- 第9回 (6/15 水)：VUCA時代とキャリアデザイン/杉山歩・水上篤
- 第10回 (6/22 水)：VUCA時代とキャリア/吉岡 宣善氏 (株式会社フライング・ボイス 取締役)
- 第11回 (6/29 水)：四国水族館の立ち上げ/流石学氏 (株) 四国水族館開発代表取締役社長)
- 第12回 (7/6 水)：地域おこしとブランディング/流石学氏 (株) 四国水族館開発代表取締役社長)
- 第13回 (7/13 水)：VUCA時代とキャリア/杉山歩・水上篤
- 第14回 (7/20 水)：VUCA時代におけるキャリア (グループワーク) /杉山歩・水上篤
- 第15回 (7/27 水)：VUCA時代とキャリア/
小川 淳氏 (ピクシーダストテクノロジーズ株式会社 Managing Director)

3. 講義を振り返って

VUCA時代の授業を通して、学生に特に色々な進路とリスクヘッジ・ポートフォリオ構成の内容を中心に講義を行った。事例をもとに色々な方に講義をしてもらい、学生もリアルな体験者から話を聞くことでより理解が深まったと感じている。テクノロジーの進化、人々の嗜好の変化、あるいは異常気象と自然災害の激甚化など様々な要因で先が読めなくなっています。昔ながらのビジネスのやり方では生き残れません。勤めている会社が倒産するかもしれません。それどころか職業や産業自体がなくなってしまうかもしれません。これからどうなるのか本当に不安です。そのような内容も講義に踏まえられました。感染症流行や大地震の発生、戦争勃発など、予期せぬ問題が突然発生するということが重点があります。その結果、資産や財産が1日にして失われることも珍しくありません。変動性と相まって、未来予測を困難にしています。こういったリスクについても説明する講義となりました。さまざまに変わる学生の時代の状況を考慮して授業を行いました。

4. 講義を通して見えた変化や効果

VUCA時代に求められることは、走りながら時代を呼吸し、自分の感覚に基づいて意志決定していくことです。情報を集めて、データを分析することももちろん大切ですが、分析結果に基づいた最終的な意志決定をするのはあくまで自分自身であり、そこを人に任せてはいけません。また数字も大切ですが、実際に現場を生きることで自身の皮膚感覚を磨くことも大切なのです。そのことについて知らず知らずのうちに、今の時代に即して考え行動している学生がいたことに驚かされました。



地域のチャレンジ1

担当講師：堀内久雄、杉山歩

1. 科目の目的

山梨県内で地域づくりの側面から様々な活動にチャレンジしている方をお招きし、ゲストの方のビジョン・考え方・思い・コンセプトを拝聴する中から活動を成功に導いた原動力について学びます。講義に登壇するゲストは自治体やNPOでの活動を通して日本から世界へ山梨の魅力を発信している方々です。本科目を通して地域にありながらグローバルにチャレンジすることの意味について自ら考えて、地域資源の持つポテンシャルについて認識することを目的とします。

2. 授業内容

本講義ではゲスト講師の話聞きながら、担当教員と共に地域資源を活用した地域のチャレンジについて学んだ。

第1回(10/7金)：富士吉田のまちづくり 渡辺一史氏(富士吉田市外2ヶ村恩賜県有財産保護組合総務部理事)

第2回(10/21金)：八ヶ岳の観光地域づくり 小林昭治氏(DMO八ヶ岳ツーリズムマネジement代表)

第3回(10/28金)：小さな村のむらづくり 小村幸司氏(NPO法人小さな村総合研究所代表理事)

第4回(11/4金)：かえる舎の取り組み 斎藤和真氏(特定非営利活動法人かえる舎代表)

第5回(11/11金)：アメリカヤ 千葉健司氏(株)イロハクラフト代表取締役社長)

第6回(11/18金)：富士山アウトドアミュージアム 舟津宏明氏(富士山アウトドアミュージアム代表)

第7回(11/25金)：かつぬま朝市 高安一氏(かつぬま朝市会会長)

第8回(12/27金)：小菅村のむらづくり 船木直美氏(小菅村 村長)

3. 講義を振り返って

県内各地で未来に向けて誇りの持てる地域づくりに奮闘する実践者を講師にお招きした。人口700人の村の首長、まちづくりをライフワークとする市職員、全国屈指の観光まちづくり推進組織の仕掛け人、地域の記憶をよみがえらせた建築家、専門的な地域おこし協力隊員、経験豊かなNPO代表など実に多彩な講師陣となった。それぞれの講師の地域への熱い思いやこれまでの困難な事例、周囲の人々の共感を得て、心豊かな地域へと大きく前進する具体的な事例を通して「まちづくり」活動の実情とそのポイントを知ることができた。

4. 講義を通して見えた変化や効果

講師による講義の後、20～30分ほど意見交換、質疑の時間を設定した。このことによりより深く、それぞれの地域における多様な地域づくりの現場での取り組みの詳細についてより理解するとともに、学生自らが地域づくりに参加する際の意識の在り方、実践に向けた多くの学びを得ることができたものと考えている。特に地域おこし協力隊、NPOのメンバーなど多くの若者が活躍していることを確認したことで、今後地域の活性化において受講者の参加が進むことを期待している。

5. 受講生アンケート

富士吉田のまちづくり

「行政主導型まちづくり」の仕掛け人の中心を担った方の話として、大変興味深く聞くことができました。世に多くある「民間主導型」、「地域住民主導型」のまちづくりとは違う、非常に計画的で、しかも慶応大学生の地域おこし協力隊への参加と継続を通じた若者のアイデアと地域商店街や地場産業とのコラボレーションで生まれた斬新な取り組みが特徴だと感じました。堀内市長4期16年の行政の安定期を契機に、渡辺氏の「人のご縁に恵まれて、やりたいこととはやる」性格が、地域おこし協力隊を自主的に活動させ、その力を引き出して、まちづくりの花を開かせたと思えます。大学関係者を地域おこし協力隊に引き込むことはあると思うが、大学との連携協定を通して「継続して」協力隊へコミットが実現できていることは素晴らしい取り組みだと思います。また、卒業した協力隊員がまちに根付いて、さらに新しい質のまちづくりのチャレンジが続いていることも素晴らしいことだと思いました。

一方で、2000年代の「まちがミュージアム」の行政側の取り組みに対して、「本町大好きおかみさん会」が自主的に生まれて取り組みを展開するなど住民の側のまちづくりの機運も見られました。富士吉田でさらに展開する必要があるのは、住民自身が取り組み主体の中核となったまちづくりの展開のようにも感じました。

かつぬま朝市

今回の講義では「やらない」というワードが特に印象に残った。普段私たちが何か活動を始める時、組織を細かく作ったりルールを作ったりターゲットを決めたりと活動が効率よく進んでいくように決め事をすることが多いが、それらを「やらない」という選択肢はこの講義を受けるまではあまり考えたことがなかった。確かに組織内で役割を多く作り組織が大きくなると意思決定にはとても時間がかかる。ルールを細かく決めるとそのルールを守ることに必死になり活動の本質を見失ってしまう。ターゲットを絞るとその一部のターゲットにしかアプローチができない。活動を効率的に進めるために決めたことが、このように逆に活動の動きを鈍くしてしまうことがあるということを知った。もちろん組織を作ったりすることが悪いことというわけではなく必要であることが多いと思う。ただその内容が重要であり良い塩梅で決めていかないと活動はうまくいかないことを知った。世の中には組織や活動をうまく円滑に進めるための方法が溢れているが、それらを「絶対に正しい」と信じ込みすぎず、臨機応変に対応することが組織、活動が成功に向かう秘訣だと思った。

地域のチャレンジ2

担当講師：堀内久雄、杉山歩

1. 科目の目的

地域のチャレンジ1に続き、山梨県内でビジネスの側面から様々な活動にチャレンジしている方をお招きし、ゲストの方のビジョン・考え方・思い・コンセプトを拝聴する中から活動を成功に導いた原動力について学びます。講義に登壇するゲストは山梨県の伝統産業、地場産業でありながら世界と勝負するプロダクトの開発に携わった方々です。本科目を通して地域にありながらグローバルにチャレンジすることの意味について自ら考えて、地域産業の持つポテンシャルについて認識することを目的とします。

2. 授業内容

講義ではゲスト講師の話聞きながら、担当教員と共に地域資源を活用した地域のチャレンジについて学んだ。

第1回(12/2金)：日本酒 天野怜氏(笹一酒造(株)代表取締役)

第2回(12/9金)：ジュエリー 望月直樹氏((株)ラッキー商会 代表取締役)

第3回(12/16金)：和紙 一瀬美教氏((株)大直 代表取締役)

第4回(12/23金)：evam eva 近藤和也氏・尚子氏(近藤ニット(株))

第5回(1/6金)：織物 五十嵐哲也氏(山梨県富士技術センター主幹研究員)

第6回(1/20金)：果物・スイーツ 古屋浩氏((株)プロヴィンチア代表取締役)

第7回(1/27金)：ハーブ 平野優太氏(MYHARBS代表)

第8回(2/3金)：ワイン 三澤彩奈氏(中央葡萄酒(株)栽培醸造責任者)

3. 講義を振り返って

360年続く老舗の酒蔵の日本酒の王道を極めた試み、SNSを活用したニーズ把握とファクトリーツーリズム併用するジュエリー企業、下請けから自社ブランドを立ち上げロングライフデザインを追求するニットメーカー、和紙メーカの挑む「伝統と革新」、周囲の山林を「宝の山」と呼ぶ若きハーブ開発者、世界的な評価に満足することなく「風土」を反映するワインづくりにチャレンジし続ける醸造家など、県内の多様なモノ作りに挑む経営者に講師をお願いした。受講者にとって今まで知ることのない県内企業であり、その経営の実情を知ることではできなかった。講義を通して彼等の不断の挑戦こそが企業を存続させ、発展させる核心であることを直接知ることができた。「社員の幸福のために企業は存在している。」そう言い切った経営者は輝いていた。

4. 講義を通して見えた変化や効果

日本酒、ジュエリー、和紙、ニット、織物、ワインなど伝統的な地場企業から、起業して間もないフルーツ、ハーブなど多様な県内企業の経営者が講師として登壇した。受講者にとってこれまで知ることのない地域の企業における経営者の情熱、経営に際しての困難な壁、打ち破るための手法、達成した時の充実感を直接知る機会となった。これからは小規模でも輝く県内の企業に対する関心がこれまで以上に高まることを期待するものである。

5. 受講生アンケート

evam eva

今日の講義では、近藤ニット株式会社「evam eva」さんのお話を聴きました。山梨の地場産業について学ぶ事が出来ました。ニットとは何か、編みと織りの違いについてや、ニット一本の糸を輪っかを作りながら編んで行き、ハイゲージやローゲージがある事を学びました。お店を立ち上げた理由として、セーターが二万円近かったものが数千円単位で登場するようになった事を念頭に自社ブランドを立ち上げたそうです。そして、経営とデザインは密接に繋がっており、企画(デザイン)販売 製造 小売 を行なっており、一貫して行なっているのが特徴的である事を知りました。短いサイクルでダイレクトに追加生産を行う事ができる点が、自社ブランドを立ち上げた最大のメリットである事を理解しました。また、山梨をベースに事業を行なっており、布帛という生地については初めて知り、受注のサイクルと出荷のサイクルや展示会について知る事ができました。最近では、オンラインの展示会が行われ、シーズンで展開している発注や注文数や発注数、在庫数を視覚的に見れるようにしている。お店のコンセプトでは、それぞれの店舗が違う顔をしており、お店の空間ではなく、違うコンセプトに応じて店舗作りや内装作りを行い、お洋服に暮らしの彩りを想像し、お店の中で展開していて、店舗として同じものはない。同じ店だけれど、違うお店の様な雰囲気を感じてとても面白いなと感じました。

ハーブ

今回の講義では今まで嗅いだことのない様々なハーブの香りをかぎ、そして初めて様々なハーブで作られたシロップを飲んだ。ハーブというおしゃれで格式高いイメージを持っていたが、今回の講義を聞いてどこにでも生えているような植物もハーブとして使うことができ、様々な効果を持っていることを知った。私はこのことを大学のゼミ活動に活かしたいと感じた。私は山梨県笛吹市の芦川町で古民家を活かした活動をしている。その古民家はカフェとしてこれから活動していく予定であり、今はメニューを考えている段階だ。そのメニューにハーブを使ったメニューを作りたいと考えた。芦川町は自然豊かな場所で様々な植物がある。その自然を活かせばハーブティーや自然を使ったお菓子も作れると考えた。免許や法律の問題などあるかもしれないがそこはうまく解決しながら芦川町の魅力の一つである自然を活かしたメニューを考えていきたい。

5. 受講生アンケート

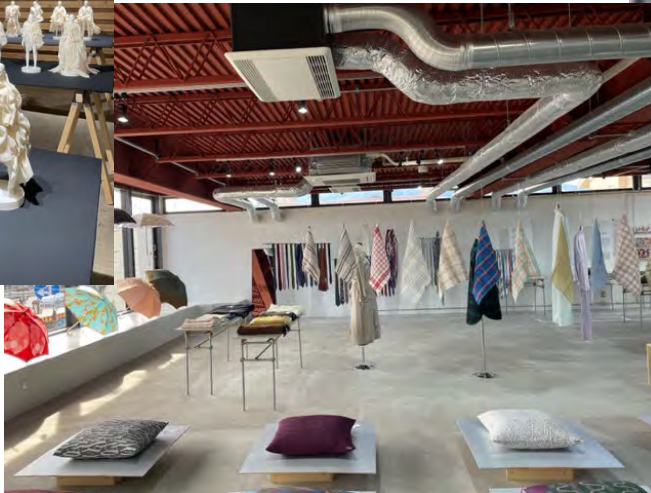
まとめの感想

今日で地域のチャレンジの講義が最後でしたが毎回色々な方のお話を聞くことができ、色々な山梨県の魅力であったり活動を知らなかった事を学ぶきっかけとなったり、訪れるきっかけとなったり何より山梨県で成功されている方達からのお話は非常にためになり良い経験と共に自分自身も成長できたのではないかと感じました。来年度も機会がありましたらペンタスの地域授業を受講したいと考えています。その際はよろしくお願い致します。毎回魅力的な講義をありがとうございました！

地域のチャレンジ1



富士吉田市
「布の芸術祭」



NIPPONIA小菅源流の村



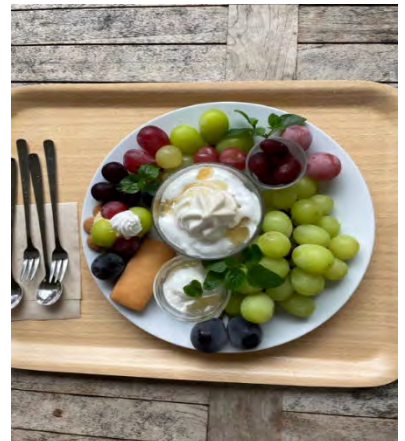
地域のチャレンジ2



「ハーブ」の講義



フルーツ
葡萄のプレート



「草木蜜」の炭酸割
ハーブエキス入りマッシュマロ
黒モジの楊枝

グローバルマインドとスキル

担当講師：嶋津幸樹

1. 科目の目的

タクトピア株式会社のELT（英語教育事業）ディレクターである、嶋津幸樹氏を講師に迎え、グローバルマインドとスキルを身につけることを目指します。この科目では「山梨から世界を変える地方創生プロジェクト」のアイデアをチームで創造し、発信することを目的としています。アイデア創造は自己分析・自己探究を通して自分の人生ストーリーや地元山梨への想いを言語化することから始まります。次いで地方創生人材として必須となる基本的な検討プロセスと必要なマインド/スキルの習得をおこない、最終的にローカルとグローバルの両軸で課題解決策を模索していきます。同時に英語「を」学ぶのではなく英語「で」自分のことと世界のことを探究するプロジェクト型学習の形態をとります。最終発表ではグローバルな自分と世界にインパクトを与えるプロジェクトを英語で発表します。

2. 授業内容

第1回(10/7金) Goal Setting 目標設定（オンデマンド視聴）

時代の流れを理解し、自分なりに解釈して、ローカル（自分のこと・地元のこと）とグローバル（他人のこと・社会のこと）に対する問題意識を持ち、この講座における目標設定をします。

第2,3回(10/14金) Local and Self Analysis 自己分析 1

自己紹介アクティビティを通して自分の好き・嫌い、強み・弱みを分析と発表を行い、山梨での原体験を言語化し、多角的に見た自分の人生ストーリーを英語で発表します。

第4,5回(10/21金) Local and Self Analysis 自己分析 2

自己紹介アクティビティを通して自分の好き・嫌い、強み・弱みを分析と発表を行い、山梨での原体験を言語化し、多角的に見た自分の人生ストーリーを英語で発表します。

第6,7回(10/28金) Intercultural Understanding 異文化理解 1

日本と世界の比較・分析を通して地元・海外の魅力を発見し、世の中の多様性を理解した上で共感ベースで仲間を作り、チームビルディングを行います。

第8,9回(11/4金) Intercultural Understanding 異文化理解 2

日本と世界の比較・分析を通して地元・海外の魅力を発見し、世の中の多様性を理解した上で共感ベースで仲間を作り、チームビルディングを行います。

第10,11回(11/11金) Innovation and Creation 革新と創造 1

世の中の発明・革新の意義を理解した上で、チームでアイデア発想を行い、独創的な課題解決に必要なプロトタイプを制作し、魅力的に表現する技法を身につけます。

第12,13回(11/18金) Innovation and Creation 革新と創造 2

世の中の発明・革新の意義を理解した上で、チームでアイデア発想を行い、独創的な課題解決に必要なプロトタイプを制作し、魅力的に表現する技法を身につけます。

第14,15回(11/25金) Final Presentation 最終発表

チームと協力して課題解決アイデア・事業アイデアを英語で発表します。

3. 講義を振り返って

何かを変えたい、何かに挑戦したい学生がこの2ヶ月間、英語で世界のことを学び、英語で発信することをやり抜きました。Society 1.0の時代を生きた人類について議論し、AIと共創するであろうSociety 5.0について理想と現実を議論し、最後は今を生きる自分がすべき行動、世の中の課題、山梨の未来について発信して頂きました。英語を通して世界の知識や教養を学ぶことで、英語はもちろんのこと、多言語で多角的な視点を持つことの重要性に気づきます。また毎回の授業でのフィードバックや振り返りで今何を学び、何に应用すべきかについて再認識することができます。グローバルな環境で生きていくためには自分のことを深く知り、自分が育った環境や教育について客観的に分析し、社会に貢献する術を見つけ出す必要があります。この授業では学生たちがその第一歩を踏み出すことで、自分の人生ストーリーが言語化できたと自負しています。

4. 講義を通して見えた変化や効果

顕著な変化はメタ認知能力の向上です。

授業の最初に行う目標設定と授業の終盤で行う振り返りにより、毎回の授業後には学ぶことの意義を言語化できる学生が多く見られました。またゲストとの議論でも臆することなく発言し、意見交換する姿に感銘を受けました。また英語をツールとして学ぶ姿勢にも変化が見られ、通常の授業でもグローバルマインドとスキル受講者の積極的な授業参加が印象的でした。



地域しごと概論（経営マインド）

担当講師：手塚伸、今井久

1. 科目の目的

山梨県には多種多様な「ものづくり企業」が展開している。その多くが、ハイテクノロジー・ハイスキル、オプティマル（〔地域・市場特性に応じた〕最適な）テクノロジー・オプティマルスキルを強みとして、国内だけではなく海外においても存在感を発揮しています。こうしたものづくり現場の経営者や支援者8名が登壇し、仕事の理念、これまでの好機・危機、未来への戦略、VUCA時代を生き抜くための考え方などを語ります。経営者の皆様方の現場からの生の声や受講者への期待を通して、山梨県産業の多様さ・奥深さを理解するとともに、現実の仕事を実感することにより、今後のキャリアを構想するに当たっての基本的な知識や精神的な糧を得ることを目的とします。

2. 授業内容

第1回（4/14木）やまなし産業支援機構 手塚伸 理事長（特任教授）：

日本のものでつくりの現場を歩き経営者と意見交換を重ねる過程で、多くの方々が「仕事」と「稼ぎ」を明確に使い分けていると感じました。経済社会の変化に伴い境目が曖昧となりましたが、再び仕事の意義が問い直される時代になりました。山梨の多彩な経営者の仕事ぶりを鳥瞰していく。

第2回（4/21木）農業法人株式会社サラダボウル 田中進 代表取締役：

10年間サラリーマンをやってみて実感したのが、農業ほど、社会的な立場が自由で、精神的な立場も自由で、経済的にも自由な仕事はないだろうということです。生き方としても、もっと誇りを持って、もっと胸を張っていい仕事だと思ったのです。（著書「ぼくらは農業で幸せに生きる」から）

第3回（4/28木）山陽精工株式会社 白川太 代表取締役社長：

バブル崩壊後（中略）、企業経営の限界にきていました。そこで、どのような会社にしていきたいのか、当時の社員30名ほどで話し合いを行い、「自分の子供たちをこの会社に入れたいと思うような会社にしていきたい」というスローガンが決まり、これが弊社の経営理念になったのです。（同社ホームページから）

第4回（5/12木）株式会社オキサイド 古川保典 代表取締役社長：

「人生で最大のリスクは何もリスクを冒さないことだ。人からできないと言われることに挑戦しなければ成功はない。」。スタンフォード大学でお世話になったFejer教授に起業を報告した時、贈られたこの言葉が私の胸を打った。（OXIDE 20th anniversaryから）

第5回（5/19木）勝沼醸造株式会社 有賀雄二 代表取締役社長：

「価値っていうのは、いわゆる人の心を打つ度合いのことを指しているわけですから、価格と価値とは別物ですよ。（中略）だってコスト競争じゃ負けてしまうと思いますよ。（中略）これからはコスト競争ではなく価値競争にシフトする必要があるということを彼が教えてくれたわけです。」（長沢伸也編「地場ものづくりブランドの感性マーケティング」）から）

第6回（5/26木）藤精機株式会社 新藤淳 代表取締役社長：

日本はこれまで「ものづくり立国」として成長してきました。これから仮想空間の時代が来たとしても、ハードウェアの必要が無くなることはありません。「ものづくり」の楽しさ・素晴らしさを伝承し、日本が「Made in Japan」で再興できるように「ものづくりを通して、ひとづくり、幸せな社会づくり」を実現していきます。

第7回（6/2木）山梨県産業技術センター 串田賢一 主任研究員：

甲州印傳は江戸時代から続く革工芸で、山梨の代表的な伝統的工芸品産業である。鹿革に漆で文様を付け、この革で様々な製品を作っているが、原料の鹿皮はほぼ輸入に頼っている。一方、県内ではニホンジカの個体増加が様々な問題を引き起こしており、管理捕獲が進んでいる。この捕獲されたニホンジカの皮を用いて、甲州印傳にイノベーションを興せないか。これにより森から市場までを繋ぐ地域経済の好循環を創造できないか。デザイン経営を軸にした私の研究・事業化支援の一端を伝えたい。

第8回（6/9木）株式会社前田源商店 前田市郎 代表取締役：

私たちが今まで手掛けてきた商品のブランドの価値は、私たち自身が作ったものではない。つまりOEMクライアントのブランド価値で、これを自社の価値と混同してはいけないということ。そして、私たちのブランド価値は「甲斐絹（かいぎ）」の伝統の中にこそある。このブランド価値をグローバル市場に問い続け、より多くの人たちの支持と共感が得られるものづくりに挑戦していきたい。（金沢のマーケッター出島二郎氏との対話から）

3. 講義を振り返って

私たちは、とかくマスメディアやSNSに多く露出する企業情報を中心に企業を評価しがちです。その結果、地域で「稼ぎ」ではなく「良い仕事」を黙々と実践している企業の存在に目が行き届きません。ところが、山梨県には、伝統的な地場産業、農業、半導体産業、工作機械産業などに、こうした意味で他に類を見ない企業が常に経営革新に挑戦しています。

この講義では、まず第1回目に、1.地域構造分析システムリーサスを用いた山梨県の産業構造の考察 2.VUCAの時代にこうした企業が抱えている経営課題の最先端領域の抽出 3.各領域の本質と解決策、を俯瞰しました。その上で、以降7回、前出の産業を代表する企業の経営者に登壇していただき、(1)これまでの挑戦の過程(2)地域とのかわり(3)今後の挑戦への意気込み(4)若い人へのメッセージなどを熱く語っていただきました。

高校生にも開放した事業でしたので、各回冒頭で当該企業を念頭に、第1回目に確認した「先端領域」を必ず復習し、理解を深めるように努めるとともに、経営者との積極的なディスカッションを促しました。講義終了後も直接経営者と意見を交わす姿が多く見られ、県内企業への理解が進んだものと考えます。

4. 講義を通して見えた変化や効果

こうしたことを通じて受講生が、①山梨県の産業構造の多様性②経営者が持つ哲学や戦略性③これまで知りえなかった県内企業の多くの可能性④地域企業の公共性などについて理解を深めたことと感じます。

例えば、半導体関連企業の持つ技術力や本県の優位性、世界の製造業を支えるものづくり力、想定を超える進化を遂げるデジタル農業、世界の中でブランドを確立するワイン製造業など、これまでとは異なる産業の風景を実感することができたのではないかと考えます。同時に、自らのキャリアを考える時の「県内企業の立ち位置」にも有益な情報が伝えられたと確信します。

5. 受講者からのアンケート

- ・7人にわたる企業経営者の話は、それぞれの企業を興し、再興し、経営実践している姿として、大変感銘を受けるものでした。業種、歴史、規模等それぞれ違っていました。経営者として取り組んでいる姿勢は、共通していることが多いというのが感想です。
- ・この約2ヶ月に渡る講義で私は今まで考えたこともなかった山梨の産業について様々な方向から見る事ができたと思う。・・・なるべく自分がこれから役に立つ事を考えた結果この単位を履修したが、毎週毎週行われるこの1時間半の講義は、私に新しい山梨を教えてくれるようで、すごく充実していたように感じた。
- ・私は山梨県内の企業のお話を聞き、山梨には世界で勝負できる産業や資源、アイデアがまだまだたくさんあると思っています。そして、会社として成り立つために必要なものは、人の想いや行動力だとわかりました。ただ計画を行動に移すだけでなく、その過程で発見した課題をいかに分析し、解決していくのかということが重要だと思っています。お話を伺ったどの企業でもその分析と課題定義、解決策を根本から考えて取り組んでいるのだと学ぶことができて良かったです。



地域しごと概論（地域づくり）

担当講師：佐藤文昭

1. 科目の目的

「VUCA」と呼ばれる先行き不透明な時代。そんな中で地域課題の解決には、これまでと異なる問題の捉え方やアプローチが求められています。本講座では、地域で暮らし働く様々なゲストスピーカーの視点から今日の社会を捉え、仕事を通じてそれと向き合う想いを綴る「ストーリー」を受講者と共有します。5名のゲストスピーカーとの対話を通じて、受講者ひとり一人にとって自らのキャリアを考えていく上での大切なことを探ります。

2. 授業内容

- 第1回（5/20金）オリエンテーション
- 第2回（5/27金）ストーリー1：自分自身にとって大切なことを見つける
ゲストスピーカー：森口 遼也氏（山梨大学生命環境学部）
- 第3回（5/27金）自分自身の「ビジネスモデル」をつくる
ゲストスピーカーとのディスカッションを通じて、自分自身の「ビジネスモデル」を作成する。各自が自分にとって大切なことはなにかを考える。
- 第4回（6/3金）ストーリー2：新しい働き方を創造する
ゲストスピーカー：辻麻梨菜氏（株式会社トレジャーフット事業推進部長）
- 第5回（6/3金）ディスカッション
ゲストスピーカーのお話を受けて、全体及びグループにてディスカッションを行う。
- 第6回（6/10金）ストーリー3：だれもがそこにいい社会を創る
ゲストスピーカー：赤池侑馬氏（KEIPE株式会社代表取締役 <https://keipe.co.jp/>)
- 第7回（6/10金）ディスカッション
ゲストスピーカーのお話を受けて、全体及びグループにてディスカッションを行う。
- 第8回（6/17金）ストーリー4：ここでしかできないことに取り組む
ゲストスピーカー：高村直喜氏（ホトリニテ宿主 <https://hotorinite.com/>)
- 第9回（6/17金）ディスカッション
ゲストスピーカーのお話を受けて、全体及びグループにてディスカッションを行う。
- 第10回（6/24金）ストーリー5：行政で働くということ
ゲストスピーカー：廣瀬友幸氏（山梨市職員、現在山梨総合研究所に出身）
- 第11回（6/24金）ディスカッション
ゲストスピーカーのお話を受けて、全体及びグループにてディスカッションを行う。
- 第12回（7/1金）自分自身の「ビジネスモデル」をバージョンアップする（その1）
これまでのディスカッションを踏まえて、改めて自分自身の「ビジネスモデル」をバージョンアップする。
- 第13回（7/1金）自分自身の「ビジネスモデル」をバージョンアップする（その2）
次回のプレゼンテーションに向けて、グループワークを通じて「ビジネスモデル」をブラッシュアップする。
- 第14回（7/8金）プレゼンテーション
各自が作成した「ビジネスモデル」を発表し、全体で共有する。
- 第15回（7/8金）振り返り
プレゼンテーションを踏まえて、講師、ゲストスピーカーとともに全体を振り返る。

3. 講義を振り返って

今年度についても、NPOタネビの方々のご協力を得ながら、5名のゲストとの対話を通じて、「しごと」についての理解を深めることを目標とした。ゲストについては、受講者が自らの延長線上で捉えることが出来るよう山梨を基盤に活動する様々な分野の若者を中心をお願いすることで、受講者が自らの延長線上で捉えることが出来るようにした。

今年度については、漠然とゲストの話をお聴きだけでなく、各自が「パーソナルビジネスモデル」を用いてそこからの学びを自らのキャリアデザインに反映することを試みた。それにより、自らの学びを可視化することが出来た。

ゲストひとりにつき2コマ続きとし、前半はゲストのお話、後半はそれを受けたディスカッションという構成とし、受講者がゲストと対話するための時間を十分設けることとした。

しかしながら、今年度は受講者が少なく、対話の時間も昨年度比較すると発言が少なかったが、その原因の一つとして、受講者相互の対話の時間をあまり取らなかったことなどが考えられる。来年度に向けて、ワークの内容について再考が必要であると考えられる。

4. 講義を振り返って

今年度についても、NPOタネビの方々のご協力を得ながら、5名のゲストとの対話を通じて、「しごと」についての理解を深めることを目標とした。ゲストについては、受講者が自らの延長線上で捉えることが出来るよう山梨を基盤に活動する様々な分野の若者を中心をお願いすることで、受講者が自らの延長線上で捉えることが出来るようにした。

今年度については、漠然とゲストの話をお話だけでなく、各自が「パーソナルビジネスモデル」を用いてそこから学びを自らのキャリアデザインに反映することを試みた。それにより、自らの学びを可視化することが出来た。

ゲストひとりにつき2コマ続きとし、前半はゲストのお話、後半はそれを受けたディスカッションという構成とし、受講者がゲストと対話するための時間を十分設けることとした。

しかしながら、今年度は受講者が少なく、対話の時間も昨年度比較すると発言が少なかったが、その原因の一つとして、受講者相互の対話の時間をあまり取らなかったことなどが考えられる。来年度に向けて、ワークの内容について再考が必要であると考えられる。

5. 受講者アンケート

受講者からは、少人数の授業だったことから発言がしやすかったことや、様々な社会人の視点や思考からキャリア形成の事例について学ぶことが出来たことが良かったこと、また自分自身を知るためのワークが興味深かったなどの意見があった。



問題発見の技法

担当講師：佐藤 文昭

1. 科目の目的

今日、私たちが直面している地域社会の問題は、複雑化・複合化し、目に見えている出来事も、実は様々な要素が複雑に絡み合っている。本科目では、こうした出来事が「なぜ」、「どのよう」に起こっているのかを、データやディスカッションを通じて一つ一つ解き明かしていくことにより、根本にある問題点はなにかを見つけるための技法を指導する。それにより、今後、様々な分野における学修の基盤となる「問いを立てる力」を身に付けることを目的とする。

2. 授業内容

第1回（4/14 木）出来事を感じ取る

各自が関心を持つ地域の出来事について、対話を通じて問題意識を明確にする。

第2回（4/21 木）情報を集める

様々な情報源からテーマに関連するデータを収集する。

第3回（4/28 木）情報を読み解く

収集したデータを分析することにより、テーマを取り巻く問題を把握する。

第4回（5/12 木）声を聴く

各テーマに関係する人へのインタビューを行うことにより、問題について理解を深める。

第5回（5/19 木）関係づける

収集したデータやインタビューを総合し、テーマを取り巻く問題の関係性を把握する。

第6回（5/26 木）発表する

これまでの検討結果を踏まえて、各自が関心を持った出来事の問題点について発表する。

3. 講義を振り返って

今年度より新たに開講した授業科目であり、山梨総研の若手研究員を中心に企画実施した。

地域社会の中で各自が抱く興味関心や疑問をきっかけに、「氷山モデル」に基づいてそれを掘り下げていくことで、その根本にある問題点に近づくことを目標にした。データ分析やWEB検索などの情報から幅広い観点から事象を捉えることで、それを引き起こしている様々な要因などを把握するとともに、対象者へのヒアリングやアンケートによりその根本にある人の意識や価値観について理解するためのワークを行った。

また、各回において発表と受講者相互のディスカッションを行うことで、多様な視点から質問や意見などを得ることができ、それが各自の問題意識を深めることにつながったと考えられる。

4. 講義を通して見えた変化や効果

当初、表面的に問題を捉えていたが、ディスカッションを重ねることにより、各自の問題に対する理解や問いが深まっていったと感じられた。また、回を重ねることに、受講者の他者に対する質問や意見が多くなり、受講者相互の学びの場が広がっていきという変化がみられた。こうした変化を通じて、各自が学びに対して主体的に参加することや、自らの問いを深めていくことへの知的好奇心が高まったように感じられる。

5. 受講生アンケート

受講者からは、調査から問題を深め、プレゼンテーションを行うまでのインプットからアウトプットまでのプロセスを学べたことで、それを他の課題などにも活かすことが出来たといった意見があるなど、文字通り「問題発見の技法」を身に付ける上での効果があったと考えられる。

また、教員や受講者間でのディスカッションにより、楽しく議論することが出来たことが良かったとの意見もあった。一方で、多様な学年が受講する授業であったことから、アイスブレイクなどの時間を確保してほしいとの意見や、受講者間のディスカッションに教員も加わった方がよいなど、授業の進め方についても具体的な意見があった。



地域資源の保全と活用

担当講師：堀内久雄、杉山歩

1. 科目の目的

山梨県には、豊かな観光資源（文化と自然）があります。持続的な観光開発には自然環境、文化資源を保全しながら開発を進めていく必要があります。

本科目では自然や文化の保全と観光をどのようにバランスさせていくかについて理解してもらうことを目的とし、多彩なゲスト講師をお招きし、実際に行っている活動についてお話を伺いながら、自らどのように行動していくか考えてもらいます。

2. 授業内容

第1回(4/13水)：オリエンテーション

第2回(4/20水)：山梨の文化財保護 森原明廣(山梨県立博物館学芸幹)

第3回(4/27水)：山梨の縄文 長澤宏昌(鵜飼山遠妙寺住職 日本考古学協会 会員)

第4回(5/11水)：富士山 井上義景(富士山旅館組合若手グループ代表)

第5回(5/18水)：観光施設 金丸滋(株) アルプス代表取締役)

第6回(5/25水)：歴史文化と観光 守屋正彦(山梨県立博物館 館長)

第7回(6/1水)：高付加価値型観光 田川貴章(星のや富士 総支配人)

第8回(6/8水)：複合型レジャー施設 羽田亮太(株) 富士急ハイランド総務部長)

第9回(6/15水)：古民家を活用した宿泊 谷口峻哉(NIPPONIA小菅源流の村 番頭)

第10回(6/22水)：店舗・土産品開発 竜沢恒(中央物産(株) 代表取締役)

第11回(6/29水)：自然体験ガイド 太田安彦(一社) マウントフジトレイルクラブ代表理事)

第12回(7/6水)：自然アクティビティ 田村孝次(カントリーレイクスシステムズ代表)

第13～15回：大学車両による現地調査(8月10日)

3. 講義を振り返って

多様なジャンルの実践者11名を招き、地域資源とは何か？その保全に配慮し、それぞれの現場で特色ある活用を行っている事例について学ぶ機会を設定した。

通常イメージする地域資源と言われる自然や歴史、文化などだけでなく、それ以外の多種多様な地域資源も活用に工夫を凝らすことにより、人々を引き付ける魅力となりうる。併せて、保全についても、効果的な資源の活用により継続した保全の資金を得ることができ、保全のための循環を作り上げることが可能であることについて学ぶ機会を設けた。

さらに、今年度は現地研修が可能となったことから、講師として招いた2か所の特徴的な宿泊施設を訪ね、詳細な説明を受け、比較・対比させることにより、より具体的に地域資源についてどのように保全と活用がなされているのかを習得することを目的に現地研修のプログラムづくりを行った。

- ・星のや富士「五感を開き 森を遊ぶ 丘陵のグランピング」
- ・NIPPONIA小菅 源流の村「700人の村がひとつのホテルに。」

いずれも特徴的なコンセプトの宿泊施設であり、その場所に存在する必然性を追求したもてなしは、多くのファンを惹きつけてやまない。

座学、現地研修を通して本講座「地域資源の保存と活用」について、より具体的な実践例を学ぶことができたものとする。

4. 講義を通して見えた変化や効果

- ・地域資源の多様性

地域資源について、本県の多様な自然、歴史、文化、産業にとどまらず、地域の食材、地域に伝わる伝説、山村の魅力を語る地元愛にあふれるガイド、施設内の林で寝そべり見上げた木漏れ日、林間を吹き抜ける風、木々の葉のこすれあう音、たき火の炎の揺らぎと香り、さらには指定管理の対象となる公的な観光施設等々実に多様であることを知ることができた。

また、それらの地域の素材について、様々なアイデアから利用に工夫を凝らし、巧みに演出することにより、保存に必要な継続する力と資金の循環が生まれること、多くの人々を引き付ける魅力となりうることを知ることができた。

- ・現地研修での確認

河口湖北岸の丘陵地で圧倒的な非日常空間を提供する「星のや富士」、築150年の古民家を拠点に村全体がホテルとする「NIPPONIA小菅 源流の村」を直接現地で学び、二つの宿泊施設を対比させることにより、地域の資源とは何か、どのようなものがあるのかを学んだ。

また、それぞれの施設において、地域資源の発見、磨き方、来訪者への提案の手法によって循環が生まれ、他とは異なった吸引力のある魅力的な空間づくりが行われていることについて実践的に学ぶことができた。

5. 受講者アンケート

受講者の現地調査の感想

私は星のや富士もNIPPONIA小菅も両方素晴らしいと思ったので両方泊ってみたいと思ったが、もしどちらかだけと言われたら、星のや富士に泊ってみたいと思った。理由はいかなる条件でも現実世界とは別の世界に連れて行ってくれると思ったからだ。このことは富士山の話や天候が悪い日の話を聞いてそう感じた。河口湖周辺の宿泊施設は「富士山が見える」ということを推している場合が多い。山梨の貴重な観光資源であるしそれを活かすのは悪いことではないが、天気が悪くて富士山が見えなかった場合宿泊客に残念な思いをさせてしまう。しかし星のや富士は「富士山が見える」とは言っていないため富士山を売りにはしていない。そのため富士山はプラスチック的存在であり、富士山が見えなくても宿泊客を満足させることができるし、キャビンから富士山が見えた場合は満足度がより高くなる。また、雨などで天候が悪い場合もそれを逆に活かし雨の音を聞く事を楽しむためのバーを外に作ったりするなどあらゆるものを使って宿泊客を楽しませ満足させようとしていてそれがとても良かった。他にも受付などをするレセプションにはとても雰囲気のある空間が広がっていてそこで現実世界との切り替えができる。私は山梨県民で富士山は何回も見ているしたくさん自然にも触れているがキャビンの中から見る富士山は今まで見たことないくらいの絶景だったし、空中ベンチに座って感じる自然はとても心を落ち着かせるものだった。これらの理由から星のや富士に泊まりたいと思った。NIPPONIA小菅はどちらかといえば働いてみたい場所だった。村全体が一つのホテルというコンセプトは素晴らしいと思ったし、村内のお散歩のガイドに小菅村生まれ小菅村育ちの方を採用しているのも良かった。自分はまだやったことがないがインターンに行くならNIPPONIA小菅のような場所でインターンをやり、地元の人と交流しながらさまざまな経験をしたかった。



料理とワインのマリアージュ①②

担当講師：長谷部賢 堀内久雄 杉山歩

1. 科目の目的

ワインと料理には密接な関係があり、適切なワインと料理を選択することで相乗効果が生まれ、相互を引き立たせることができます。本講座では、基本的な組み合わせのルールについて理解してもらうとともに、山梨県産のワインと食材を活用して実際に料理とワインの組み合わせ方について体験的に学ぶことを目的とします。

2. 授業内容

本講座では、ワインの基本的な特性について理解してもらいます。また、料理（和食・洋食・中華など）の特性についても理解してもらいます。次にワインと料理をどのように組み合わせると相乗効果が発揮されるのか、基本的なルールについて理解してもらいます。そして、料理人が県産の食材を活用して、どのようにワインと組み合わせせていくのか実際に料理をしていただきながら、体験的に学ぶことができました。

第1回（10/12水・11/30水）料理とワインのマリアージュ概論

第2回（10/19水・12/7水）和食とワインのマリアージュ（県内料理人＋ソムリエ）

第3回（10/26水・12/14水）洋食とワインのマリアージュ（県内料理人＋ソムリエ）

第4回（11/2水・1/11水）中華とワインのマリアージュ（県内料理人＋ソムリエ）

第5回（11/9水・1/18水）チーズとワインのマリアージュ（県内パティシエ＋ソムリエ）

第6回（11/16水・1/25水）発表会・まとめ

3. 講義を振り返って

昨年度は実施が叶わなかった「料理とワインのマリアージュ講座」。中止となった後も多くの期待の声が寄せられたため、今年度は2回の実施にチャレンジした。講座の第一回の概論については座学で行い、ソムリエでもある長谷部さんの講義は、資料も充実しており受講者の評価も極めて高いものとなった。続く第2回目以降は主に県産食材を使用した料理数種類と県産ワイン3種類の組み合わせを体験し、マリアージュの理論的裏付けをソムリエの解説とともに味わい、学ぶ画期的な授業となった。さらに最終回の授業は、受講者が自らが考えた料理とワインのマリアージュ体験を発表する内容とした。社会人と学生がチャレンジングな組み合わせに挑戦し、新たな発見と充実した喜びを体験する機会となった。

4. 講義を通して見えた変化や効果

定員の半数が社会人だったので、学生と交互に座るレイアウトとした。授業を通じてマリアージュに関する意見交換のみならず、多岐にわたる意見交換がなされるなど、和やかで熱のこもった授業内容となった。講座終了後のワインを楽しむ会も毎回開催され、2回目の講座終了後には1回目の参加者を含めた合同交流会も開催された。活発な意見交換が行われ、マリアージュの知識獲得のみならず、社会人、学生ともに新鮮な出会いとなり想定しなかった効果も生まれた。



5. 受講者アンケート

○学生と社会人で交流しながら受けられる授業は、この授業が初めてでした。講義の性質上、隣の席の人とお話ししたりする機会も多く、仲良くなれて単純に嬉しかったです。プロの解説を聞きながら、プロの料理と最高のワインたちを楽しめて、この授業が今までで一番学びながら楽しめた授業でした。

普段は、何種類もワインを一度に開けはせずよくあるペアリングしかなかったもので、味付けの違いだけの食材を比較したりワインを変えてみたり、自分の料理×ワインの引き出しをたくさん新しく作ることができました。これを機に調味料やソース、食感、産地などいろんなものに目を向けてあれこれ楽しむ機会が増えそうです。これからもワイン生活に勤しんでいきたいと思えます！

○とてつもなく楽しい・おいしい講座を本当に本当にありがとうございました！学生のころの講義を思い返してみても、こんなに幸せな講座はありませんでした。大人になったからこそわかるこの講座に出会えた喜びももちろんありますが、学生時代にこの講座に出会っている現役学生さんたちをうらやましく思います。また、学生でこの講座を選択できたセンスに感服・脱帽です。なぜ選択したのか聞いてみたかったです。

私は今後、ワインのお仕事というわけではないのですが、観光に携わりたいという思いもあり、今回学んだことを少しでも活かし、観光客の方にワインや料理とのマリアージュについてお伝えできたらいいなと思います。そのためにも学び続けたいと思います。また、この講座は県内の知り合いなどにもぜひおすすめしたい講座です。講座の大きな宣伝を打つとさらに大変な反響になるのではないかと思います。情報が知れ渡れば、もっと受講希望者が増えることは間違いないと思います。

今回の講座がとても充実していたので、PENTASの観光系の別の講座も受講してみたくくなりました。



通訳入門実践

担当講師：新井 達司

1. 科目の目的

山梨県は、富士山や武田信玄などに代表される、自然環境や歴史文化財の魅力で、多くの外国人観光客を引き付けてきました。特に通常時、200万人以上の外国人観光客が訪れる本県では、英語での通訳ガイドの必要性は、喫緊の課題となっています。

本科目では、特に実践性を重視し、県内の日本遺産昇仙峡や日本ワインを想定した、通訳案内が可能となることを目標とします。まずは、対象となるコンテンツを深く理解した上で、多様で楽しく説得力のある英語表現を学んでいきます。地域に密着し特化したテーマを対象に、県内で即戦力として使える人材を育成することを目標とします。

2. 授業内容

(第1日目：2022年10月22日(土) 13:00~16:20)

*教室：山梨県立大学飯田キャンパス B208

ユニット1 日本ワインの理解(ワイン醸造プロセス、ワイン法、エアテイस्टینگ、ワインと食)、日本ワイン：講師英語プレゼン

ユニット2 昇仙峡の理解(山岳信仰と御嶽古道、特別名勝と水晶研磨技術)、昇仙峡：講師英語プレゼン

(第2日目：2022年10月23日(日) 13:00~16:20)

*教室：山梨県立大学飯田キャンパス B208

ユニット3 日本ワイン・昇仙峡：受講者英語プレゼン、講師解説とディスカッション

ユニット4 日本ワイン・昇仙峡：受講者英語プレゼン、講師解説とディスカッション

(第3日目：2022年11月12日(土) 13:00~16:20)

*教室：山梨県立大学飯田キャンパス B208

ユニット5 日本ワイン・昇仙峡：受講者英語プレゼン、講師解説とディスカッション

ユニット6 「現地演習」のご案内、平成5年度「演習テーマ」に係るご提案・意見集約、その他各種発表

(第4日目：2022年11月13日(日) 9:45~17:00)

「現地演習」：サントリー登美の丘ワイナリー → 金櫻神社、富士山・金峰山遥拝所 → 勝沼ぶどうの丘
○ 借上げバスにて移動、バス車中は英語ガイド演習

3. 講義を振り返って

地域の観光資源の魅力について、自分の英語で力強く伝える演習を行いました。それにはまず、外国人目線で観光資源の魅力ゼロから捉え直すことが第一です。そうした魅力を認識できてこそ、取って英語で伝えようとするエネルギーが生まれるもの。講師のモデルプレゼン、また受講者による熱いプレゼン(1人20分程度)をベースにして、受講者どうしが英語を用いて様々な意見・アイデア・手法を交換し合えるよう、講座では英語コミュニケーションを常時ファシリテートするよう努めました。

当講座はオールコミュニケーションの演習を重視した、地域の通訳案内士向けリカレント講座でもあります。山梨の観光資源を自分自身の英語で誇りを持って熱く語る、そうした通訳案内力の強化に向けて一縷の貢献ができれば何よりです。

4. 講義を通して見えた変化や効果

受講者のみなさまの積極性が、授業の回を重ねるごとに高まりました。そうした受講者のみなさまからいただいた数々のフィードバックを反映して、来年度の「演習テーマ」としては、『日本ワイン』(現地演習・テイस्टینگあり)を継続するのに加えて、新たに『信玄公祭り』(インバウンド客のガイド手法)あるいは『富士山』(富士山信仰等の通訳手法)などを検討しております。本年度同様、英語ベースの参加型授業を行います。

5. 受講者アンケート

主なものを抜粋します。

- ・ワイン用語の英語解説を更に多く行うべき。
- ・テイस्टینگのないワイナリー演習はいかがなものか。
- ・バスで巡る現地演習はオール英語ツアー、有益だった。
- ・講義中、英語を更に多用すべき。
- ・講師と受講者との双方向授業、全員参加型の授業を継続されたい。



実用中国語

担当講師：賀南

1. 科目の目的

山梨県は、富士山や武田信玄などに代表される、自然環境や歴史文化財の魅力で、多くの外国人観光客を引き付けてきました。特にその言語別内訳をみると、中国語圏からの訪日客が半数以上を占め、圧倒的多数を占めています。本科目では、中国語圏の観光客に焦点を当てた、実践的なガイド研修を行います。観光案内に必要な基本的なやり取りを中心に、本県をガイドする際に使用頻度が高い単語、基本文型、そして会話時のポイント等を学んでいきます。特に実践性を重視し、県内の武田神社と甲州夢小路を想定し、通訳案内が可能となることを目標とします。

2. 授業内容

(第1日目：2022年12月10日(土) 13:00~16:20)

*教室：山梨県立大学飯田キャンパス B208

ユニット1 ウォーミングアップ、あいさつとお迎え(热身、问候和迎接)

ユニット2 スケジュールの説明(说明日程安排和日程变更)

(第2日目：2022年12月11日(日) 13:00~16:20)

*教室：山梨県立大学飯田キャンパス B208

ユニット3 食事・買い物の案内(就餐和购物)

ユニット4 県内のワイン・郷土料理・温泉・果物・土産物の案内(介绍山梨县的观光资源)

(第3日目：2022年12月17日(土) 13:00~16:20)

*教室：山梨県立大学飯田キャンパス B208

ユニット5 日本文化の紹介-神社(介绍日本文化-神社)

ユニット6 県内の観光スポットの案内(山梨县观光景点的导游)

(第4日目：2022年12月18日(日) 10:30~16:20)

*集合/解散場所：武田神社もしくは甲州夢小路(山梨県甲府市)

ユニット7~ユニット9 ユニット1~ユニット6で身につけた表現を、武田神社と甲州夢小路で実践します。

通訳案内の疑似的体験を通して、より円滑なコミュニケーションと柔軟性のある対応能力を目指します。

3. 講義を振り返って

本授業は、山梨県の観光案内で使用頻度の高い中国語を、シーンごとに要点をおさえて、シンプルな短い会話文で学ぶことができた。座学では、ロールプレイングや個人・グループ発表を多く取り入れることによって、最終日の学外実習でもすぐにアウトプットできるように心がけていた。3日間の座学と最終日の学外実習を通して、既習した中国語を積極的に活用するという姿勢の変化が見られた。また、地域のニーズや観光ガイドの仕事内容についても理解が深まり、加えて社会人、高校生に直接キャンパスに足を運んでもらうことで、大学に親しみを持ってもらい、大学生と世代の異なる受講生との交流機会を持つことができた。改善点としては、参加者の語学のレベルにバラツキがあることで、授業デザインや進行方法に大きな課題を与えられることになった。また、学外実習について、スケジュールの設定、場所や時期などを見直して、来年度は気候のよい10月に中華圏からの観光客も多い河口湖エリアで実施したい。

4. 講義を通して見えた変化や効果

中国語を学ぶことだけではなく、もっと中国語で発信したい、実際の観光客を相手に能動的に実践したいという姿勢の変化は今回の授業を通してもっとも大きな成果であったと思われる。また、観光通訳案内士の職自体の魅力を知り、授業後自ら資格取得方法について調べ、ゼミなどの活動に参加し、地域観光PR事業に携わる意欲を示す参加者が複数現れてきた。



5. 受講者アンケート

〔座学について〕

- ・実用的な表現をたくさん学ぶことができたので、とても有意義な時間が過ごせました。
- ・中国語の表現方法や通訳の方法の理解が深まりました。
- ・失敗しても分からなくても、緊張せずに受講することができた。とても居心地の良い授業だったと思う。
- ・少し内容が多くて覚えきれなかったことがあったのでフィールドワークで使いそうな原稿などをもう少し練習する時間があるといいなと思いました。
- ・色いろな表現方法を知ることができて良かったです。また、身近な場所の中国語表現を知ることができたことは大きな収穫でした。
- ・普段学ぶことの少ない表現を学ぶことができた。インプットだけではなく、アウトプットをする機会も多くあった。
- ・とっても楽しかった。実際に観光ガイドはどのようにやるのかイメージがついた。
- ・観光客側との会話やコミュニケーションをもっと能動的に出来れば良かったなと思いました。
- ・通訳案内士として使える表現や知識の取得、実践はもちろん、外部講師のお話など職自体の魅力や経験について聞くことのできるとても貴重な授業でした。
- ・ガイドをどのようにやるのかわかりやすく学べた。すぐに実践できるフレーズを学び、すぐにつかえるようにできた。

〔フィールドワークについて〕

- ・学内だけにとどまらず、実際にフィールドワークを行い座学で学習したことを実践できるのが良かった。
- ・フィールドワークで使いそうな単語を調べておけばよかったなと思った。座学の時とは雰囲気も変わり、発表のしやすい雰囲気だったのが良かったと思った。
- ・実用的な表現を学ぶことができたところが良かったと思います。改善点は、フィールドワークのスケジュールを細かく決めて欲しいです。
- ・せっかくバスを貸し切っていたので、もう少し他の場所（博物館や美術館）などのガイドもしてみたかった。お客役の練習（希望を伝える、質問をする）をもう少しして欲しかった。ガイド役が発表をした後、なかなかお客役から質問が出なかったのが惜しいと感じた。
- ・開講時期をもう少し暖かい時期（10月）などにしてほしい。



ネイチャーガイド演習1

担当講師：吉田 均

1. 科目の目的

山梨県には、世界文化遺産やユネスコエコパークなど、自然の美しさはもちろん、多様な歴史や文化を色濃く残す山岳地域が広がっています。本科目は、ネイチャーガイドをキーワードに、山岳信仰などの地域の歴史や文化なども紹介しながら、季節に合った多様な視点で、その現代的な意義や概要を学びます。また実際に県内で実施されているネイチャーツアーに顧客として参加し、体験的な学習を行います。

2. 授業内容

ネイチャーガイドの活動内容やユネスコパークについて学習し、実際に甲武信ユネスコエコパーク内の深草観音でガイドツアーを体験しました。

ネイチャーガイドをキーワードに、山岳信仰などの地域の歴史や文化について、季節に合った自然環境の紹介も加え、多様な視点から、その現代的な意義や概要を体験的に学びました。

3. 講義を振り返って

甲武信ユネスコエコパークを、五感を使って体験的に理解するため、深草観音での山岳ガイドをベースとしたネイチャーツアーを、地元のアウトドアツアーを専門とするGATESと連携協力して試作しました。学生自身も、トレッキングチーム維持のためのフロント、バック、危機管理、タイムキーパー、記録などの役割を全員で分担して実施したため、緊張感を持って参加していただくことができました。また歴史文化財や山岳信仰の聖地が、その地質や植生などの自然環境とも密接に関係することを学び、大変好評でした。

4. 講義を通して見えた変化や効果

* 同スタイルのツアーは大変好評であったため、翌2023年度も、甲府市歴新文化財課との共催で、周辺地域で市民向け事業として実施される予定です。同講義の一部履修者も、企画側スタッフとして参加する予定です。

* また参加者の一部は、同年10月29日に学内向けに実施した湯村山を対象とするネイチャーツアーでは、企画サポーター側スタッフとして参加しました。参加者からは、来年度は湯村山でも市民向けツアーを実施したいとの要望が寄せられた。

5. 受講者アンケート

- ・ 深草観音は、美しく神秘的であった。心が浄化され深いため息の出る場所だった。
- ・ 甲府市の近郊に、このような山岳信仰の霊場があったことに驚いた。
- ・ 動物の痕跡がいくつも見つかり、多様な生物が生きていることを実感した。
- ・ 古道の歩き方について学ぶことができた。



ネイチャーガイド演習2

担当講師：吉田 均

1. 科目の目的

山梨県には、世界文化遺産やユネスコエコパークなど、自然の美しさはもちろん、多様な歴史や文化を色濃く残す山岳地域が広がっています。本科目は、ネイチャーガイドをキーワードに、山岳信仰などの地域の歴史や文化、また日本国内での事例研究なども紹介しながら、季節に合った多様な視点でのツアーの意義や概要を学びます。

あわせて実際に「甲武信ユネスコエコパーク」内でのネイチャーツアーの企画立案を補佐し、当日はガイド研修に参加することで、その企画や実施方法を体験的に学びます。

2. 授業内容

御嶽昇仙峡の自然環境と歴史や、日本遺産の構成文化財について学習し、2日間に分けてガイドツアーを体験しました。第1日目は、昇仙峡レジェンドガイドと共に天鼓林から甲府市グリーンラインを散策。その後は昇仙峡ロープウェイで移動し、弥三郎岳山頂までトレッキングしました。第2日目は、日本遺産である御嶽昇仙峡周辺の構成文化財ツアーを行い、金櫻神社から白山社、そして板敷溪谷を經由して、常設寺を参観しました。

3. 講義を振り返って

甲武信ユネスコエコパークと日本遺産を体験的に理解するため、昇仙峡日本遺産ガイドをベースとしたネイチャーガイドを、甲府市と昇仙峡観光協会と連携協力して試作しました。学生には、トレッキングチーム維持のためのフロント、バック、危機管理、タイムキーパー、記録などの役割を全員で分担し、緊張感を持って参加していただくことができました。通常は人が行かない白山社を参拝し、昇仙峡山での山岳信仰をベースとするトレッキングを実施し、1000年続く信仰の道に実際に触れていただき大変好評でした。

4. 講義を通して見えた変化や効果

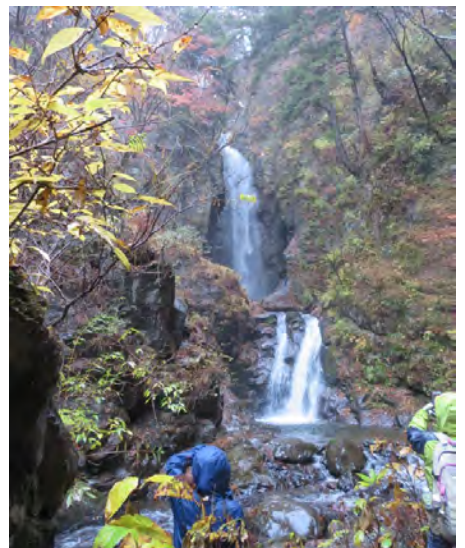
*本講義は、日本遺産での古道をトレッキングする際のアシスタントガイド制度のモデルを立案するため、昇仙峡活性化推進協議会と連携して企画されました。実際に、甲府市観光課の職員に随行していただき、全講義履修者13名を昇仙峡地域活性化推進協議会の樋口雄一会長（現甲府市長）名で、「日本遺産昇仙峡アシスタントガイド」として認定していただきました。

*またこれまでに本講義に参加した一部の学生は、その後同協議会が実施した、文化庁支援事業「御嶽昇仙峡日本遺産フェスト」で、山梨県立大学のブースの設営との報告会を開催し、一般市民80名ほどの来場者がありました。

*さらに上記の学生の一部は、本講義をアレンジし、JICAの根技術協力事業「農村体験型ツーリズム推進のための青少年教育プログラム構築」の内、2023年3月にベトナム政府が派遣した日本研修プログラムを昇仙峡で実施するためのスタッフを務めました。

5. 受講者アンケート

- ・紅葉が、実にきれいであった。
- ・昇仙峡の歴史、信仰などの専門的なお話が伺え、昇仙峡の魅力に改めて触れられた。
- ・2日目は、雨であったが、その風景が山岳信仰の神秘さを際立たせていた。
- ・日本遺産の魅力に触れることができた。



日本ワイン歴史マイスター養成講座

担当講師：仲田道弘、安藤勝洋

1. 科目の目的

山梨県の地域資源として産業・観光分野で注目を集める「日本ワイン」をテーマに、明治期日本ワインに携わった人物にフォーカスを当てた学びです。日本のワインの歴史について学び、キャリアに活かしたい方を対象とします。ワインに関する新たな視点・知識を獲得し、自身の仕事・キャリアをより創造的なスタイルにスケールアップすることを目的とします。

2. 授業内容

第1回 (10/08 土) 世界のブドウとワインの歴史概論

- (1) ワインとは
- (2) 世界のブドウとワインの歴史
- (3) 中国のブドウとワインの歴史

第2回 (10/22 土) 日本のブドウの歴史

- (1) 甲州ブドウはどこから来たのか？
- (2) 日本のブドウの歴史

第3回 (11/12 土) 日本ワインの歴史 (古代～明治)

- (1) 日本のワインの歴史
- (2) 明治期ワイン造りの全貌

第4回 (11/26 土) 日本ワインの歴史 (明治-各論1)

- (1) 津田仙 (2) 山田宥教 (3) 詫間憲久

第5回 (12/03 土) 日本ワインの歴史 (明治-各論2)

- (1) 藤村紫朗 (2) 大藤松五郎 (3) 桂二郎

第6回 (12/17 土) 日本ワインの歴史 (明治-各論3)

- (1) 高野積成
- (2) 前田正名
- (3) 高野正誠、土屋龍憲

第7回 (1/07 土) 日本ワインの歴史 (明治-各論4)

- (1) 宮崎光太郎
- (2) 神谷伝兵衛、近藤利兵衛
- (3) 川上善兵衛

第8回 (1/21 土) 日本ワインの歴史 (大正～今日)

- (1) 大正・昭和期
- (2) 平成・令和期
- (3) 日本ワイン市場の現状と今後の展望

3. 講義を振り返って

- ・講義の受講生はほとんどが社会人であったため、この講座の情報をワインに関わる仕事や活動のため活かそうとしており、本当に熱心に受講していただいた。
- ・講義で説明するパワポは、毎回150～200枚程度となったが、これをPDF化して1週間前に全員に配布した。準備の時間はかかったが、この事前配布資料が授業の理解に対してかなり効果があったことが実感できた。
- ・また、本講座はオンラインであり、社会人にとって自分が希望する時間帯での聴講が可能であったので、理解向上に効果的であった。
- ・オンデマンドによる講義の配信も、一定期間行った。当初は1週間だったが、受講生の希望によって2週間に延長した。このため、3回、4回と繰り返して視聴した方が多く、効果的であった。
- ・受講確認のための質問もオンラインで行った。まとめて返事をする事となったが、かなり突っ込んでの質問が多く、質問への答えにかなり時間をとられた。質問への答を全員に配布したことも、理解力は上がったと考えられる。
- ・ただし、意見交換というところまではいかなかったのが残念であった。最後くらいはワインを飲みながら、ざっくばらんに意見交換をしたいとの声も上がった。

4. 講義を通して見えた変化や効果

- ・日本ワインの歴史は、これまで一部の地域や企業のマーケティングのために利用されるだけだった。
- ・しかし、この講義を通して「歴史を学ぶのではなく、歴史から未来を学ぶ」ということが、受講者に見えてきたことが最大の変化や効果であった。
- ・今後の日本ワインの課題に対し、一人でも多くの人たちが正しい方向を歴史を通して確認することを期待したい。

5. 受講者アンケート

- ・大量の文献、資料、データをもとにお話しいただき、初めて知ることも多く大変勉強になった講座でした。このような状況下でなければ仲田先生や参加の皆様と日本ワインを酌み交わしながらお話ししたかったな、と思っています。
- ・仲田先生の資料はボリュームがあって読むのに大変であったが、実際の文献を見ることで納得し理解することができた。これだけの資料を探しまとめられことはとても労力のいることで大変だったと思う。貴重な資料に触れさせていただき、とても感謝しています。
- ・毎回膨大な資料でわかりやすい講義ありがとうございました。今後も参考資料や書籍を更に読みながら日本ワインについてより深く勉強して参ります。
- ・動画を後で見直せるように録画配信をしてくれたことがありがたかったです。そして今回の全講座を無期限に見返せるようにしてほしいです。プラス料金を支払ってでも、手元に勉強のツールとして残しておきたいです。
- ・今回の講座では有償ではございましたが、スライド作成や講義環境の管理等だけでなく、これまで仲田先生が資料調査へ費やしました時間や費用・その結果明らかになったことへの功績を考えると、卑近な言い方ですが金額はもっと上になってもおかしくは無いと思います。
- ・オンラインで後日配信があったこと。土曜日の日中は出かけていることが多いので、リアルタイムでリアル会場（大学）での参加が難しいため、とても助かった。また後日配信で、精製速度を1.2倍速、1.5倍速で視聴することができたのもとてもよかった。事前にPDFで資料配布してあるのも、よみかえすことができてよかった。講義の内容では、膨大な資料を仲田先生が時系列と横の動きをもとに、かみ砕き、ワインのことだけでなく、当時の歴史背景なども知れたのも良かった。2週間に1回のペースも自分の中で無理なく続けられた。これが毎週だとちょっとたいへんだったのでよい授業のペースだった。
- ・気軽に応募したのですが、思ったよりも量が多くて大変でした。でも、すごくおもしろくてたいへん勉強になり、はまってしまいました。感謝しております。ありがとうございます。数回、時間が無くなってしまい最後の方がすごく駆け足で端折った感があったのですが、少しくらい時間が伸びてもいいので、飛ばさずに説明して欲しかったなあ、と思いました。

おもてなしマイスター養成講座

担当講師：高野登、安藤勝洋

1. 科目の目的

「おもてなし」は一方的に提供する「サービス」のことではありません。同じ目線に立ち、相手の気持ちになっ
て行く誠意ある対応のことです。そうして、温かな人間性が触れ合った瞬間に「感動」が生まれるのです。つま
り「おもてなし」とは、相手に自分の心を寄り添えて対話をする姿勢そのものなのです。心は相手に見えなく
ても、心遣いや心がけ、心構えはちゃんと伝わります。

「おもてなし（ホスピタリティ）」は、観光に携わる人たちだけのものと思われがちですが、そうではありません
。「おもてなし」の語源は、聖徳太子の「和を以て尊しと為す」までさかのぼると言われます。すなわち、
「何を以て何を為す」のかを常に心に思い描くということです。

本講座では、サービス・ホスピタリティの意味を理解し、さらにブランディングや付加価値創造について事例を
中心に学びます。また、付加価値創造を生み出すための人材育成や組織経営のあり方についても学びます。

2. 授業内容

第1回（10/12水）	ホスピタリティ	サービスからホスピタリティへ～価値創造のパラダイムシフト～
第2回（10/26水）	付加価値	サービスを超える瞬間～価値を生み出す働き方～
第3回（11/16水）	ブランディング	進化するホスピタリティ～感性価値のパラダイムシフト～
第4回（11/30水）	働き方	社員が仕事にワクワクする姿を実現する方法
第5回（12/14水）	モチベーション	ホスピタリティ溢れる組織づくり～モチベーション・アップを目指す～
第6回（12/28水）	リーダーシップ	いまリーダーに求められるもの
第7回（1/11水）	顧客満足	感動と伝説が生まれる舞台づくり
第8回（1/25水）	耀く組織の作り方	～すべては感謝と笑顔から～

3. 講義を振り返って

・講義の受講者について、履修者は学生のみであったが、加えて社会人（やまなし観光推進機構会員）が聴講し
た。

・講義は、高野講師の講義内容を、同時双方向のオンライン配信と、録画を講義後1週間、オンデマンド配信す
る方法で進めた。オンデマンド配信を併用したことで、学生にとっては見直しができ、社会人にとっては、希望
する時間帯での受講が可能となった。

・また学生にとっては、社会人が同じオンライン空間のなかで講義を聞いていることで、社会人の聴講の様子な
ども刺激になったのではないかと感じる。

・毎回、感想フォームにて、受講者のフィードバックを集めた。学生は、今後のキャリアに向けて、自分自身を
どう高めていくかという視点で聞くものが多く、社会人は目の前の職場環境の中で、環境を改善したり、職場の
モチベーションをどう上げるのかという観点が感じられた。

・受講者からの質問については、一問一答の回答ではなく、高野講師の講義内容のなかのエッセンスとして含め、
多様なケースなども交えながら回答する形となり、受講生にとっては応用的に確認できたのではないかと考える。

4. 講義を通して見えた変化や効果

受講した学生からは、自身の人生観や仕事に対する価値観が大きく変化したとのフィードバックが多かった。自
分をどのように高め、アップデートしていくのか、そのためには、日々の行動の積み重ねや他者への感謝等が大
切である、すぐに行動に移していきたい、といった変化が生まれた。

5. 受講者アンケート

・この講義を通して、自分の仕事観や人生観がアップデートされたように思う。これまで、漠然と将来に不安を抱いていたが、
高野先生のお話を聞いたことで、年を重ねていくことや働くことに対してポジティブなイメージを持つようになった。

・今後社会人にとって大切になる知識や価値観を主に学ぶことができました。それだけではなく今の学生生活でも活用できる
知識を得ることができました。例えば、リーダーシップとは何かという話では、礼節を大切にし人の価値を高めることが目的
であると話されていましたが、それは今まで私が考えていたリーダーシップとは違うもので驚きました。

・高野さんのリッツカールトンの経験を元に、目的を持ちビジョンを描くことの大切さ、リーダーに必要なことなど普段生活
しているだけでは考えないようなことを聴くことができました。

・おもてなしという本題はもちろんですが、それだけでなく自分の今後の人生そのものの参考になる内容がとても多く、これ
からもこの講義で聞いた話を役立てていきたいです

・自分に満足することなく、再考し、学び続ける。感謝の気持ちを大切に人と関わる。そんな姿勢を大切に、幸せを追い求め
ていきたいと考えた。

・私は「感謝」の大切さと、それが周りに及ぼす影響の大きさを学び、なにごとにも感謝する姿勢が大切なのだと実感しまし
た。今後は、自分自身を高めるためだけでなく、人の価値を高められるようになるためにも、まずは手を胸に当て自分が感謝
をし、必要とされる人間になりたいです

・この講義を受講して今後のキャリアに役立つと思ったことは、「はたらくこと」への姿勢や心構えを学べたことです。私は
今まで就職するのが億劫に感じ、はたらくことは義務であり、苦痛なことという認識がありました。しかしこの講義で、はた
らく上で自分が持つべきである積極的な姿勢や、良い働き方を知り、さらに先生が今まで歩んできたキャリアの話聞いて、
私の「はたらくこと」への悪いイメージが少し変わって、ポジティブな気持ちになりました。

観光実践マネジメント講座

担当講師：仲田道弘、杉山歩

1. 科目の目的

本講義は、経営ジャーナリスト・中小企業診断士である瀬戸川礼子さんが約30年にわたる取材の中で培った知見を、現役の女将さんとともに紹介していく講座です。

観光サービス業をはじめ、あらゆる事業に欠かせない高付加価値化。この土台となる考え方と具体的な実践マネジメント方法を、良い会社の実例とともに学びます。

全国の旅館、ホテル、飲食業、またものづくり企業など、多様な業界に高付加価値化のヒントがあります。

現地の写真や図表を用いながら、感性と論理の両面から実践的なマネジメントを学びます。

また、現場のプロをゲスト講師に迎え、リアルな思いと行動を直接聞く機会も設けます。

2. 授業内容

- | | |
|---------------|--|
| 第1回 (10/12 水) | 高付加価値を目指す組織マネジメント理論 顧客満足 (CS) と社員満足 (ES) |
| 第2回 (10/26 水) | 事例1：ゲスト講師：富山県「ホテル黒部」女将・中島ルミ子さん |
| 第3回 (11/16 水) | 事例2：ゲスト講師：宮城県「南三陸ホテル観洋」女将・阿部憲子さん |
| 第4回 (11/30 水) | 中間まとめ |
| 第5回 (12/14 水) | 事例4：ゲスト講師：石川県「宝生亭」女将・帽子山麻衣さん |
| 第6回 (12/28 水) | 事例5：ゲスト講師：クレーム対応のプロである高萩徳宗さん |
| 第7回 (1/11 水) | 事例6：異業種の好例に学ぶ高付加価値マネジメント |
| 第8回 (1/25 水) | まとめ |

3. 講義を振り返って

オンライン授業の形式であったが、学生からは多くの意見やコメントがあり、対面授業同様にアクティブな講義となった。また、必要に応じてブレイクアウトルールを活用したグループワークを取り入れ、社会人と学生が積極的に交流する機会を設ける事ができた。特にオンラインの形式を活用した事で、東北、北陸、山陰地方の有名旅館の女将の話を直接聞く機会を設ける事で、学生たちに貴重な機会を提供できた。また、主に社会人学生に向けて、オンデマンドでの講義配信を行いオンタイムでの聴講が難しい受講生に対しても適切なフォローアップが出来た。

4. 講義を通して見えた変化や効果

全国の有名旅館の女将さん達から直接話を聴く講義やクレーム対応についての講義を通して、観光サービスの実務的な内容について実感を伴った経験をし、学生たちの個人的なキャリア設計に具体性をもって考えられる様になった。

やまなしワイン入門講座

担当講師：長谷部賢、堀内久雄、杉山歩

1. 科目の目的

日本の産業ワイン発祥の地であり、日本を代表するワイン産地である山梨県ですが、どんな所が評価されているのかすぐに答えられる人は少ないと思います。本講義では山梨ワインの魅力について座学と現地での体験・視察を通して、産業・観光の両面から学び、山梨の地域資源ワインについて初歩的な内容について理解する事を目的とします。

2. 授業内容

本講座では、日本ソムリエ協会理事の長谷部賢氏、本学特任教授仲田道弘氏の座学を行ったあとは実際にその原料となるブドウの栽培現場の見学、栽培についての基礎知識を学ぶとともに、笠かけ等の作業体験を行なった。秋には収穫体験を行いそのブドウがワインとして醸造される工程を学び、まとめとして長谷部賢氏の解説を交えた簡単なワインのテイスティングを実施した。

第1回（6/18土）座学：山梨ワイン概論（非常勤講師：長谷部賢（ソムリエ））

第2回（6/18土）座学：山梨ワインの歴史（特任教授：仲田道弘）

第3回（6/26日）実習：ブドウ栽培（ゲスト講師：池川仁（葡萄栽培家・（株）アイヴァインズ代表取締役））

第4回（10/9日）実習：収穫・醸造体験（ゲスト講師：井島正義（醸造家・シャトー酒折））

第5回（10/22土）実習：テイスティング（実施場所：ロゼママン）

3. 講義を振り返って

「ワイン県やまなし」をより身近で体験できる講座とした。2回の座学「山梨ワイン概論」「山梨ワインの歴史」の後、農場、ワイナリーでの体験を実施した。農場での実習ではブドウ栽培の第一人者池川仁氏のブドウ栽培の理論と実践について学んだ後、棚栽培の甲州種の畑での雨除けの傘をかける作業を実施した。葡萄畑は細やかな手入れがされており実に美しい景観となっていた。作業終了後何人もの社会人から「このぶどうのワインはいつできる？どうすれば手に入るか？」との質問を受けた。参加者と葡萄畑そしてワインがぐっと近づいたのを感じた。第4回目はワイナリーでの実習とした。垣根栽培のベリーAの収穫体験、そのブドウの果汁を絞り、ワインへと醸造する工程を醸造所内を説明を受けながら見学した。最終回は甲州とベリーAを原料とするワインのテイスティングをソムリエ長谷部賢氏の解説とともに体験した。普段体験することのない講座を開催したことで、参加者にとって山梨ワインへの思いがより深いものとなったと感じた。

4. 講義を通して見えた変化や効果

ぶどう畑やワイナリーでの実習がこれほど受講者を惹きつけるものになるとは想像していなかった。人は直接体験すること、自らが当事者として参加することが極めて重要だと感じた。池川さんの栽培したブドウを原料とし、酒折ワイナリーで醸造されたワインへの思いが一気に深まることを実感した。次年度の講座への期待の声も数多く寄せられた。さらに充実した講座となるよう努め、受講生の期待に応えたいと思う。

5. 受講者アンケート

○池川さんのブドウ栽培は、池川さんの経験と科学の知の結集であることを知った。土壌づくり（水はけ、その土地の持つ栄養素一つ一つ）、芽かきの剪定（成長点に近づくほどマグネシウムの欠乏が起きやすい、受精が強いとき・実がつかないとき）、雨対策（笠かけや施設など）などの作業一つ一つに裏付けがあり、科学的根拠がある。さらに、それを毎年繰り返しながら改良を重ね、池川さんの経験を合わせて、今のブドウ栽培に至っていることを知った。池川さんの「まだ50回しか経験していない」という謙虚な姿勢が、醸造用ブドウ栽培の質を保たせているのかもしれないと感じた。

○今回このような講義に参加できて大変よかったと感じております。全講義を通して、ワインの歴史から、笠かけ、収穫、ワイン醸造工程の見学、テイスティングの生産される場所から消費者の目線までひとまとまりに学べたので、得るものが多い講義だな、と感じました。特に、テイスティングの講義では、実際に飲みながら、長谷部さんの解説も聞きながら実践的に学ぶことができたので、ただワインを飲むだけ、話で聞くだけ、とは違う学びを得られたと思います。また、長谷部さんが作ってくださった資料がとってもわかりやすく、保存しておいて地元にいるワインが好きな母にも見せてあげたいと感じました。「ワイン県山梨」にきたからこそ学べたことですし、山梨県立大学に入学したからこそ受講できた講義だと思っております。このような機会があってとってもよかったです。山梨県で、山梨ならではのことが学べる機会があって、その機会を作ってくださいありがとうございました。

来年の講義への意見ぜひ来年もこのようなとっても役に立ち、楽しくて、なかなかない講義を継続して行って欲しいと感じています。学生の私は、普段友人とのご飯では、ワインを頼む機会がないですが、ワインについて知識があれば、頼みやすくなりますし、楽しみが増えると思うので、社会人の方だけでなく、学生の方にももっと参加して欲しいと思っています。



ワークショップデザイン

担当講師：田中友悟

1. 科目の目的

ワークショップとは、「普段とは異なる視点をもって、創りながら学ぶ活動」のことを指します。近年では住民参加のまちづくりや、企業の新商品開発、組織のチームビルディングなど、様々な現場でその手法が採用されています。その実践にはすでに100年もの歴史があり、近代的なトップダウンに対するカウンターカルチャーとして発展を遂げてきた歴史があります。

複雑化する社会に向き合うためには、立場や主義主張を超えたコミュニケーションによる課題解決や新しい問題設定の力が必要となります。本科目は社会課題解決のためのコミュニケーション能力の習得を目的として、参加・共創型社会に求められるワークショップデザインの技術・姿勢を実践的に学び、効果的な対話の場をつくる能力を身につけます。

2. 授業内容

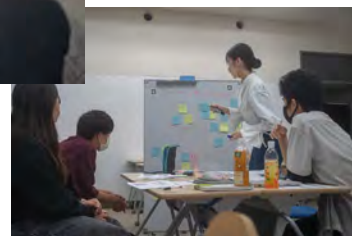
- 第1回 (5/18 水) オリエンテーション (VUCA時代に求められるコミュニケーション能力・講義の詳細)
- 第2回 (5/25 水) ワークショップデザイン概論 (ワークショップの特徴・歴史・理論的背景)
- 第3回 (5/25 水) 演習「話し合いにデザインは必要なのか」
- 第4回 (6/1 水) ワークショップをデザインする① (ファシリテーターの役割と求められる姿勢)
- 第5回 (6/1 水) 演習「ファシリテーターによる場づくりを観察する」
- 第6回 (6/8 水) ワークショップをデザインする② (ファシリテーターに求められる技術・手法)
- 第7回 (6/8 水) 演習「対話のためのファシリテート実践」
- 第8回 (6/15 水) ワークショップをデザインする③
(学びのプロセスを支える問いの力・よい問いとはなにか)
- 第9回 (6/15 水) 演習「よい問いをつくるためのエクササイズ」
- 第10回 (6/22 水) ワークショップをデザインする④「ワークショッププログラムを構成する」
- 第11回 (6/22 水) 演習「創発のためのファシリテーション実践」
- 第12回 (6/29 水) ワークショップをデザインする⑤ (地域からの問題提供・質疑応答)
- 第13回 (6/29 水) 演習「ワークショッププログラムを作成する」
- 第14回 (7/27 水) 実地演習「地域課題を考える地域ワークショップの企画運営」
- 第15回 (7/27 水) 講義の振り返り

3. 講義を振り返って

他者との共創経験をとおして、(1)日常を異化する視点と(2)自身の自律的な思考を育てていく練習として「ファシリテーション」「ワークショップ」を学ぶ演習を実施した。カリキュラムは対話や場づくりのための具体的な姿勢や技術を養うための構成ではありながら、より広義の社会能力としてのコミュニケーション概念を伝えることを心掛けた。最終課題では、山梨市におけるワイン特区制度の活用をテーマに若手職員さんの議論の場づくりを企画運営いただいた。企画の過程では、市で課題と認識されていた「市の発信能力」への執着をリフレームし、山梨市に根ざしたワイン特区の姿を丁寧に構想する場をつくることができた。ファシリテーションには幾つもの型があるように、受講生それぞれの特徴や性格に合ったコミュニケーション能力を獲得していただけたように思う。

4. 講義を通して見えた変化や効果

講義の初回では「グループワークでうまく話が進まないことや違和感があるまま話が進んでしまう場面であればいいかわからない」という意見が多かったが、多くの学生がその原因や対処法を十分に理解し、最終課題ではグループ内で意見の創発が起きる場づくり能力を獲得していた。また、ミクロな場づくりだけではなく、日常における視点のずらし方や、場面に合わせた適切なコミュニケーションの作法についても深く理解していただけたように思う。



まちづくりの思想と技術

担当講師：田中友悟

1. 科目の目的

地域課題の解決には、問題を捉えて構造化する分析力、資源をつなぎあわせて価値をうみだす編集力、活動を事業へと育てていく企画力など、複合的な能力が求められます。「まちづくり」とは、そのような課題解決のための実践知に加え、私たちみんなが共有する暮らしの土台ともいえる「公共」を育てていく営為です。それは、私とまちの幸福な関係を築くための思想であり、技術だといえます。

本科目では、世間一般には抽象的とされる「まちづくり」という概念を捉えなおし、私たちの身近な行為である「作る」と「使う」の視点から私とまち（地域）を結ぶまちづくりの技術・姿勢を学びます。

2. 授業内容

第1回 (10/26 水)	オリエンテーション (まちづくりとはなにか・講義の詳細)
第2回 (11/2 水)	まちづくり概論① (まちづくりを支える理論)
第3回 (11/2 水)	まちづくり概論② (日本におけるまちづくりの歴史・多様な実践のかたちとその可能性)
第4回 (11/9 水)	ゲスト講演「〈私〉から始めるまちづくり」/まちづくりの思想と技術を知る①
第5回 (11/9 水)	ディスカッション「〈私〉から始めるまちづくり」
第6回 (11/30 水)	ゲスト講演「〈公〉から拓がるまちづくり」/まちづくりの思想と技術を知る②
第7回 (11/30 水)	ディスカッション「〈公〉から拓がるまちづくり」
第8回 (12/7 水)	ゲスト講演「〈公共〉を支えるまちづくり」/まちづくりの思想と技術を知る③
第9回 (12/7 水)	ディスカッション「〈公共〉を支えるまちづくり」
第10回 (12/14 水)	ワークショップ/まちづくりの思想と技術を考える①
第11回 (12/21 水)	ゲスト講演「まちを〈つくる〉営み」/まちづくりの思想と技術を知る④
第12回 (12/21 水)	ディスカッション「まちを〈つくる〉営み」
第13回 (1/11 水)	ゲスト講演「まちを〈つくる〉営み」/まちづくりの思想と技術を知る⑤
第14回 (1/11 水)	ディスカッション「まちを〈つかう〉営み」
第15回 (1/18 水)	学習の振り返り・発表/まちづくりの思想と技術を考える②

3. 講義を振り返って

本講義では、最初にまちづくりの歴史と思想的背景を伝えた上で、さまざまなまちづくり実践者の講演を聞き、これからのまちづくりに必要となる思想と技術を考えてもらう参加型の講義形式をとりました。多義的に解釈されているまちづくりという営みを「公共財の創出」と定義し、受講者ごとの問題意識や関心を探究してもらう学びの設計をしたことで、年齢や立場、専門性にとらわれることなく、それぞれが社会とつながる方法について模索し、思考を深めることができました。

また大学生に加えて高校生や社会人が受講してくださっていたおかげで、理論と実践、理想と現実、プライベートと仕事などのバランス感について、異なる考えを持った人同士の対話が起きていたように思います。

質疑応答やチェックアウトシートでの振り返りを見ていると、回を重ねるごとに問いのかたちが変化したり、思考が徐々に深まっていく学生さんが多く見られ、あるひとつの概念道具をとおしてものごとを継続的に考えることの大切さや魅力が伝わる機会にもなったように感じています。受講生がこれから歩むキャリアの中で、少しでも公共を豊かにしていく存在になっていってくださると嬉しいなと思います。

4. 講義を通して見えた変化や効果

あるひとつの概念道具を理解することで、専門や関心外の取り組みについても自分ごとの学びとして変換できるようになる。



情報発信の手法

担当講師：杉山歩

1. 科目の目的

近年、SNS等による情報発信、情報拡散はマーケティング手法としても広く認識され、その重要性は大きく高まってきました。しかしながら、過剰なまでのマーケティング偏重からステマと呼ばれる様な、消費者を騙す手段も多く見受けられます。本講義では正しい情報発信の手法を学ぶと共に、目的としての情報発信ではなく、手段としての情報発信の意義について学びます。特に、ブランディングの視点から情報発信の意義を学び、企業ブランディング、セルフブランディングにつながる情報発信について外部の講師陣とともに実践的に学びます。

2. 授業内容

- 第1回(4/11月)：オリエンテーション
- 第2回(4/18月)：ブランディングの重要性について
- 第3回(4/25月)：Webマーケティングの最前線
- 第4回(5/2月)：動画を通じた情報発信
- 第5回(5/9月)：ステルス・マーケティングと正しい情報発信
- 第6回(5/16月)：情報発信実践1
- 第7回(5/23月)：情報発信実践2
- 第8回(5/30月)：情報発信実践3
- 第9回(6/6月)：情報発信実践4
- 第10回(6/13月)：情報発信実践5
- 第11回(6/20月)：マーケティングと情報発信
- 第12回(6/27月)：マーケティングと情報発信2
- 第13回(7/4月)：情報発信実践6
- 第14回(7/11月)：情報発信実践7
- 第15回(7/25月)：最終発表

3. 講義を振り返って

実際に情報発信を行う実務家をゲスト講師に迎え、より伝わる動画の発信について学ぶことが出来た。また、学生たちは時間外学修も含め、グループでadobe premier proを用いた動画編集を行い、実践力を高めることが出来た。

4. 講義を通して見えた変化や効果

1. adobe premier proを用いた基礎的な動画編集のスキルが身についた。
2. 企業の動画発信の背景について考えるスキルが身についた。
3. 正解の無い問いにグループで議論を行う事で、創造的問題解決の重要性に気づいた。

5. 受講者アンケート

- ・その分野を専門としている方に来て頂き、細かく教えて頂いた点。
- ・同学生目当てでこの講義を取ったが、マーケティングについても学ぶ事が出来て良かった。



事業づくりの技法

担当講師：佐藤 文昭

1. 科目の目的

地域づくりのための新たな事業を生み出すためには、それを生み出す人の想いやエネルギーが大切である。本科目では、学生ひとり一人の興味関心から自分軸を見つけ、そこから社会とのつながりの中で他者を巻き込みながら新たな事業を起こしていくためのマインドとスキルの基礎を身に付けることを目的とする。そのために、個人ワークやグループワークを通じて、地域において事業を生み出していくためのプロセスについて指導を行う。

2. 授業内容

第1回 (4/15 金) 自分に気づく

「社会に見せている私」に気づき、「魂の私」の存在を知る（感じる）。

第2回 (5/6 金) 自分がやりたいことを感じる

「社会に見せている私」と「魂の私」の違いを踏まえ、自分がやりたいことを感じる。

第3回 (5/20 金) 「ビジョン」を描く

「自分軸」に基づいて、実現したい未来の姿となるビジョンを描く。

第4回 (6/3 金) 「アイデア」を広げる

未来を実現するためのアイデアを発想する。

第5回 (6/17 金) 「ファーストステップ」を決める

発想したアイデアから、最初に取り組む小さなプロジェクト「ファーストステップ」を決める。

第6回 (7/1 金) 仲間を募る

ファーストステップを実現するためにプロジェクトを具体化し、それを説明するための資料を作成する。

第7回 (7/15 金) 発表、振り返り

自らのプロジェクトを発表し、共感を得ることで協力者を募る。

3. 講義を振り返って

前半は佐野氏、後半は安藤氏による講義及びワークを中心とした授業構成とした。前半については、自分自身を深く掘り下げ、自分の中にある「やりたいこと」を見つけるワークを行った。それを踏まえて、後半は各自の興味関心を事業につなげていき、それを実現するための第一歩となるリサーチやテストを行うワークを行った。昨年度は、「地域課題」を軸とした事業づくりを行ってきたが、地域を意識するあまり、自分自身の興味関心と必ずしもつながっていないという印象を受けた。その反省から、今年度については、「自分」を軸にした事業づくりを中心とした構成とした。そのため、各自の興味関心に基づくテーマについて事業の企画を検討し、その実現に向けたリサーチやテストを行うことで、よりリアリティのある事業づくりにつなげることが出来た。前半後半それぞれ「自分」と「事業」を深めるためのプロセスにより、これまでよりも自分事としての深い学びにつながったのではないかと考えている。その一方で、前半と後半をどのようにつないでいくかという点については課題の残る内容であった。

4. 講義を通して見えた変化や効果

「パーソナルビジネスモデル」や「免疫マップ」など、キャリアデザインや組織マネジメントなどで使われるツールを活用し、自己理解を深めることで、普段では知ることの出来なかった「自分」に気づききっかけになったと考えられる。

また、後半については、過去に撮影したスマホ写真を活用し、無意識の中にある自分の興味関心を引き出すことから新たな事業につなげていくことで、本科目で目標としていた自分自身の興味関心に基づく事業づくりに近づけることが出来たと考えている。それを通じて、事業づくりの楽しさと同時に、リサーチやテストを通じて検証し改善していくことの重要性に気づくことが出来たと考えられる。

5. 受講者アンケート

受講者からは、課題が大変ではあったがその大変さに気づけたことが良かった、また最後までやり抜くことの大切さを学んだなどの意見があった。また、社会に出ても活用できる実践力を身に付けることが出来たとの意見もあった。

政策づくりの技法

担当講師：佐藤 文昭

1. 科目の目的

主に、自治体への就職を考えている学生や若手自治体職員を対象に、自治体政策担当者の視点から、ワークショップ形式により企画政策を立案するのに必要となる基礎的な知識や考え方を指導する。

2. 授業内容

第1回（4/22 金）オリエンテーション、政策の基礎

我が国における地方自治体の立場を説明することで、政策立案における基礎を理解する。

第2回（5/13 金）地方行政の理解

地方自治体の役割、仕組み、財政及び政策担当の業務を知る。

第3回（5/27 金）政策と企画

政策体系及び政策を実現する上でのプロセスを理解する。

第4回（6/10 金）総合計画の策定プロセス

地方シンクタンクの視点から、総合計画立案のプロセスについて解説する。

第5回（6/24 金）政策と市民協働

政策を実現する上での市民協働の関係とその重要性について解説する。

第6回（7/8 金）政策提案

個人またはグループにより、特定の自治体について統計データをもとに政策提案を考える。

第7回（7/22 金）発表、振り返り

検討した政策提案を発表、共有する。

3. 講義を振り返って

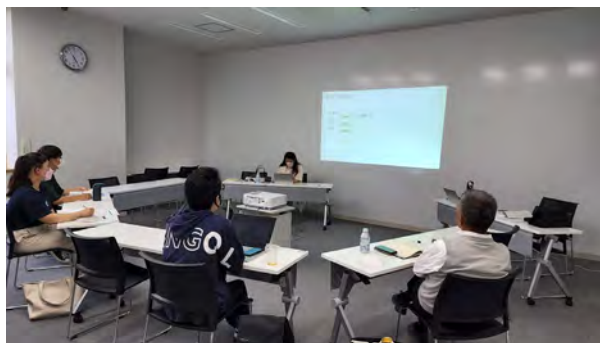
南アルプス市役所職員OBの保坂氏をゲスト講師として、自治体の政策づくりを実践的に学ぶ科目として企画実施した。

行政職員の視点から、行政の仕組みや政策づくりについて解説するとともに、「市民協働」をテーマとして、行政と市民の関係性や協働の重要性、また協働を行う上で重要なことなどについて議論を行った。後半は、これまでの講義内容をふまえて、各自が政策提案を行いディスカッションを行った。

政策づくりを実践的に学ぶということを目指していたが、実際の現場に関する知識や経験のない学生にとってリアリティを持って考えることが難しい内容でもあり、どのように具体性を持った学びの場とするかが今後の課題であると感じた。一方で、元自治体職員との対話を通じて、受講者が公務員という職業について関心を持つきっかけにもつながった。

4. 講義を通して見えた変化や効果

これまで、公務員という職業を漠然と捉えていた中、受講者が「首長」「議会」「市民」と「公務員」との関係を考えることで、その役割や立ち位置を明確にすることができたと考えられる。また、実際の政策づくりを疑似体験することで、行政の役割や責任などについても考える機会につながったと考えられる。



5. 受講者アンケート

受講者からは、発表に対するフィードバックをたくさん得ることが出来たとの意見があった。

ローカルデザイン実践演習

担当講師：田中友悟

1. 科目の目的

地域課題の解決には、問題を捉えて構造化する分析力、資源をつなぎあわせて価値をうみだす編集力、活動を事業へと育てていく企画力など、複合的な能力が求められます。「まちづくり」とは、そのような課題解決のための実践知に加え、私たちみんなが共有する暮らしの土台ともいえる「公共」を育てていく営為です。それは、私とまちの幸福な関係を築くための思想であり、技術だといえます。本科目では、「まちづくり」「デザイン」の思考法をもとに実際の地域課題の現場に入って企画提案を試みることで、VUCA時代に必要とされる実践的な思考法やプロジェクト立案力を身につけることを目指します。

2. 授業内容

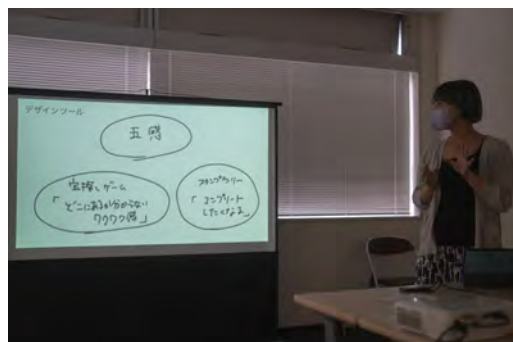
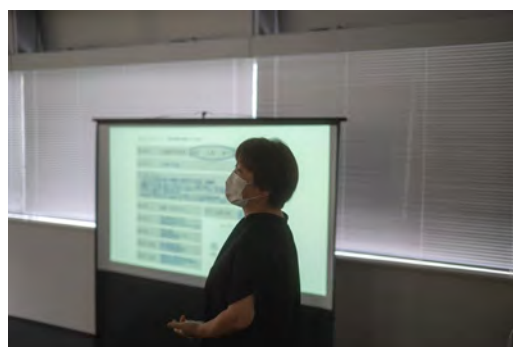
- 第1回 (7/6 水) オリエンテーション (ローカルデザインとはなにか・講義の詳細について)
- 第2回 (7/6 水) ローカルデザイン概論 (地域課題を解決する力・日本における実践と思想の歴史)
- 第3回 (7/16 土) 地域フィールドワーク/地域課題を捉える(1)
- 第4回 (7/16 土) 地域フィールドワーク/地域課題を捉える(2)
- 第5回 (7/16 土) 地域ワークショップ/地域課題を構造化する(1)
- 第6回 (7/17 日) 地域ワークショップ/地域課題を構造化する(2)
- 第7回 (7/17 日) 地域課題解決プランの立案
- 第8回 (8/20 土) 地域向けプレゼンテーションの実施・振り返り

3. 講義を振り返って

抽象的な概念として使用される「まちづくり」という営為を「公共財の創出」と定義し、日本における理論的な変遷をふまえた上で、フィールドワークとクライアントへの企画提案を実施し、現代のまちづくり人材に求められるつくる／つかうの視点の獲得を目指した。山梨市の観光課をクライアントに設定し、「山梨市の光を観るためのデザイン」をテーマに個人ごとでのフィールドワークを実施。各受講生の感性や視点をもとに、日常を異化する視点と、その分析内容を適切に他者に伝えるデザイン提案に取り組んだ。最終提案会ではクライアントから現場視点のフィードバックをいただくことで、提案を具現化していく際の難しさやコツについて理解する機会となった。

4. 講義を通して見えた変化や効果

講義をとおして「まちづくり」に対する認識が変化したことで、地域社会を支える公共財の存在に気づき、普段意識をしていなかった暮らしにおけるインフラの存在や、ビジネス領域で公共財を生み出し続けるための条件について深く理解することができた。また、公共財を現実社会に埋め込んでいくための伝達方法や企画づくりの重要性を実感していただくことができた。



事業づくり実践演習

担当講師：佐藤 文昭

1. 科目の目的

様々な地域課題を解決するためには、新たな事業を企画しそれを実践していくためのスキルとマインドが求められる。本科目は、受講者が関心を持つ地域課題をテーマとし、その解決のための新規事業を企画立案・試行することを通じて、事業を生み出すためのプロセス及び手法を実践的に指導する。

2. 授業内容

第1回（6/2 木）目的の明確化

「ポジショニングマップ」を用いて、自らの問題意識を具体化し、事業の目的や位置づけを明確化する。

第2回（6/16 木）対象ニーズの明確化

事業の対象者を具体的にイメージすることにより、事業が満たすべきニーズを明確化する。

第3回（7/7 木）事業モデル案の構築

「ビジネスモデルキャンバス」などを用いて、事業の実現するためのモデル案を作成する。

第4回（7/28 木）資金調達

クラウドファンディングなど、事業を実現する上で必要となる資金調達の手法を学ぶ。

第5回（9/29 木）中間発表

これまでの検討結果を踏まえて、各自が考える事業モデルの中間発表を行う。

第6回（10/20 木）事業モデルのテスト

アンケートやインタビューなどを通じて、事業モデルをテストするための方法を検討し、テストを実施する。

第7回（11/17 木）事業モデルのブラッシュアップ

実施したテスト結果を踏まえて、事業モデルのブラッシュアップを行う。

第8回（12/8 木）成果発表

これまでの検討結果を踏まえて、ブラッシュアップした事業モデルを発表する。

3. 講義を振り返って

前半の5回はやまなし地域づくり交流センターの y2advanced と共同実施とした。ディスカッションを通じて参加者間でお互いの想いを共有し、事業化に向けたアイデアを深めていった。その中で、他者からの指摘によって得られた気づきや発見などがあり、それが事業化の検討につながっていったと考えられる。

後半の3回では、受講者が3人と少人数であったこともあり、ひとり一人のアイデアについて講師、受講者の全員でディスカッションをすることで、事業化の前提となる各自の想いの深掘りなどを行った。特に本講義は、地域課題よりも各自の興味関心から「やってみたい」という事業を構築することを重視してきたが、「なぜ」その事業をやってみたいのかを深掘りすることを重視した。

また、最終発表までの間に、各自の事業を試行することで、新たな気づきや自信を得ることにつながったと考えられる。

4. 講義を通して見えた変化や効果

前述の通り、各自が「なぜ」その事業をやってみたいのかを深掘りすることで、受講者各自の事業内容が具体化したり、内容や方向性が変わっていくなどの具体的な変化がみられた。こうした自分自身の想いに向き合うことや具体的な試行を重ねていくことで、本当に自分が実現したいことは何かを見つけることが出来たのではないかと考えている。

また、3プロジェクトのうちのひとつは、現在、Campfireにてクラウドファンディングを行うなどの実現に向けた一歩を踏み出していることは特筆すべきことである。

https://camp-fire.jp/projects/view/661598?list=channel_yamanashi

政策づくり実践演習

担当講師：佐藤文昭

1. 科目の目的

モデル自治体について、統計データ他の情報を収集分析して課題を抽出し、現場のヒアリングなどの調査を行い、取り組み可能な問題点を探す。その問題点をどう改善するか、アイデアを出しあい、具体的な企画案を通じて、政策づくりのプロセスを学ぶとともに、相手に伝わるプレゼンテーションを考える。

2. 授業内容

第1回（6/9 木）オリエンテーション、地域活性化とは？

全体スケジュールを把握し、企画するテーマを決める。

第2回（6/30 木）仮説の提案

各自が企画テーマについての仮説を発表し、上位の2～3案について、グループ分けをする。

第3回（7/21 木）データの収集と分析

グループ毎に、仮説を裏付けるための情報収集を行い、仮説を検証する。

第4回（10/13 木）課題の抽出

収集した情報を分析し、仮説の背景を整理するとともに、課題を抽出する

第5回（11/10 木）現場ヒアリング

整理把握した背景（現状）と抽出した課題が実際の現場と整合しているかを、実際に現場の声をヒアリングすることで確認する。

第6回（12/1 木）アイデア出し

確認された課題から、改めて取り組むべき問題点を選び、解決、改善するための事業案を複数提案作成する。

第7回（12/22 木）企画案づくり

アイデア（企画案）から、最も有効かつ効率の良いものを選び、プレゼンテーション用の企画書をまとめる。

第8回（1/19 木）発表・振り返り

グループ毎に、作成した企画書に基づき発表を行う。

3. 講義を振り返って

保坂久氏をゲスト講師に迎え、ワークショップ形式で実施した。当初はグループでの検討を想定していたが、前半は欠席者が多く、また、受講者の問題意識が異なっていたことなどから、グループをつくることから変更し、各自テーマを設定して調査から政策提言までを行うこととした。

「ループ図」を使い、各自の問題意識の全体像を整理し、その上で各政策分野と紐付けをしていったことで、市がどのような業務を行っているのかを具体的にイメージすることが出来た。

また、各自が設定した問題意識に基づいて、実際に南アルプス市役所の各担当者にヒアリングを行ったことで、リアリティのある検討が出来た。また、最終回の発表の際にも、市の政策担当の職員よりフィードバックを頂くことが出来、より実践的な学びの場となった。

4. 講義を通して見えた変化や効果

政策は、民間による事業化とは異なり、収益性がなくても実施する必要がある、言わばセーフティネットとしての役割がある。一方で、民間で出来ることについては、そのアイデアやノウハウを活用することが必要となる。こうした自治体としての立ち位置というものがある学生にはイメージしづらいところではあったが、ワークを通じて少しずつ「政策づくり」というものについての理解が進んでいったとみられる。

その結果として、最終回の政策提言の発表において具体的な提言がみられたことは、本講義の成果でもあると考えられる。

企業がチャレンジする経営革新

担当講師：内田研一、手塚伸、安達義通

1. 科目の目的

経営環境の不確実性等に対処するため、企業は常に経営革新を行っていく必要があります。本授業では、県内企業を中心としたケーススタディ（事例研究）を通して、企業の経営革新の意義とその手法について学んでいきます。特に、研究開発、ブランディング、マーケティング等、事業成功のキーとなる事項に着目し、講師と受講者とのディスカッションを通して理解を深めていきます。

2. 授業内容

- 第1回（6/14 火）ケース1：担当 白井秀典PM Flower Design MI社
（プリザーブドフラワーやハーバリウムの山梨県内の第一人者）の経営革新の概要把握と理解
- 第2回（6/14 火）同上 案件に関するディスカッション
（課題の確認、手法の理解、結果の分析、受講者からの提案）
- 第3回（6/21 火）ケース2：担当 内田研一GM 3D Printing Corporation社
（3Dプリンターに関する、販売事業、コンサルティング事業、システム構築事業）の経営革新の概要把握と理解
- 第4回（6/21 火）同上 案件に関するディスカッション
（課題の確認、手法の理解、結果の分析、受講者からの提案）
- 第5回（6/28 火）ケース3：担当 藤原範夫PM（株）ジーエムコーポレーション
（施主のライフスタイルを見据えた家づくりを通じ光と風を五感で味わう心地良い暮らしを提案）の経営革新の概要把握と理解
- 第6回（6/28 火）同上 案件に関するディスカッション
（課題の確認、手法の理解、結果の分析、受講者からの提案）
- 第7回（7/5 火）ケース4：担当 末木淳PM ニュー山梨ワイン醸造株式社の（酒類製造業。確たるビジョンを持たず、生産管理やコスト管理体制も不十分）経営革新の概要把握と理解
- 第8回（7/5 火）同上 案件に関するディスカッション
（課題の確認、手法の理解、結果の分析、受講者からの提案）

3. 講義を振り返って

本授業は、2コマを1セットとし連続でケーススタディ形式で実施した。前半の1コマは実際に企業の経営革新に関するコンサルティングを行ったコンサルタントが講師となり、経営革新の当該企業である社長等にも参加していただき質疑応答などを交えながら講義形式で実施した。引き続き実施された後半の1コマは学生（受講者）自らが5フォース分析のフォームワークを使いながら、グループワークで当該企業の分析を行い、最終的には企業の課題に対する解決策を考え、経営者に提示し、評価していただいた。このように、座学+ワークショップを2コマ連続で行うケーススタディ形式の授業形態は本学でははじめてのものであり、大変、学修効果の高いユニークな授業構成だと思われる。また、通常の学者が一方向的に概念的な話を行うのではなく、経営革新を実施した企業や実際にコンサルタントを行ったコンサルタントから直接、話が聞け、レスポンスをいただけたのは画期的だった。また、毎回ワークショップを行っていたため、学生は毎回授業に参加しているという感覚を持ち続けたと思われる。

4. 講義を通して見えた変化や効果

計8コマで学生の変化や効果を測るのは大変難しい。ただ、実際に企業の経営者やコンサルティングをした方々から直接、経営革新に関する話を聞いたり、5フォース分析を通してディスカッションしたり、解決のためのアイデアに対してコメントをもらうことによって、「リアルな経営」あるいは「リアルな経営革新」というものが頭だけでなく肌で感じるできるようになったのではないかと思う。特に、机上のケーススタディではなく、経営者や支援者と直接向き合い議論できたことは、貴重な体験だったのではないか。また、学生は県内にも様々な方面で活躍している企業があることを知ることによって、県内企業への関心が高まったように思われる。

5. 受講者アンケート

○白井さんのヒアリング後で変化を遂げたホームページを見て、当事者一人の目線からではなく聞き手としての背景や想いをアウトプットさせ、複数の引き出しを一緒に作ってくれる支援者の存在が消費者以上に重要であると感じた。

○本講義では、日本の経営状況を海外の視点から考えることで、課題が明確になった。また、日本の技術者の能力が高い為、形式上の上層部が存在してしまう構造は課題であると考えた。その様な非合理的な組織や、構造を改善する為に本企業の様な存在が重要である。

○本講義の経営革新の意義は、マーケットコートの立ち上げにより、当該社の目指す世界観を家という観点だけではなく、衣食住の観点から包括的に見える化した点にあると考える。

○本事例では、大きく分けて2つの経営革新が行われていた。1つ目は、ビジネス思考への変化。本取り組みが開始された背景には、生食用に栽培されたぶどうのはね出し品を有効活用する方法の模索があった。



ローカルガストロノミー論

担当講師：宮下大輔、安達義通

1. 科目の目的

ローカルガストロノミーとは、地域の食や食文化について総合的に考察する学問です。食はすべての源であり、食についての様々な事象について深く理解ししっかり考察することはあらゆることに通ずることだと考えます。本科目では、ローカルガストロノミーの考え方、概論を良く理解したうえで、食を軸に山梨の創生に寄与するような考えを育むことを目的とします。

2. 授業内容

- 第1回（4/12 火）ローカルガストロノミー概論 ローカルガストロノミーとは、
- 第2回（4/19 火）今なぜ食が問われるのか
世界の食教育の実情と日本の現状について及びローカルガストロノミー実践事例の紹介
- 第3回（4/26 火）日本国内におけるローカルガストロノミーの事例とその経済効果、
社会課題の解決への寄与について
- 第4回（5/10 火）現代北欧料理のマニフェスト 北欧料理10か条その戦略の分析
- 第5回（5/17 火）食の世界におけるSDGs、その取り組み事例の紹介と考察
- 第6回（5/24 火）食を基準にした山梨県の取り組みの評価分析（グループワーク）
- 第7回（5/31 火）山梨県が抱える食についての課題の考察（グループワーク）
- 第8回（6/7 火）山梨県版「おいしい経済実現のための10の指針」の作成
（その具体的な戦略と実践計画の策定）

3. 講義を振り返って

わが国では、ガストロノミーをアカデミックな視点から総合的に学べる場がほとんどない。ガストロノミーについて深く考察することは日本の、特に地方の抱える様々な問題・課題の解決の一助になり、山梨県こそそのような考えをいち早く導入すべきであるとの認識を持って、本講座を開講した。前半は事例紹介を中心とした座学形式の講義とし、後半はグループワークを行い、ローカルガストロノミーを実践するための計画や提案などを受講者同士で考える機会を設けた。実際、山梨県の素晴らしい環境の中でアカデミックな視点から食やローカルガストロノミーについて学べる場を設けることはまさに県が抱える諸課題解決の一つの大きな糸口になると、この講義を通じて深く確信するに至った。その継続がより山梨らしい、山梨に相応しい食世界の実現に繋がるであろう。受講者は、講義を通じてローカルガストロノミーについて学び、グループワークで自分たちなりの「山梨県のローカルガストロノミー十か条」を考え、発表することによって実践する糸口を学んだと感じている。具現化していくプロセスを楽しみに待ちたい。

4. 講義を通して見えた変化や効果

社会人はともかく、ほとんどの学生は「ローカルガストロノミー」などという言葉は初めて耳にしたのではない。多くの学生にしても社会人にしても、はじめは何のことやらという感じで授業に参加していたように見えたが、次第にこちらの話に興味を持つようになっていったように感じた。提出されたレポートからも食そのものやガストロノミーについて興味、関心を深めたことが確認できた。この講義をきっかけに、受講者個々が地域の食あるローカルガストロノミーへの意識を常に持ち、身近な所から自分なりのガストロノミー論を深め、実践してくれることを望む。



国際貿易実務

担当講師：中矢一虎、今井久、手塚伸

1. 科目の目的

貿易実務の基本体系知識について、演習を交えて学んでから、海外営業の基本を習得する。まず前半の第1回から第4回までは、輸出と輸入の重要なルールや貿易関係情報の読み方、さらにコストの計算まで、貿易取引に必須の知識を理解します。そして後半の第5回から第8回までは、海外営業の具体的な取り組みとして、海外取引先に対する対応や輸出代金回収リスク・外国為替相場変動リスクの回避方法を学びます。そして、輸出用サンプル出荷から正式受注までの実務についても事例を通して習得します。なお、実施に当たり「日本貿易振興機構山梨情報センター」のご協力をいただいています。

2. 授業内容

第1回 (6/17 金) EPA (経済連携協定) 等と初めての海外販売戦略/契約交渉の基本五条件

第2回 (6/24 金) 貿易条件とインコタームズ/基本的な輸出業務の流れ

第3回 (7/1 金) 輸出コスト計算/船積書類と輸出申告書

第4回 (7/8 金) 輸出実践/輸入実践

第5回 (7/15 金) 海外営業部による海外取引先に対する対応/輸出代金回収リスク回避方法

第6回 (7/22 金) 外国為替相場変動のリスク回避方法/海外営業商談の準備と開始

第7回 (7/29 金) 輸出見積りからサンプル出荷/正式発注に向けた海外営業交渉

第8回 (8/5 金) 海外営業拡販に向けた交渉と実践/継続的・安定的な海外拡販のための取引先与信チェック

3. 講義を振り返って

これからのビジネス環境においては、企業の立地特性や業種、規模の大小にかかわらず海外ビジネスを避けて通ることができません。この現場においては、様々なスキルが求められますが、国際標準の取引ルールを熟知していること、国内営業と海外営業との差異を理解していることが最低限必要となります。このため、コロナウイルス感染症対策として、オンデマンドで全8回の講義となったものの、この制約を超えるべく、講義は極めて実践的なものとし、毎回出される演習問題をその場で、あるいは翌週に必ず確認する方式で行いました。毎回多くのワークが提示され受講者にとっては事前学習、事後復習が必須の厳しい授業だったと思います。

講義ごとに、リアクションペーパーの提出を求めましたが、こちらは少々提出率が低い状況でしたので、コミュニケーションの取り方が難しく心配しました。しかし、前後半2回の試験については、大変厳しい内容にもかかわらず多くの受講生が好成績を取めました。オンデマンドの制約から、受講生との接点は少なかったものの、確実にスキルアップしたのではないかと感じます。

4. 講義を通して見えた変化や効果

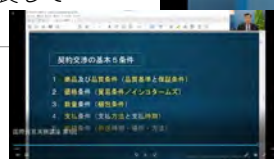
前半4回は、とにかく基本ルールをきっちり覚えておくことが目的だったので、少々窮屈だったかもしれませんが、後半は、前半で得た知識を用いて、実際に契約書を作成する、海外営業の手法、とりわけ、リスク回避の手法を実例により身につけることを目的に前半以上に実践的、思考的な内容としたので、興味深く学習できたと思います。特に後半部分で、日本的な営業手法・思考だけでは世界に通用しないことが実感できたと思います。こうしたことから、全8回を受講し、試験問題を丁寧に解いた受講生に関しては必要なスキルが確実に身につけ、企業の第一線に出て海外ビジネスを担当する際に、戸惑うことなく円滑に対応できるものと考えます。

5. 受講者アンケート

●先進国、発展途上国関係なく海外企業は支払いを故意的に遅らせるケースがあることを理解した。支払いの遅延からのトラブルに巻き込まれないために、品質基準の提示、前払いの要求、貿易保険の利用、迅速な通知を心がける必要がある。第1回から8回を通して国際貿易実務の内容を学ぶことができ、とても有益授業だった。商社で働くことに興味を持った。ありがとうございました。

●今回の講座で初めて貿易のことを学んだのでどれくらい理解できるのだろうか?と最初は不安でしたが、テキストにじっくり目を通したり、演習問題を繰り返して行うことで段々と理解を深めることができ、演習問題も早くできるようになりました。海外貿易は日本の営業とは全く違うということをしかり押さえ、つねにリスクを考えながら、保険なども利用し貿易取引を行っていく必要があることが分かりました。今回の授業で学んだことをこれからのキャリア形成に役立てていきたいと思っています。ありがとうございました。

●8回の講義の中で後半ではより実践的な演習問題が多くあったため、基礎知識を振り返りながら体験的に問題に取り組めた。国際貿易実務は、非常にマルチタスクであり身に着けるべき分野も多くあるが、その分幅広く業界の中で活躍できる人材に成長できるように思えた。内定先で「自分はどうのような商品・企業を海外に進出させたいか」を明確にし、国際人として課題解決に尽力できる人材へと成長していきたい。



事業計画づくりワークショップ

担当講師：内田研一、手塚伸、今井久

1. 科目の目的

VUCA時代のキャリア形成において、組織において新規事業を立ち上げる際あるいは起業時に、様々な要素を勘案した有効かつ創造的な事業計画を構想できる能力は極めて重要である。

この授業では、事業計画策定の際に求められる、事業理念の構築、マーケットリサーチ、商品設計、資本政策、ブランディングなど、一連の事業計画策定の基礎的な手法を演習形式で学ぶ。

2. 授業内容

第1回(10/15土)：事業計画とは？→事業計画書の一般的なフォーマットを理解するとともに、実際の事例を用いて事業計画の用途、必要性について理解を深めます。

第2回(10/15土)：事業コンセプトの検討→事業コンセプトフォーマットを用いてコンセプトづくりのワークショップをチームごとに行います。第3回(10/15土)：商品・サービス開発→商品サービス開発フローやマーケティングの基礎知識の学習を通じて、ワークショップ形式でサービス開発の流れについて理解していきます。

第4回(10/15土)：会計の基礎知識→財務諸表の構造や管理会計の基礎知識、損益分岐点分析などをワークショップ形式で学び、財務会計や管理会計の基礎知識を身につけます。

第5回(10/16日)：プロジェクトマネジメント(PM)の基礎知識→事業計画策定の過程で、実際にその事業(プロジェクト)どのように動かしていくかを予め織り込むことは極めて重要です。このマネジメント手法をワークショップにて学びます。第6回(10/16日)：事業計画のまとめ方①→グループごとに事業計画書を作成します。

第7回(10/16日)：事業計画のまとめ方②→グループごとに事業計画書を作成します。

第8回(10/16日)：グループ発表→グループごとに作成した事業計画を発表し、全体で討議します。

3. 講義を振り返って

わが国では、企業の開業率が諸外国に比べ著しく低く、この結果スタートアップも生まれずイノベーションが起きないといった通説が流布されている。しかし、山梨県内の中小企業を眺めると、少なくとも1世代前の経営者の多くは起業家、スタートアップであり、それぞれ個性的な夢や理想を掲げ、その結果今日、産業界で重要な位置を占めるまでに成長した企業が数多く存在している。こうした現実を前にすると、問題は開業率や起業家の多寡ではなく、より良い事業を構想し、それを社会に受け入れられるものとして着実に計画を立て実行し合理的な利益を上げる能力をもった若者を育てることに尽きるのではないかとと思われる。

本講義は、中小企業支援の現場で、新たな事業を構想する際のプロジェクトマネジメント支援を実践している実務家4名を講師に迎え、単に合理的で数字の積み上げとして市場適的な事業計画策定ノウハウを学ぶのではなく、自らの夢を実現すると同時に、広い意味で社会的に有益な事業の構想、計画立案・検証、夢の実現に向けたマネジメント手法の立案、合理的な財務計画の策定に関するノウハウなどを習得することを目的に実施した。

講義に参加した学生、社会人(4名)が、こちらから提示した課題にフォーカスしてワークショップ形式で、グループ討議を重ねる中で、実務家が各グループを指導する中で事業計画を策定し、グループごとの発表とこれに基づくディスカッションにより、学修を深めていった。結果として「単に利益を出す。」という事業計画策定の手法を超える計画論を掴むことができたと思われる。

また、社会人と学生とがグループ討議する中で、互いに得るものが多かったとともに、現場で事業計画を支援している実務家教員が、各グループに張り付き、情報共有・ディスカッションしたことにより、より実践的なスキルが身についたと思われる。

4. 講義を通して見えた変化や効果

事業計画策定の際に本質的に求められるのは、収支合理的あるいは市場迎合的な事業計画ではなく、むしろ企業(起業)の公共的性格を踏まえた、価値創造型の計画論であることに関し、重要な気づきが得られたと考える。一方で、事業計画には様々な要素が含まれ、求められるスキルも膨大になることから、時間設定や配分、伝える内容の絞り込みが必要と思われる、次年度の課題となる。

5. 受講者アンケート

○今回の講義では、アイデア発想から商品・サービスの開発、ブランドが形成されるまでの流れ、会計の基礎知識、事業計画書の作成など、事業づくりの流れを詳しく学ぶことができました。さらに、グループワークでは、講義内容をアウトプットすることができたように思います。(学生)

○目的は概ね達成できた。新しい知識を得たというより、今まで企業で就業する中で取り組んできたことを体系的に表し言語化してもらうことで自身にフィードバックすることができた。しかし、交流という面では、もう少し社会人や学生、講師陣とかかわる時間があれば更に達成度が高かったように思う。(社会人)

○講義全体として、ただ話を聞くのではなく、発言をしたり、ワークシートを使って自分自身で考える時間があってとても良かったと感じた。考えながら行動することで、インプットとアウトプットがしっかりできた。

(学生)

トレンド予測の手法

担当講師：家安香、手塚伸、今井久

1. 科目の目的

マーケティングの入口で必要となる未来予測は、極めて重要なステップですが、VUCAの時代にあって、これを的確に捉えることは極めて難しいものの、重要かつ必須の課題となっている。この演習を通じて、不確実な時代にあっても、如何にして中長期的なトレンドを如何に予測していくか、これをもとにどのような未来戦略を描いていくかに関し、有効な知識とスキルを習得することを目的とする。

2. 授業内容

- 第1回（11/12土）なぜ未来予測が必要なのか。自分はどんなスキルを持っていて、どんなスキルを手に入れることでどのような未来をきり開けるのか。各自の持っている可能性をディスカッションしながら2日間の目標を設定する。
- 第2回（11/12土）未来を知るにはまずは過去から。どんなことがあって、それが何に繋がっているのか。過去に思い描いた未来と今は何が違うのかについて講義とディスカッションとで学ぶ。
- 第3回（11/12土）山梨の産業、土地、価値、さらに日本の良さなど身近なものの価値の再発見を試みます。これをもとに、海外、山梨から見つめなおします。知っているようで知らないものの中から何に関心あるかをターゲットにして、講義を主体にしながらディスカッションする。
- 第4回（11/12土）前3回の講義を受けて、何が得意で何に興味があり、どの分野に力が発揮できそうかをそれぞれ発表します。また、参加者からの相互のアドバイスを引き出すことでコンサルティング視点を学ぶ。併せて、2日目の理解を深めるための宿題を出す。
- 第5回（11/13日）消費も、歴史の変化もそこには愛と嫌悪がありました。自分たちの感覚を客観視できるようなものの見方を講義方式で学び、そのうえでディスカッションする。
- 第6回（11/13日）流行り廃りがつきものの広告、伝達。そのパターンに何か秘密はあるのか？その形の変化はどのように起きているのか？講義とディスカッションで学ぶ。
- 第7回（11/13日）数人でグループを作り、仮説をたてて未来予測を行います。その中で難しい部分、独自で辿り着いた方法論などをお互いに発表し、未来予測への理解を深める。
- 第8回（11/13日）各自が自分の持ち味や得意なものを生かして未来予測をしていく。その過程で今後手に入れるべきスキルや、実践していきたいと考える分野についての気づきを発表し、自身の未来像、これからやっていくことへの意識、未来予測の基礎的アプローチが実感できるシート（冊子）等を作成する。

3. 講義を振り返って

「未来を予測する。」ことは大変難しいことと思われがちである。勿論、簡単なことではないが、重要なことはまず、「未来は待っていても来ない」もので、それゆえ、自らの過去と現実の立ち位置（自らのスキル、これまで培ってきたネットワークや感性など）を確認し、これらを総動員して「次の瞬間からの自身の世界」を主体的に描き、これに対して多くの賛同者を得ること、と考えるのが本演習の前提である。

このために、演習入口からグループ分けし、以下の項目に従って座学とワークを繰り返した。

1. 未来予測ができる何がわかるようになる？（未来予測の有効性を予め理解しておく）
2. 未来予測とは何か、未来に接近するための手法を学ぶ。（受講者によるワーク。何度も何度もリサーチすることが重要）
- (1)自身のマインドマップを作る、(2)マインドマップに過去を加える、(3)山梨のマインドマップを作る、(4)“未来のどの部分を担うのか”自分が活かせる場所と方法を仮説で立てる、(5)“主観と客観”好きなもの嫌いなものを現在、過去の2つの軸で書いて、その時に世界で何があったかを調べる、(6)時代と共に変化する“ささるもの”を見つけそれを伝える、(7)共通点と相違点を見つけ、そこから未来を予測する、(8)自分の未来予測を完成させる。
3. 上記ワークを通じ掘り下げてきた気づきや視点を一冊にまとめた。これが未来予測図として、今後の受講者のビジネスプランになり、その動きが未来のトレンドを作ることになる。
4. 最終的に各自が納得のいく未来予想図を完成することができた。

演習には、学生（複数大学）、社会人、高校生が参加し、それぞれの価値観に基づきディスカッションを重ねる中で自らの立ち位置を確認し、未来予測を行う手法を身につけることができた。

4. 講義を通して見えた変化や効果

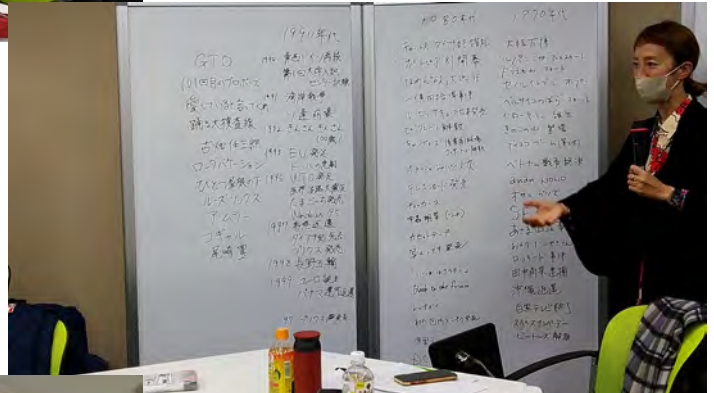
当初、難しいを思われていた「未来予測」だが、ワークを重ねることにより、今の自分自身、過去の蓄積、を客観的に見える化すると同時に、現在の自分及び山梨という土地に居ることを最も重要なファクターと据えたうえで、未来に向けての綿密なリサーチを繰り返すことにより、主体的で創造的な未来予測が可能となることを理解できたのではないかと考える。

5. 受講者アンケート

○未来予測の講座を受講させていただき、ありがとうございました。家安先生の人と発言を的確につかみ、瞬時に分析する神業は承知していたものの、自分も当事者になって参加したのは初めてでしたので良い経験をさせていただきました。また、学生さんたちの個性ある発言に感銘を受け、今の仕事のため大きな収穫がありました。

(社会人)

○自分が得意な人とのコミュニケーションを活用して、なくなることのない人と人とのあたたかいつながりを守る。山梨にある伝統産業の口下手な職人さんと大衆との間に伝達し、魅力を最大限伝える。これからの未来は、物事のうわべではなく本質を大切にできるようになるので、物事を深く理解して伝える人になる。(学生)



イノベーション創造の基礎と実践

担当講師：田子學/手塚伸/今井久

1. 科目の目的

企業経営の現場において、『斬新な』アイデアはそう簡単に浮かんでこない。しかし、手持ちの情報であっても、掛け合わせのコツや発想のプロセスを実践することで、面白いアイデアやビジネスに変貌（イノベーション）させることが可能となる。

本演習を通じ、こうした新しいアイデアを発想する過程、そしてそれをイノベーションするスキルを具体例やワークを交えながら学び、イノベーションを創造できる思考体系を身につける。

2. 授業内容

第1回（12/10 土）イノベーションとは何かを学び、現状を変革する突破力を身につける考え方を養う。

第2回（12/10 土）昨今、日本においてイノベーションが起りにくい現状が指摘されますが、なぜそうなのか、原因を探求する。

第3回（12/10 土）こうした現状を踏まえ、企業経営の先人たちの知恵や行動力を学ぶことで実践的な突破力を身につける。

第4回（12/10 土）さらに深掘りし、企業の実例から強みを振り返り、ワークショップを通してイノベティブな思考を習得する。（各自のワーク）

第5回（12/11 日）前回の各自のワーク結果を振り返り、強みと弱みを整理する。

第6回（12/11 日）CVCA（顧客価値連鎖分析）などワークショップを通して、既にあるエビデンスのみならず見られる兆候からイノベティブなコンセプトを探し出す。

第7回（12/11 日）2回のワークショップ、講義全体を通して、各自事例を参考に新結合（イノベーション創造）を行う。

第8回（12/11 日）各自、新結合の結果を発表する。

3. 講義を振り返って

イノベーションは、一般的には「技術革新」と訳されている。しかし、これでは概念的に狭すぎて正しい解釈とは言えない。イノベーションの本質とは、「技術、デザイン、プロセス、自然・社会環境などに働きかけ、モノやコトの変革を通じより良い社会を造るために行う一連の革新的営み」である。本演習では、以下の流れで、企業の実践活動を通じて、イノベーションの本質、そこにたどり着くための実践的な手法を学んだ。

1. 日本において、何故イノベーションが起きにくいのか、その原因はどこにあるのか、実例を通じて学修した。

2. CVCA（顧客価値連鎖分析）、WCA（欲求連鎖分析）、PEST分析、5F分析、3C分析、SWOT分析などの分析手法をワークショップ形式で学び、イノベーションを興すためのリサーチ手法、思考方法を学んだ。

3. 三井化学工業モル倶楽部やグッドデザイン2022百選などの企業活動を参考に、ワークショップ形式で受講者自ら新結合を試みた。

4. 新結合の結果を発表し、受講者同士でディスカッションを行った。

こうした座学とワークを通じて、受講者のイノベーションの本質への理解が格段に深まった。また、製造業、金融業、公益法人など多様な職種の人々の参加を多く得たことから、様々なステークホルダー間のディスカッションが活発に行われ、演習の効果を高めることができた。

4. 講義を通して見えた変化や効果

イノベーション＝技術革新といった狭い考え方から、「モノやコトの変革を通じより良い社会を造るために行う一連の革新的営み」という本質論に確実に思考形態が変わったことが感じられた。また、「デザイン」という言葉の概念について、単に「意匠」ということではなく、「よりよい社会を創造するためのトータルな発想方法」＝イノベーション、という等式がおぼろげながら伝わったと思われる。

5. 受講者アンケート

○「イノベーションとは？」から始まった講義でしたが、思っていた以上に幅が広く他分野に渡るものだと感じました。まずは、固定観念の払拭。そして、日常生活にある「なぜ？」をそのままにせず「なぜ？→こうだったら」に変えていく考えが必要だと強く思いました。体と頭をやわらかくして気づきの中から発想をしていくことの大切さを学びました。（社会人）

○イノベーションの本質とは、100年後の日本、世界、人類のために「今できること」をデザインすることではないかと今回の演習で感じました。イノベーションという言葉のイメージとしては、何か無機質でクールで、別次元で行われている「何か」だと思っていました。今回、田子先生をはじめ、携わっている方々の「人のために役立ち、喜ばれ、共感できるものを作りたい」という熱い想いを知りとても感動しました。また、情報が多様化、複雑化する中で、事実を見極める力、選択する力を養っていきたくと思いました。（社会人）

○全てはなぜ？という問いから始まり、前提条件をも疑うことが非常に重要だと感じた。短期的な利益を追うのではなく、自分が目指したい社会・世界をまず第一に考えて、そのあとどうするのか？を考えていくことでより面白いイノベーションが起こると考える。そこには、発想力、突破力、自信を持つことを意識することが重要だと田子さんがおっしゃっていた。自分自身がより良いイノベーションを起こせるように、これからも素晴らしいものに触れて自分になぜ？と問い続けて考え続けていこうと思う。（学生）

ブランディング基礎と実践

担当講師：田子學、手塚伸、今井久

1. 科目の目的

企業の経営においては、自社の価値を高め、顧客との関係を強化する「ブランド」の重要性はますます高まっている。一方、重要性は理解していても、何から取り組めばよいのか分からない、というケースは少なくない。この演習を通して、企業経営に必要なブランディングの基礎知識と実践する際の思考方法や具体的手法を学び、特に中小企業に不足しがちな精度の高い事業開発、実行力の高いブランドチームの育成、デザイン・広報など、ブランド構築の手法について、講座・ワークショップで体験し学び、受講者が高いブランディング能力を習得することを旨とする。

2. 授業内容

- 第1回（10/29 土）（検知）デザイン経営の概念の理解と検証を通じ、ブランディングの本質を学ぶ。
- 第2回（10/29 土）（検知）クリティカル・シンキング（批判的思考）の手法を学び、課題を把握し、事業の強み・弱みを認識するとともに、前提にとらわれない社会課題解決型思考の手法を身につける。
- 第3回（10/29 土）（発散）ラテラルシンキング（発散型思考）の手法を学び、アイデアの発散を繰り返しながらストーリーを紡ぎだす。
- 第4回（10/29 土）（創造）ロジカルシンキング（論理型思考）の手法を学び、これに基づくブランド創造に必要な、さまざまな要素を組み立てていく。
- 第5回（10/30 日）（一貫）甲州市勝沼町のMAGVsワイナリーを訪問し、施設見学、圃場見学を通じ同社のブランディング（デザイン経営戦略）を実地で理解する。
- 第6回（10/30 日）（一貫）同社において、提出される課題に対しワークショップ形式でディスカッションを行う。
- 第7回（10/30 日）（一貫）前6回の演習を通じて得た学びや体験、知識を通じて、課題に対する考え方を整理する。
- 第8回（10/30 日）（結語）グループごとに課題に対する、考え方を発表、討議する。

3. 講義を振り返って

企業が経営革新を進める中で、「ブランド戦略」は欠かすことができない要素である。その一方、これほど曖昧で、手法や戦術が確立されていない概念も少ない。本演習では、ブランディングの本質を明らかにするとともに、これに接近するための思考方法を学び、ブランド戦略の手法を身につけることを目的に行った。演習は、座学とワークを組み合わせたとともに、講師の田子先生が実践した甲州市のMgvsワイナリーにおいて、実装例を研修することで実効性を高めた。

1. 思考方法の習得とプレスト

- (1) CRITICAL THINKING：本当にこれで良いのかという前提を疑う。前例に対して疑問を投げかけることから始まる考え方
- (2) LATERAL THINKING：事象を様々な角度で捉えアイデア、着想を生み出す新たな視点で解決法を見つける探索的思考
- (3) LOGICAL THINKING：新しいアイデア等の実現に向け全ての事柄に関して主張と根拠を論理的に説明できるようにする考え方

2. Mgvsワイナリーのブランド構築のコンセプト及びその実践についてのレクチャー（半導体製造工場から風土とテクノロジーのワイナリーへの経営革新）

3. BRAND VISIONの本質を理解する：＝目指すべき将来像を企業側の都合で語るのではなく、顧客主導型の「より良い社会・ライフスタイル」におくことができれば、社会（ステークホルダー）との共有・共創が可能となる、ということ

4. ブランディングに必要な要件の整理と、このための様々な手法の習得

5. Mgvsにおける実装状況の視察とディスカッション

6. これまでの振り返りとブランドヴィジョンの導き方に関するワークショップ

この演習を通じ、当初、単純な商標といったイメージであったものが「社会」と「ブランド」が実現したいゴールを目指す＝社会を味方につけるブランド」といったイメージに明確に認識されていた。

2日間の演習を通じ、受講者相互、受講者と講師との活発なディスカッションが行われた。また、理論を実装したワイナリーの見学により、ブランディングの本質に迫ることができた。さらに、両日とも、授業最終時間を1時間以上オーバーする白熱した演習となった。

4. 講義を通して見えた変化や効果

この演習を通じ、当初、単純な商標といったイメージが「社会」と「ブランド」が実現したいゴールを目指す＝社会を味方につけるブランド」といったイメージに明確に認識されていた。また、「山梨という風土に根差した力強い企業現場」での研修を通じ、県内産業を再評価する貴重な機会となった。

5. 受講者アンケート

○この度は大変貴重な機会を頂きありがとうございました。普段は営業職をしております故、思うようにディスカッションできず、学生の方々にご迷惑をお掛けしてしまいましたが、自分1人では得られない学びが沢山ありました。また、機会があれば是非受講させて頂きたいと思っております。ありがとうございました。（社会人）

○肥料、減農薬といった要素も勿論必要ですが、それ以上にその土地ならではの要素が非常に大きな役割を持っているのだと思います。私がこれまでふんわりと考えていたことを、ちゃんと言語化しカタチにしているMGVsに良い意味で悔しさも覚えました。また、生産者と消費者が対等な立場である気がして、両者がワクワクするようなビジョンを描いていたのが非常に印象的でした。まずは、自分がワクワクすることが重要だと田子さん、松坂さんの話を聞いていてヒシヒシと感じました。（学生）



企業におけるレクチャーと現場研修

担当講師：手塚伸、今井久

1. 科目の目的

山梨県内には、多様なものづくり企業が身近な経済社会のみならず、グローバルな経済社会の循環に必要な製品・サービスを提供しています。こうした企業の現場に赴き、経営者等から、企業活動の理念や概要を伺うと同時に、生産の現場を視察し、ものづくりの仕組み、戦略を体感します。

2. 授業内容

第1回(8/25木) 昭和産業株式会社(韮崎市)

(事業内容)

- ・放送通信機器の設計、製造、検査
- ・各種プリント基板の表面実装、検査、評価・解析
- ・半導体製造装置、液晶製造装置、有機EL製造装置の製造、検査、現地据付工事
- ・半導体テスト基板の設計、製造、検査、評価、販売

第2回(8/25木) 農業法人株式会社サラダボウル(北杜市)

(事業内容)

- ・農産物の生産・販売、加工小売
- ・農作業の請負・農地の管理
- ・農業経営コンサルティング
- ・農産物の企画・開発

第3回(8/26金) 山陽精工株式会社(大月市)

(事業内容)

- ・モノづくり事業(精密な切削加工、チタンやインバーといった難削材の加工)
- ・医療機器事業(客先が企画している医療機器を形にする支援、保有する技術を生かした医療機器の製造販売)
- ・SMT(高温観察装置)事業(「SMT Scope」[高温域における精密な温度調節により、様々な状況における加熱観察を行う装置]販売、受託の試験実施)

第4回(8/26金) 株式会社牧野フライス製作所富士勝山事業所

(事業内容)

工作機械およびその関連機器(ソフトウェア含む)

- ・マシンニングセンタ・NC放電加工機・NCフライス盤・フライス盤
- ・CAD/CAMシステム
- ・FMS(Flexible manufacturing System)・オートメイション・エンジニアリングサービス 等の製造・販売・輸出

※両日とも貸切バスで移動し、集合場所・解散場所は山梨県立大学飯田キャンパスとなります。

8月25日 8:15集合、16:00解散(予定)

8月26日 8:45集合、17:30解散(予定)

3. 講義を振り返って

日本、中でも山梨県の産業ポテンシャルとして、ものづくり製造業の強さを挙げるすることができます。雇用吸収力も大きい産業群ですが、こうしたB2B産業の事業内容はとりわけ文系の学生には他人事のように感じられるかもしれません。しかしながら、各企業においては、技術がわかる経営人材に対するニーズが高まっているなど、活躍の場が広がっています。こうした文脈で、DX型農業を含むものづくり企業に赴き、経営者から直接経営理念を伺い、現場でどのような仕事が行われているのか、実感してもらいました。受講生には、新鮮であるとともに、想像以上にクリエイティブな場であることを体験し、驚きとともに興味がわいたのではないかと思います。

また、企業側が若手社員に説明を委ねた企業もあり、社員自身の気づきにつながったこと、学生が訪れることによる企業側のある種緊張感が生じたこと、また、現場において受講生から、生産工程改善に関する質問があったり、企業側から見ても新鮮な視点を得られたことも、この授業の収穫であったように思います。

さらに今日、企業現場では、人づくりの一環として「働き方改革」に力を入れています。この分野についても受講生から多くの質問があり、経営者と直接意見交換できたことは非常に有益であったと感ずると同時に、これまで関係が疎遠であったものづくり製造業との接点ができただことは大きな成果と考えます。

4. 講義を通して見えた変化や効果

ものづくり製造業の現場の視察を通じ、これまで知りえなかった経済活動の一環を視野に入れることができ、将来のキャリアデザインに大きな幅ができたのではないかと思います。また、山梨県に多様な生産現場があることを垣間見ることができたことは、受講生にとって重要なことだと考えます。

企業側からも、これまで接点がなかった県立大学の学生等と意見交換することができ、概ね好意的な評価をいただいている。文理融合の時代に、様々な選択肢が生まれる可能性を感じました。

4. 講義を通して見えた変化や効果

この演習を通じて、当初、単純な商標といったイメージが「「社会」と「ブランド」が実現したいゴールを目指す＝社会を味方につけるブランド」といったイメージに明確に認識されていた。また、「山梨という風土に根差した力強い企業現場」での研修を通じ、県内産業を再評価する貴重な機会となった。

5. 受講者アンケート

〇2日間の現場視察を通して、自分の知らない企業がたくさんあり、それぞれの経営理念や会社の方々の話を聞いて学ぶことがとても多かった。実際に現場に行かせていただいたことで、多くの技術を肌で感じることでできたとても貴重な機会となった。

〇私がこの講義に参加したのは、まだ大学卒業後に何をしたいのかしっかりと決まっていなかったため、様々な会社に行きどんなことをしているのかを知ったうえで、新たな発見がある可能性があると思ったという理由がある。実際二日間を通して、私の中の製造業の印象が良い方向に変わったのを実感した。もともと製造には興味なかったのだが、四つの会社に行き、どの会社も同じ製造業ではあるのに、全く異なっていて純粋に楽しむことができた。興味がなくても、楽しかったということは、私にとっての新発見でもある。やはり、興味がなければ何もしないより、興味がないけれど行ってみよう！という風に思い行動することが大事であることを学んだ。

〇今回、2日間の講義を通じて就職活動以来、山梨県内でご活躍される企業の内側を拝見することが出来た。これまであまり製造業やIT分野に触れることはなかったものの高い技術を誇る企業が数多く山梨にあり、またそこから生まれた精密な部品や製品の数々が私たちの生活に欠かせないものであると考えたら少し誇らしくなった。

〇山梨県は製造業がとても盛んだと言うことは以前から知っていたが、県内の企業がここまで技術が高く、世界と対等に勝負ができるほどであるとは想像していなかった。IT化が進み、DXやデジタル化が製造業の場にも浸透してきているので、これからの発展や挑戦も大いに楽しみであると感じた。技術力の高さと言う基礎的な点がどの企業も共通してあったので、更なる発展が期待できると思う。

〇私はこの授業を受講するまで、山梨にはこんなにも多くの企業があることを知りませんでした。実際に企業を訪れることでホームページだけでは分からなかった魅力を数多く知ることができ、勝手に地元である山梨県には自然やフルーツしか何も誇れるものがないと思い込んでいましたが、誇るべき企業がたくさんあることを思い知らされました。



多文化共生地域課題

(多文化社会における対人援助／外国人と人権)

担当講師：新居みどり

1. 科目の目的

多文化化する地域における外国人住民の現状を知り、その諸課題について理解する。そして、世界につながる地域社会の一員として、多文化共生社会の実現にむけた方途について考察し実践する力を身につける。

2. 授業内容

- 1回 4月23日(土)3限 多文化共生を問うオリエンテーション (対面)
- 2回 4月23日(土)4限 多文化共生を問う(参加型ワークショップ) (対面)
- 3回 4月28日(木) 法制度から考える日本に暮らす外国人の現状と課題(総論)
- 4回 5月12日(木) グループディスカッション
- 5回 5月19日(木) 外国人住民の在留資格と社会生活
- 6回 5月26日(木) 外国人住民と地域福祉
- 7回 6月2日(木) 実践紹介—母子及び学齢期の親子支援
- 8回 6月9日(木) 外国人住民と地域日本語教育
- 9回 6月16日(木) 実践紹介—地域でのことばを通した活動
- 10回 6月23日(木) 社会とやさしい日本語
- 11回 6月30日(木) グループディスカッション
- 12回 7月7日(木) 外国人の参加と地域活動—若者の参加 ESUNEの活動からみえるもの
- 13回 7月14日(木) 外国人の地域参加とその声—山梨に暮らすわたしたち
- 14回 7月21日(木) 世界と地域 世界の人の移動
- 15回 7月23日(土) 発表活動(まとめ)

3. 講義を振り返って

大学生から社会人まで多様なバックグラウンドを持った受講者と多文化共生領域で実践活動をする講師陣の対話によって深い学びがつけられる講座であったと思います。多文化共生とは何かを考えるための参加型ワークショップから始まり、法律領域、社会福祉領域、「やさしい日本語」を含む日本語領域について基礎的な知識を学びつつ、受講者からの鋭い問いと、講師からの実践に基づいた返答で紡がれる対話こそがこの講座の一番の特徴でした。その後、地域で実践活動をする人たちの活動報告を学び、受講者が自ら設定した問題に対して実践活動を行うプロジェクトワークを展開し、最終日に発表を行いました。山梨における多文化共生領域の実践的な学びの機会となりました。

4. 講義を通して見えた変化や効果

受講者が多様な職種の社会人から学生までおられ、講座内で交わされる質疑応答から見える社会のあり様が、特に学生にとって大きな学びの機会にであるとともに、キャリア教育の一環にもなったと思います。また、国の政策から地域の小さな実践活動まで、受講者にとって広い範囲の基礎知識を体系的に学ぶ機会となり、特に社会人受講者にとっては、職場の仕事を行う上での参考になったと思います。これにより、山梨において、今後も増加するであろう在在外国人との共生社会を実現のために活動する人材の育成の一助になったと思います。

5. 受講者アンケート

○多文化共生への切り口は外国ルーツの人とのつながりが代表的であるため、身近な職場の仲間がどう感じているか、日常的にどう接しているかや聞き、効果的な意識の変化が生じるように取り組んでいきたい。そのため、まずはありのままの自分として答えてもらいやすい問いかけからはじめ、ヒントを得ることとしたい。

○コロナ禍で実際に現場の最前線にいたと言う話はどれもリアルで、特別想像がしやすく新たな視点を教えてくれるような回だった。想像力と感受性がとても必要になってくるというか、それがなければ目まぐるしい混沌の中の確かな判断は下せないと思った。また、外国人を支援することが日本ではまだ十分ではないことを痛感し、私自身もこの課題に対して何かできないかなという気持ちになった。

○「多文化共生」というと、特に公的機関においては、とりえず全て日本語から多言語に翻訳しておけばいいだろうという傾向が多くなってしまったと感じるなか、外国人住民それぞれに、それぞれの状況や暮らしがあることを知り、ソーシャルワークの視点をもって、ライフイベントに応じた情報を届けたり、共有したり、問題を解決していくということが重要なのだと思いました。大切なのは、「わが事」として捉えられる想像力。そして、過去に、よくよく聞いてみると想像とは全く違った内容や訴えだったことも多かったことを振り返ると、注意深く耳を傾け、問題解決のために、本人だけにフォーカスを当てずに、冷静に周りの人や環境、その接点にアプローチしていくことを忘れないようにしないといけないと思いました。

○在留資格について一度話を聞いただけでは理解できないほど複雑だと感じた。私はこの講義を聞かなければ在留資格が多文化共生において問題だと知ることにはなかったと思う

○支援方法とかよく現状を知らないで想像で考えてしまうことが多いけど自分はまず出会うところからだと感じた。しっかり外国人の方に出会い、話を聞き、ニーズを確認してから最後のスライドのように発展していくのだと納得した。百聞は一見にしかずまず出会うところから始められれば良いと思う。

○多文化共生に関わらず、社会をよくするには、世界をよくするには何が必要なのか考えると、やはりひとりひとりが「相手のことを想像できない」こと、そして「知らないこと」はそのままにしておけない課題だと思った。

5. 受講者アンケート

- （最終）発表を聞きながら、多様なバックグラウンドを持ったメンバーが集まると、同じ授業を受けていてもこんな風に問題意識が違って、調べたい内容も異なるんだなあと感じました。このクラス自体がまさに多文化共生の場であったように思え、最後まで参加できたことを誇らしく思えました。これからが大切で、実際に自分がこの山梨県でどういう風に生きていくか、やっとスタートラインに立ったような気がしています。自分ひとりではちっぽけな存在ですが、きっとできることはあると信じて、色々なことを考えながら行動に移していきたいです。
- 多文化共生に対して私は受講前から肯定的な考えでみんなが自由に生きれる社会になれば良いと思っていたが、どういった問題があるのか知らないことだらけだということが講義を通してわかった。他の受講生の発表はさまざまな立場、生き方をしている人がいるため自分にはない視点で世の中を見て、行動を起こしているためとても新鮮に感じた。それぞれの視点を自分一人で持つことは難しいが、その視点一つ一つを理解しようとするマインドは忘れないようにしたい。
- この講義では、毎回毎回新しい視点や知識を得ることができました。講師の方のお話だけでなく、グループでの話し合いや感想の共有もとても刺激的で楽しかったです。今まであまり触れてこなかった分野でしたが、講義を通じてもっと学びを深めていこうと思いました。
- 講座を受けるたびに起こった自分の中の揺らぎを大切にしながら、“相手の状況を積極的に想像する”というスタンスに倣って、相手のことも自分のことも恐れずに知っていこうと思う。



多文化社会とことば

担当講師：長坂香織

1. 科目の目的

コロナ禍で在留外国人数は僅かに減少しているが、令和3年6月末現在、我が国の在留外国人人口に占める永住者の割合は約3割を占め増加傾向にある。また、外国人労働者数は年々増加している。人口減少の日本社会、日本経済にとって、外国人住民はなくてはならない存在となっている。

そのような中で、「多文化共生」ということばが使われるようになって、少なくとも25年以上が経過している。共生にあたり3つの壁「ことば、文化、制度」があると言われていたが、この四半世紀、これらの壁は低くなったのだろうか。「共生」への眼差しは、日本社会でどれほど育まれたのだろうか。

本講義では、多文化共生社会／異文化コミュニケーションにおける複雑に絡み合った「3つの壁」の内、「ことばの壁」に焦点をあて、乳幼児期からの言葉の発達と母語・継承語による関わりを含めた、多文化共生社会における言語支援について理解し、多文化共生に向けて、その知識を仕事や人生などにどのように活かすか、自分には何ができるのかを考えることを目的とする。

2. 授業内容

第1回 (10/4) オリエンテーション／在留外国人の統計と現状把握／「3つの壁」について

第2回 (10/11) ことばと思考の発達／乳幼児期の言語獲得

第3回 (10/18) 母語・継承語／生活言語と学習言語／ダブルリミテッド

第4回 (10/25) 外国人住民への情報提供

第5回 (11/1) 小中高での日本語学習／地域日本語教室 (ゲストスピーカー)

第6回 (11/8) コミュニティ通訳 (医療、司法、行政、教育分野における通訳)

第7回 (11/15) やさしい日本語

第8回 (11/22) 発表とディスカッション、まとめ

3. 講義を振り返って

多文化共生に関しては、昨今、メディアでも頻繁に取り上げられるようになってきた。しかし、受講者は、学生であれ、社会人であれ、多文化共生の現場・現実についてほとんど知らないということに、まずは驚いた。そういう中で、共生の要になる「ことば」について、言語習得を含めた言語学的視点からだけでなく、できるだけ現実の社会一現場に結びつけて話すことができたことは受講者にとって大いに刺激となったと考える。また、現場活躍する方を交え授業ができたことは、受講者にとっても科目担当者にとっても有益であった。

クラスは、学生から聾啞者の家庭で育った方を含めた社会人の参加があり、グループディスカッションでは多様な学習者がそれぞれの立場から意見を述べ、学び合い、それ自体が多文化共生の場となったと考える。そのため、Google Formによる振り返りも、量も多く、実質的な現実を伴う学びや変化が各々の振り返りに見られた (以下の「学生からのアンケート等」に挙げたものはほんの一部である。)

4. 講義を通して見えた変化や効果

多文化社会の中での「ことば」は、ほぼ日本語だけで育ってきた者には未知の分野である。授業を通して理解を深めるだけでなく、情動が動かされ、日常の現象と結びつけ、その解明ができたり、中には行動につながり、職業人としての姿勢に反映させたりする受講者など、それぞれの現実に活かしている姿が見られた。また、今後さらに学びや理解を深めていきたいとする振り返りも見られることから、さらなる行動変容につながる事が期待される。

5. 受講者アンケート

○同じ景色を見ているのに言語や環境から、見えている世界も変わってくるというのが面白いと思いました。

○言語教育の重要性や身につくまでの過程、言語を十分に獲得できていないことによる問題を知ることができました。

○やさしい日本語に書き換えるときには、状況を想像したり、どう言えば相手に伝わるのか考えたり、一度立ち止まってみたりすることが重要であると今日の講義で実感しました。

○年齢階級別や母子家庭、国際結婚など今まで学んだことと違う視点から在日外国人について考えるのは新鮮でした。

また、母子家庭の問題でフィリピン人は日系が少ないため、問題が深刻化しやすいなど、国によっても少しずつ特徴や原因が変わってくることを初めて知りました。

○私は耳がまったく聞こえない両親に育てられ、家庭の中で言語獲得 (手話も日本語も) ができませんでした。ことばにとっても苦勞してきましたが、その理由が今日の学びの中にあり、自分のルーツを見つめ直すきっかけを頂けました、ありがとうございます。

○「言語権」について、非常に考えさせられました。言葉が分からなければ教育もまともに受けられないですし、人と会話することができません…現在私は手話通訳の仕事をしています、改めて自分のしている業務の重さを感じました。

5. 受講者アンケート

○今回の授業は、これから日本がますます多文化社会となっていくのがイメージできました。／外国人を「すみ分け」という現状に満足するのではなく、どうやって「共生」に持って行くかは私たちが考えていかないとけない。

○今回の講義だけでも考えさせられることが多くあり、大変貴重な時間となった。次の講義までにたくさん自分なりに今回の範囲を深掘りしたい。

○現在の日本国内、及び山梨県内の状況を知り、教育現場での日本語が分からない子どもたちのことを知れば知るほど胸が詰まる思いです／在日外国人児童生徒教育のあらゆる課題を聞く中で、同じ「学生」という身として、まだまだ私は頑張れることが多いなと思いました。置かれている環境が、在日外国人の子たちとは全く異なりますが、やるべきことから逃げられる、他人に甘えられる私の環境は恵まれているものだと改めて考えさせられました。また、彼らが抱える問題は内容は異なっても構造は日本人家庭と似ているものも多く存在すると思い、例えば家庭内暴力など人種や国籍関係なく、必要な人に必要な支援が届く体制を作ることの大切さを感じました。

○日本人は権利についての教育を受けていないので、あまりにも意識が希薄すぎだと感じます…知ること・学ぶことは重要で、様々な周知も国や自治体にもっと力を入れて欲しいと思います。／欧米の市民教育について少し学んでみたいと思った。

○やはり支援において1番難しい部分は、熱量と継続性だということを感じました。／後継者や若い人の日本語教室への関わりです。もっと多くの若者が興味を持ち、多文化共生や日本語教室に関わっていける社会でありたいなと思いました。／一つのことを継続する意思の強さやモチベーションはどこから湧いてくるのかが気になります。／今後の日本は、さらに外国籍児童、日本へ来る外国人が増えると思うと、日本では今すぐの一つ一つの問題を適切に解決していくことが望まれるはずだ。日本語指導者が少ない点、不就学問題、日本語教育自体の問題全てにおいて、私も手助けに貢献したい。今回の講義を通して、さらに日本語教員になることへの意思が強まった。

○発表の…準備から発表までの期間、新たな出会いがあり、充実していました。今後、今回の出会いから〇〇市での居場所づくりもしたいと考えています。／考えさせられる授業になったと思います。

○悪意なき差別という言葉がとても印象に残り、私が発する言葉自体が差別になるということを感じました。多文化共生を学ぶなかで、自分の使用する言葉にはどんな意味を持つか、相手がどう思うかということを考える必要があり、自分自身も気を付けていこうと思いました。

○もっともっと勉強をして正しく広い視野で物事を見れるように頑張ります。この「多文化社会とことば」という講義は今日で終わってしまったけど、今後もこう言った学びを自ら行い、地域貢献していきたい。

地域課題解決（多文化共生）

担当講師：弦間正仁、長坂香織、杉山歩

1. 科目の目的

山梨県には17,000人を超える外国人の方が住んでおり、母国と異なる文化やルールの中で様々な不安や悩みを抱えながら、山梨県民として生活している。こうした中、多文化共生の各分野で活躍されているゲスト講師から実際の現場での取り組み内容等を学ぶ。

本講義を通して、全ての外国人を孤立させることなく、社会を構成する一員として受け入れていくという視点に立ち、多文化共生社会の実現に向けた課題やその解決策等を考察し理解することを目的とする。

2. 授業内容

第1回（11/30水）：オリエンテーション、多文化共生社会づくりに向けた山梨県の取り組み
千田知宏（山梨県知事政策局外国人活躍推進グループ主査）

第2回（12/7水）：日本で活動する外国人の方の在留資格
村井昌一（東京出入国在留管理局甲府出張所所長）

第3回（12/14水）：日本人の海外移住の歴史および移住者と日系人の現在
村上啓子（独立行政法人国際協力機構横浜センター総務課調査役）

第4回（12/21水）：多文化共生社会の最前線～地域日本語教室の現場から～
古屋玲子（山梨県地域日本語教育コーディネーター）

第5回（12/28水）：児童福祉領域での外国にルーツをもつ子どもと親への課題と支援
小林真理子（山梨英和大学教授）

第6回（1/11水）：医療・介護の現場
石井貴志（社会福祉法人緑樹会理事長）
飯久保貴（山梨メディカルケア協同組合理事長）

第7回（1/18水）：外国人児童生徒支援
早川優子（山梨県教育庁義務教育課副主幹・指導主事）

第8回（1/25水）：中央市における多文化共生～現状と課題～
比志保（中央市国際交流協会会長）

3. 講義を振り返って

多文化共生に関する様々な分野で活躍しているゲスト講師を招いて、実際の現場での取り組み内容や課題等について生の声を聞くことができた。質問が時間が足りなくなるくらい出ただけでなく、振り返りもほとんどが長かった。本講義は高校生、大学生（3大学）、社会人の方に受講していただいております、グループディスカッション等を通して、多くの学びが得られたものとする。

この講義と「多文化共生の現場を歩く」の講義により、県内の多文化共生の現状と課題の全体像が把握できたものと思う。複数名の受講生はこの両方を受講しており、大きな満足感を得られたと考える。来年度以降も現場視察と教室内の講義を併せて受講していただくことを望む。

4. 講義を通して見えた変化や効果

多くの受講生にとって、多文化共生についての知識や経験は浅いものだったと思うが、本講義を受講することにより理解が深まり、積極的に自分の意見を発言する姿が見られた。また、受講生の振り返りや課題レポートなどには、今回の経験が自分の進路や今後の業務への参考になったとの発言がみられ、大きな成果をあげることができたと考える。とりわけ、大学生、高校生にとっては、現場の状況は初めて耳にすることが非常に多く、講師の話に加え現場にいる社会人の話を聞き、ディスカッションすることは気づきを促すにとどまらず、実際に自ら行動に反映させる学生もおり、改めて現場の学びが大学内でなされていない状況が認識された。

5. 受講者アンケート

○日本にいる外国人をすべて支援を必要としている人という解釈ではなく、ともに社会、地域をつくる人ととらえる視点があるのだと思い、私自身も考え方が変わった。／講義を通して自分の視野の狭さに気づくことができてよかった。

○今まで私は日本語教師のキャリアを敬遠していたのですが、その理由は、就職の場を想像できなかったからです。しかし、いろんな就職の場があることを講義を通して知ることができました。今回の講義を通してそのキャリアにも関心を持つことができた。

○教室がただ日本語の知識だけでなく、自信や元気までもらえる場になっているということで理想的な教室像なのではないかと考えた。講義をきっかけに興味を持ったので、今後新たなパートナーを募集することがあればぜひ応募したいと思った。

○アクティブラーニングを交えた授業展開で、受講者同士が考えをシェアする機会があり、日本語教室について大学生が持っているイメージがわかった。／席がランダムだったり、グループ学習といった形態がとてもよかった。他の参加者の方々との意見交換は、大変良い学びになりました。／学生さんたちからの質問が多く、関心が高いと感じました（席順の影響?）。みんなで助け合っていける社会ができそう、と希望を感じました。（社会人）

5. 受講者アンケート

- 日本人として日本に住んでいるだけでは在留資格などの話は身近ではなく、資料を見ているだけでは難しそうだとイメージしていたが、具体例を交えながらお話してくださって楽しく知識を得ることができた。
- 文化や背景が大きく異なる方々との関わりには多くの困難もあるかもしれませんが、外国人の方々の日本滞在を応援したいという気持ちを再確認することができ、さらなる理解と学びを深めていきたいと思いました。
- 国籍でのカテゴライズなど悪気もなくやりがちなことだが、一人ひとりに異なる背景があることを忘れず、相手に合わせた理解を行っていくことが重要だと気付くことができた。自分も相手も何者かということにとらわれ過ぎず、フラットな関係を築けるようになりたいと思った。／ここで現状を知ることができたので、必要な支援はどのようなものなのか改めて考えていきたい。
- これまで、日系の方や海外に移住された方に出会ったことはあるものの、詳しくお話を聞く機会はほとんどなかったため、大変貴重な学びの場となりました。まだまだ講義の中では語りきれないほどの想いがあったかと思いますが、お話を聞けてとてもよかったです。
- 児童虐待の内容は、あまりにも深すぎて、強烈でした。県職員は机だけではなく、このような現場を早いうちから体感することで、公僕としてだけではなく一個人として、仕事の姿勢や視点が変わり、人間力が高まっていくのではないかと思います。
- 講師の方自身をご自分のアイデンティティに悩んでいたことに共感した。見た目だけでは国籍はわからないこと、一括りにしない、国籍でアイデンティティをカテゴライズしないということばが心に響いた。また、講義を通して自分の視野の狭さに気づくことができてよかった。

芸術活動をととした多様性協働プロジェクト

担当講師：山野靖博、中原和樹

1. 科目の目的

自立した個人として他の個人と向き合い、対話し、それぞれの立場と役割を受け入れ合うことで、独りでは到達し得ない演劇創作を体験することを目指す。

その為に、自己の内省と他者への開示、他者の受け入れを軸として、表面上ではない深い対話を進めていく。社会的レイヤーから切り離された、人間同士としての交流と繋がりを構築することが必要となり、自分も生き、相手も生きるという道を探求し、自身の観点を広げ、鋭く成長させる。

2. 授業内容

- 第1回 (5/31 火) オリエンテーション / ワークショップ① (他者と場を知り、遊び心を見つけてみる)
- 第2回 (5/31 火) ワークショップ② (演劇とは? 演じるとは? 劇場とは?)
- 第3回 (6/21 火) 冒険① (作品創作のためのスケッチ・リサーチ)
- 第4回 (6/21 火) 冒険② (作品創作のためのスケッチ・リサーチ)
- 第5回 (7/12 火) ディスカッション① (スケッチ・リサーチを物語の断片化する)
- 第6回 (7/12 火) ディスカッション② (物語の断片に各々の文化的背景を染み込ませる)
- 第7回 (10/31 月) 演劇稽古① (テキスト化した物語の読み合わせ)
- 第8回 (10/31 月) 演劇稽古② (身体と自由な発想でシーンを組み立てていく)
- 第9回 (11/14 月) 演劇稽古③ (オリジナルアイデアの持ち寄りを作品に入れ込む)
- 第10回 (11/14 月) 演劇稽古④ (物語全体を通じての核と対象を再認識する)
- 第11回 (11/28 月) 演劇稽古⑤ (各役割においてのこだわりを発揮する)
- 第12回 (11/28 月) 最終通し稽古とブラッシュアップ
- 第13回 (12/17 土) 演劇発表/本番に向けた準備・リハーサル
- 第14回 (12/17 土) 演劇発表/本番
- 第15回 (12/17 土) まとめ、総括

3. 講義を振り返って

異なる文化が「共生」するということは、「自」と「他」が共に生きるということであると考えたことから、今回の内容の構築を始めた。

自分を押しさえ、他者にあわせていくのではなく、自分も解放し、他者の視点も持ち（共感することで）、その両者の一番良い落としどころを探る作業というのは、演劇において必須な方法であり、それは妥協と言えるような場面もあれば、両者が生きる道を探ることで、より良い選択肢に行きつくこともあるものである。

そのためにはまず自分を知り、他者を知り、人間を知ることが肝要であるが、その創作のプロセスそのものが、多文化共生において重要なキーであると、講師自身も改めて実感することが出来た。

見かけ上の「会話」ではなく、「対話」を行い、協働を行うことは難しく見えるが、実際はとてもシンプルなものであり、だからこそ力強い。脚本創作や作品創作で学生と講師自身も深く学生と協働出来、それを実感した。

4. 講義を通して見えた変化や効果

演劇を通じて学生に浸透した事柄として、以下の二点が挙げられる。

一つは、演劇というのは上手に演じるのではなく、自分を知り、相手と結びつき、人と人の繋がりの中で物語を立ち上げていく作業であるということ。

その結果、社会的な縛り（正解を探らないといけない、正しくあらないといけない）から解放された、より深い対話が学生たちの中で生まれた。つまり、外間的・社会的な観点ではなく、今現在・ここに存在する「私」と「あなた」という、純粋な「人間」同士の対話となった。

もう一つは、人同士の繋がりとして、言葉以外の感覚、触れあい、コミュニケーションが大変重要であること。その結果、言葉を交わすという事象も、本来は意志を通じ合いたい、分かり合いたいという人同士の想いが生んだ一つの選択肢であり、実は他にも選択肢はたくさんあり、言葉が全てではないことに気付くことで、言葉によるコミュニケーション自体も考える機会となった。

5. 受講者アンケート

○私は今まで「演じる」ということや何かを作り上げる時に、意図せずにその「正解」を意識してしまったり、どうすれば一番良いかということばかり考えてしまっていました。ですが、今回のこの講義を通して、型にはまらず自由に表現する楽しさを知ることが出来ました。また、大学生やアルプス学園の皆さんとの関わりの中で、劇の脚本について多面的にディベートすることで自分の中の考えも深め、それと同時に様々な考え方を知ることが出来たのもとても楽しかったです。特にアルプス学園の皆さんと授業を受ける中で、言葉だけでなくジェスチャーやダンスなどで沢山コミュニケーションをとることが出来たのは本当に貴重な経験でしたし、授業の中で日本とブラジルの共通点、相違点を沢山見つけられたのはとても興味深かったです。

5. 受講者アンケート

○私は今まで「演じる」ということや何かを作り上げる時に、意図せずその「正解」を意識してしまったり、どうすれば1番良いかということばかり考えてしまっていました。ですが、今回のこの講義を通して、型にはまらず自由に表現する楽しさを知ることが出来ました。また、大学生やアルプス学園の皆さんとの関わりの中で、劇の脚本について多面的にディベートすることで自分の中の考えも深め、それと同時に様々な考え方を知ることが出来たのもとても楽しかったです。特にアルプス学園の皆さんと授業を受ける中で、言葉だけでなくジェスチャーやダンスなどで沢山コミュニケーションをとることが出来たのは本当に貴重な経験でしたし、授業の中で日本とブラジルの共通点、相違点を沢山見つけられたのはとても興味深かったです。

○最終のパフォーマンスは残念ながら全員で演じることは出来ませんでした。練習の中で積み重ねてきたことをしっかり発揮できた本番だったと思います。ですが、練習の決められたものそのままをやるのではなく、本番は練習と違った表現をしたり、一人一人がそれぞれの思いを胸に本番に挑んだので、劇にも深みが増した気がしました。特にクライマックスとも言える、自分の選んだ言葉を読み上げられたり、詩になるシーンは、自分の選んだ言葉＝自分を表す言葉について考え、そして自分と向き合うことが出来たと思います。こうしてしっかり自分と向き合うということは私自身あまりなかったのですごく良い機会だったなと感じます。

○型にはまらない演劇は、今までの私の中の演劇の固定概念を覆すような素晴らしいものでした。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございます。

○一連の講義では他の学生との意見交換や役を通しての身体表現を経て、自分自身について深く考えることが多くなったように感じた。脚本やお芝居をするうえで、ベースとなってくるのはどうしても自分自身の経験や考え方・感じ方なので、他の人を大切にするだけではなく、まず自分自身を回顧して堅実に生きていこうと思えるようになった。様々な背景を抱えている人とディスカッションする中で、私自身は普段生きていくうえで様々な人を受け入れていこうという意識を持っていたのにもかかわらず、意外とバイアスやエゴを無意識のうちに持っていたことを知ることができた。異なる言語を母語としていても自動翻訳ツールなどを使用すれば会話は多少なりとも成立するような時代ではあるものの、講義の中で使った「ジブリッシュ」（非言語）で何かに対してリアクションをしているときには、機械を使って会話しているときよりも相手の感情や心の機微にまで触れていくことが可能になったように感じたので、何かを伝えようとする気持ちや機会に頼ることなく自らコミュニケーションを積極的にとっていくという姿勢が大事なのだなと思った。

○最後のパフォーマンスは、これまでの稽古の中で一番密度が濃い時間のように感じた。これまでの講義の中で築き上げたものががちりと合わさって、演者同士でアイコンタクトが増え、お芝居を通して会話をしているような感覚になって不思議な体験だった。終盤の詩の朗読後に舞台から去っていく場面では、完全に自分自身の役がアウトオブコントロールのようになって自然とお芝居をすることができて、本番でこれまでの積み重ね以上のもの、かつ、この場所・時でしか体験することのできないものを享受することができた。



多文化共生の現場を歩く

担当講師：弦間正仁、長坂香織

1. 科目の目的

多文化共生に関わる現場に足を運び、実際に見て、その現場の方の話を聴くことを通して、多文化共生の現状と課題を肌で感じ、理解する。また、それらの課題解決に向けた現場の対処について学び、多文化共生を自分事として考える姿勢を身につける。

2. 授業内容

- 第1回(8/5)オリエンテーション、
多文化共生に関するプレディスカッション
- 第2回～第4回(9/7) (県内視察1)
バスによる県内研修 (1日)
製造業、教育機関をはじめとした、
多文化共生の現場および活動の視察研修
- 第5回・第6回(9/14) (県外視察)
バスによる県外研修 (1日)
① JICA横浜海外移住資料館 (神奈川県横浜市中区)
日本人の海外移住の歴史と日本に住む日系人について
② 外国人在留支援センター「F R E S C」
(東京都新宿区四谷)
国の外国人在留支援について
- 第7回(県内視察2)
指定された県内の現場から、
最低1か所を選び視察研修(現地集合・解散)**
○甲府市「やさしい日本語会話・異文化体験サロン」(9/22)
○山梨県立大学・甲府市主催「日本で生活する外国人のための日本語・日本文化講座」(9/18、9/25)
- 第8回(9/30)発表と意見交換(ディスカッション)、まとめ



3. 講義を振り返って

異なる文化を持つ外国人との共生に向けた製造業や教育機関、行政等の取り組み、多くの外国人とともに居住する団地の抱える問題など、県内の多様な現場視察を通して現状と課題及び現場での対応状況を直に学ぶことができたと感じている。また、県外視察では、日本人の海外移住の歴史や日系コミュニティ等について学ぶとともに、国の外国人在留支援窓口の取り組み状況を視察することにより、受講生には多文化共生についてより広い視野から多くの学びがあったものと考ええる。

本講座全体を通して、国や県、市町村、民間企業、ボランティア、住民の方などから生の声を直接聴くことにより、教室の講義では得られない多くのことを体感できたのではないと思う。同時に、複数学科の学生、社会人、外国ルーツの学生、他大学の学生など多様な受講生で構成されていたことは、学生の振り返りにもあるように、多様な視点、まさに多文化共生を学ぶにふさわしい場であったと考える。

4. 講義を通して見えた変化や効果

当初、多くの受講生にとって多文化共生はまだまだ理解の浅い分野であり、メディアなどの報道から間接的に認識されたものであった。今回県内外の多様な現場を視察することにより、一人ひとりが、日本社会、地域社会が現在直面している多文化化の現状を、様々な視点から、直に自分の目で捉え認識し、関心を抱ききっかけになったと考える。

また、受講生の振り返りから今回の経験を自分の将来に活かしていきたい、多文化共生に向け自分にできることを行動に移していきたい等の、今後につながる積極的な意見や気づきが多く出たことは大きな成果であったと言える。

5. 受講者アンケート

○多文化共生への問題点や共生することの難しさを感じた。今後さらに学習して私も多文化共生に貢献できるようにしたい。今回の講義は数えきれないほどの学びを得ることができ本当に貴重な講義となった。

○将来、しっかりと自分の就職に活かせるように、今から少しずつ取り組みを行っていききたい。／自分にできることは限られているかもしれないが、多文化共生に向けて行動していききたい。／（現場で取り組んでいる）方々の熱意を受け取って、ボランティアなど、自分にも多文化共生のためにできることを発見していききたいと思いました。

○同じように授業を受けていても、多文化共生社会というテーマに関しては様々な意見があって非常に興味深かったです。…やはり一番重要なのはそれぞれが「自分でもできること」を模索して少しずつ行動に移していくことだと思います。そして私たちの起こしたアクションが、いつか周りの人々を巻き込んで社会に大きな変化をもたらすことができたらいいなと感じました。

○多文化共生について学ぶのは今日の授業で終わりというのではなく、常に頭において考えていかなければならないことであると感じた。／今回学んだことを今後の大学生活で、(また)社会人になった後に生かせるよう、学んだことを忘れず、より深く考えていこうと思う。

○固定観念にとらわれず幅広い視野を持つことができれば相手をありのままに受け止めることができ、それは多文化共生に繋がるのではないかと考えさせられました。…この授業はとても考えさせられることも多く、有意義な時間となりました。

○実際に現場視察を行うことで自分自身の体験として短期間でも深く学ぶことができたと思う。



地域課題プロジェクト（多文化共生イベント企画）

担当講師：錦織信幸、長坂香織、杉山歩

1. 科目の目的

1990年の入管法改正から在留外国人の急激な増加がみられ、とりわけ1995年1月の阪神・淡路大震災以降、多文化共生社会に向けた取組みが数多く見られるようになってきました。しかし、地域の多文化共生は進んでいるとは言い難いのが現実です。

この授業の目的は、地域の多文化共生の現状と課題を理解し、多文化共生を進展させてきた全国の好事例を学び、多文化共生に資する対話型プロジェクトの企画・運営(実施)の方法について理解し、実際に体験することにあります。

2. 授業内容

第1回（11/29 火）オリエンテーション／山梨県の多文化共生の現状と課題／外国の方の住まいにかかわる課題（概観）

第2回（12/6 火）外国の方の住まいにかかわる課題（賃貸管理業者の視点から）

第3回（12/13 火）関係者を交えたパネルディスカッション

第4回（12/20 火）課題の整理 / 多文化共生プロジェクトプロジェクト企画

第5回（1/17 火）プロジェクト実施の準備①

第6回（1/24 火）プロジェクト実施の準備②

第7・8回（2/11 土）プロジェクト実施

3. 講義を振り返って

具体的なテーマとして、外国の方の住まいにかかわる課題について取り組みました。住居は人が生活する上で欠かせない基本的ニーズであり、安心・安全な生活を営む上での基盤となるものです。しかしながら外国籍の方々や外国にルーツを持つ方々にとって、日本での住宅確保は容易ではなく、差別的な処遇も横行しているという現状があります。本科目では、住居の賃貸・管理にかかわる関係者、住居に課題を抱える当事者の方々などから学び、課題解決のための具体的なアクション（対話型イベント）を計画・実施することができました。

授業は、外国の方の住まいという実は身近にある「社会問題」を知ることから始まり、関係者からの講義に学び自ら情報収集することで深掘りし、受講者同士でディスカッションする中で問題を整理し、解決策を模索し、具体的なアクションに移していくという問題解決型のスタイルを採用しました。情報の探索、知識の吸収から、徐々に知識の内在化と問題分析につなげていくというプロセスそのものを楽しみつつ、その能力を育てることがこの科目の重要なポイントであったと思います。

実際にほとんどの受講生は、テーマについての事前の知識はなかったにもかかわらず、毎回の授業と課題を通して知識を身につけ、問題の背後にある利害関係や社会的要因を理解することに努め、楽しみながらイベントの企画・実施に取り組めていました。

とかく固定観念にとらわれがちな問題についても、柔軟な発想で解決策を議論していく様子はとても頼もしく、喜ばしく感じ、多文化共生を大学の教育課程で扱うことの意義をあらためて感じさせてくれました。

4. 講義を通して見えた変化や効果

気づき、情報収集、分析、解決策の模索、行動という一連の授業の流れに乗りながら、それぞれの段階でしっかりと考えを深化させていく様子がよくわかりました。

気づきの段階では「想像していた以上に外国人に対する差別がひどくて理不尽なものばかりでした」等のフィードバックがありました。しかし単純な差別問題として片付けるのではなく、「権利の衝突によって起きている問題であるし、どちらの権利も保障されるべきだ」という複雑さも理解しました」と、様々な関係者の立場を踏まえながら問題の構造そのものを理解するという姿勢がみられました。さらには、問題の理解からさらにすすめて「山梨に住む外国人の方が気持ちよく暮らすためにはどうしたらよいかを考える機会が沢山あった」、そして「それに対して行動できたことが1番の収穫」と行動までのプロセスそのものをポジティブな体験として評価することができていた。

5. 受講者アンケート

○住まいについて知識ゼロだったが少しずつ仕組みを理解できたことが良かった。またそれに加えて、山梨に住む外国人の方が気持ちよく暮らすためにはどうしたらよいかを考える機会が沢山あったこと、またそれに対して行動できたことが一番の収穫です

○イベントを実施するにあたり、実際に多くの方々とお話ししたり、依頼をしたりという経験はこれから社会に出る上でとても力になるものでした。住まいのことについて学習するだけでなく、人との繋がりや関わり方、話し方、企画運営など社会人に求められる資質能力を身につける機会となりました。

○住居というテーマを軸に共生社会を創っていくために、仲間と協力しながら具体的な提案を考えるという経験ができた

○住居に関する知識を得ることができ、それにプラスして多文化共生の観点からディスカッションをしたり、実際に当事者や関わっている方にヒアリングしたりでき、とても身になる時間を過ごせた。

○少数でのグループワークを通じて、それぞれが意見を出し合い、建設的な議論を交わすことができていた。先生やゲストの方々もオープンな雰囲気、目標に向かってより良い話し合いができていたと思う。課題解決のために必要な活動力を養うことができたと思う。

多文化対応人材育成演習（教育）

担当講師：ピッチフォード理絵

1. 科目の目的

全国の公立小学校～高等学校に在籍する外国人児童生徒の数は2018年調査では93,133人、このうち日本語指導が必要な児童生徒数は40,755人です。また日本語指導が必要な海外にルーツを持つ日本国籍者も一万人を超えています。彼らのような「海外にルーツを持つ子どもたち」の多くは一時的に日本に滞在しているのではなく、今後も日本に住み続け将来日本社会の一翼を担うこととなります。彼らのおかれた環境、背景を理解し、国、自治体、地域、学校の取り組みを知り、彼らの成長を支えるために組織として、また個人として何ができるか考える力を養います。

2. 授業内容

- 第1回（4/13 水）オリエンテーション 日本で暮らす海外ルーツの子どもの基礎知識
- 第2回（4/20 水）海外ルーツの子どもの抱える課題1 「言葉」日本語と母語、バイリンガリズム、ダブルリミテッド
- 第3回（4/27 水）海外ルーツの子どもの抱える課題2 「学校」教科学習のための日本語、日本の学校文化への適応
- 第4回（5/18 水）海外ルーツの子どもの抱える課題3 「環境」家庭、出身国、教育背景、アイデンティティ
- 第5回（5/25 水）高校進学の際とその先のキャリア 来日時期、在留資格との関係
- 第6回（6/1 水）ここまでの課題の振り返りディスカッション 現場オンライン見学、当事者の生の声を聞く
- 第7回（6/8 水）自治体、学校、地域、NPO等支援団体の取り組み
- 第8回（6/15 水）海外ルーツの子どものために私たちができること

3. 講義を振り返って

海外につながる子ども・若者について知り、ここ山梨で真の多文化共生社会を築くためになにが必要かを深く考えていく過程で自らのこの課題に対するここまでの関りを見直し、次に何をすべきかの手掛かりになったかと思う。履修者は少数ではあったがそれぞれ海外につながる子ども・若者に関して高い関心があり実際に支援活動に携わっている者もいたため授業中に活発な意見交換や体験の共有ができた。多文化共生と国際交流の違いを認識したことで次の一步の方向性がはっきりすると思われる。多文化共生社会は特別なものではなく、海外につながる人々、障がいのある人、LGBTQ、そしてそれぞれの「文化」を背負っていながら自分では「普通」だと思っている私たち一人が文字通り共に生きる、みんなにやさしい世界だということをきちんと受け止め次のステップに進んでいきたいという学生の意欲を強く感じた、講師にとっても実り多い授業となった。

4. 講義を通して見えた変化や効果

実際に地域でのボランティア活動や支援活動に参加している者や参加を考え見学に行ったものもいたがなぜ「外国人児童生徒」ではなく「外国につながる児童生徒」と呼ぶのか、というポイントを初めて知った、というものも多かった。今まで見えていなかった現実を知ったことでより子どもに寄り添った活動が可能になるであろう。なかなかボランティア活動への参加に踏み出せなかったが海外につながる子どもたちの置かれた現状をきちんと理解したことで自信をもって活動に参加したい、という声に心強く思う。

多文化対応人材育成演習（保健・医療・福祉）

担当講師：沢田貴志

1. 科目の目的

国境を越えた人の移動が活発化するグローバル化の進行の中、保健・医療・福祉の各分野においても外国人住民の、人として、また生活者としての権利の保障がますます重要となっている。日本での現状と課題を理解し、課題解決にむけた具体的な対応・取組みを考え、専門職としての実践ができるようになる。

2. 授業内容

第1回から第6回はオンライン、第7回、第8回は、対面で行う。

第1回（6/8水）オリエンテーション／途上国スラムの例をもとに医療や福祉にアクセスできない場合の困難を例示

第2回（6/15水）日本での外国人医療の課題を過去の経緯を踏まえて示し必要な資源について概観する

第3回（6/22水）社会資源を知る：医療通訳

第4回（6/29水）社会資源を知る：NPOの外国人相談窓口

第5回（7/6水）社会資源を知る：社会福祉制度

第6回（7/13水）社会資源を知る：行政と外国人相談窓口の連携

第7回（7/23土）日本で暮らす外国生まれ住民が病気などによって医療や福祉の支援が必要になった具体例を提示して解決までのプロセスを話し合う（1）（対面）

第8回（7/23土）日本で暮らす外国生まれ住民が病気などによって医療や福祉の支援が必要になった具体例を提示して解決までのプロセスを話し合う（2）（対面）

3. 講義を振り返って

外国人の医療アクセスを阻む問題として言葉の壁、経済的障壁、文化習慣の違い、支援や情報の不足と言ったことがあることを理解し、その解決策を探るすべを身につけることを目標とした。受講者の人数は少なかったが、全員意欲的かつ積極的な参加があり、議論も盛り上がった。最初の二回の講義で外国人医療の課題を提示し、続く4回で外国人医療に関わる人材についてそれぞれの現場の講師を招聘して講義をいただき、最後に具体的な事例を4つ提示して問題解決を図る共同作業を行った。他の大学で類似の演習をする際よりもかなり深まった議論となったのは、受講生の間に実務経験者が多かったことに加えて、外国人総合相談窓口、NPO、医療通訳、医療ソーシャルワーカーの役割を十分知った上での議論ができたことが大きかったと思われる。また、看護師・教員・社会福祉を学ぶ学生という多部門の背景がある参加者であったことも効果的であった。講師の話の中には少し概念的で難解なものではないかと思われるものもあったが、リアクションペーパーでは「解りやすかった」との回答であったので安堵した。今後、具体的な事例を増やすなどさらに分かりやすいものとなるよう講師と調整をしたい。

4. 講義を通して見えた変化や効果

当初、外国人とのかかわりは少なく経験があまりないという受講者もあり関心が継続するかどうか心配もあった。しかし、事例の検討を織り交ぜた講義をする中で積極的な意見の表出があり、次第に関心が深まっていくのを感じた。看護の背景を持つ受講者は、自分の目の前のクライアントへのより良い対応を行うための学習をしたいという意欲が強く、福祉の学生は社会のあるべき姿について考える視点があり、両者の意見が交流することが大変興味深かった。今回は、残念ながら福祉の学生の参加が少なく、こうした場面は限られたものであったが両者の参加があることが効果的であることを感じた。

5. 受講者アンケート

言葉、経済、文化、情報といった課題に気づいていただくことを目指していたが、「言葉（コミュニケーション）で共通理解できることが必要だと思う。」「円滑なコミュニケーションをはかるためには、患者の社会背景や、文化習慣を尊重し理解することが必要である。」「正しい知識を常に知っておくことで必要な人に必要な支援を届けられるということが印象に残りました。」「外国人の受け入れや、医療は待たなしなのに、社会的な制度が立ち遅れていることや、SDGsの真の理解がなされていないということが印象に残りました。」といった感想が得られメッセージが伝わっていると感じた。更に、「他職種で連携することで見えてくる解決策や視点があり自分としては嬉しい発見でした。」「言葉が通じないことは覚悟のうえで、困っていそうな人に勇気をもって接触してみたい。」と今後のアクションにつながるような感想が寄せられたことに勇気づけられた。

アントレプレナーシップとスキル

担当講師：戸田達昭、今井久

1. 科目の目的

地方創生の実現や持続可能な社会を構築するためには、そこに住まう一人一人が担い手となる必要があり、課題を明確化し、アクションを起こしていく中で課題を解決していくことが必要です。そのアクションの一つに、事業による課題解決のアプローチがあります。

事業を起していく人を起業家と言いますが、起業家にはマインドセット、スキルセットの両方が必要です。本科目では、国内における起業家教育で極めて高い評価を得ている山形大学と連携し、各地で活躍されている方々の取り組みをビデオコンテンツで学び、優れた起業家のマインドセット、スキルセットに触れていただくとともに、履修生徒内でチームを作り、具体的なビジネスモデルを構築し実践をしていきます。理論と実践の両輪で、地方創生の担い手たる起業家の育成を目的としています。

2. 授業内容

第1回 (10/5 水) : オリエンテーション

第2回 (10/5 水) : チームビルディング・ワークショップ (プロジェクトテーマ決め&ディスカッション)

第3回 (10/12 水) : 「儲けのカラクリ」 廣川克也氏

(慶応義塾大学 湘南藤沢キャンパス SFCフォーラム事務局長)

第4回 (10/12 水) : チームディスカッション

第5回 (10/19 水) : 「デザインとブランディング」 佐藤成美氏 (プラナンドコミュニケーションプランナー)

第6回 (10/19 水) : チームディスカッション

第7回 (10/26 水) : 「Idea,Passion,Start with WHY」 マンジョット・ベティ氏

(株式会社 Just on time 代表取締役)

第8回 (10/26 水) : チームディスカッション

第9回 (11/2 水) : 「企業経営の基礎」 小野寺忠司氏 (山形大学 教授 国際事業化研究センター センター長)

第10回 (11/2 水) : チームディスカッション

第11回 (11/9 水) : 「グローバルからローカルへ」 デビット・ベネット氏

(NECパーソナルコンピューター 代表取締役 執行役員社長)

第12回 (11/9 水) : チームディスカッション

第13回 (11/16 水) : 「人を動かすプレゼンテーション」 武田昌大氏

(トラ男米プロデューサー&シェアビレッジ村長)

第14回 (11/16 水) : チームディスカッション

第15回 (11/30 水) : チームプレゼン発表会

3. 講義を振り返って

起業家教育で日本一の実績を誇る山形大学 (文部科学省事業 EDGE-NEXT 早稲田コンソーシアムにて最高評価Sを獲得) にて私もプログラムコーディネーターとして構築してきたコンテンツから本授業向けにいくつかを抜粋して実施しました。構成としては一日二コマ (90分×2コマ) なので、一コマ目を世界で活躍する一流の講師陣をオンラインとオフラインのハイブリッドでお呼びしてのインプットの時間とし、二コマ目を自らの事業プランを考える時間 (プレゼンテーションも行う) の二本立てで行うことで、インプット・アウトプット・アウトカムを意識できるような構成で行いました。その中から授業後にメンタリングを希望してくる生徒や、私のオフィスに訪問してくる生徒がいたり、次のアクションに繋がっている生徒もおり、二コマ構成で実施たからこそ成果かと感じています。また、グループディスカッションも行ったので、参加生徒たちのきずなも深まっているように見受けられました。

4. 講義を通して見えた変化や効果

講義当初は世界で活躍する一流の講師陣の勢いに圧倒されて、話についていくのが大変そうに見えましたが、どの講師も共通している事柄があり、中盤以降は楽しそうに聞いているのが印象的でした。

また、二コマ目の事業づくりのワークショップは基本的に毎週ブラッシュアップ&プレゼンテーションを行うので、生徒たちのプランの精度が高まっていくことと、一コマ目の学びが講義の後半では生きてくる一面もあり、生徒たち自身も成長を実感してくれたと思います。



グローバルビジネススキル

担当講師：戸田達昭

1. 科目の目的

山梨から世界で活躍する起業家となるためには、グローバルで戦えるスキルが必須です。本科目ではグローバルで活躍している方の活動をビデオコンテンツの視聴と担当教員による解説により触れていただき、世界で戦えるビジネススキルを学びます。事業戦略、知的財産の活用、マーケティング、ファイナンス、M&Aをテーマとした一流の取り組みに触れていただき、また、世界一の大学併設インキュベーターであるDMZ（カナダのライオンズ大学併設インキュベーター）との連携により英語でのコンテンツにも触れ、グローバルビジネススキルの向上も目的としています。

2. 授業内容

第1回（12/7水）：オリエンテーション

第2回（12/14水）：「事業戦略の基礎」廣川克也氏

（慶応義塾大学 湘南藤沢キャンパス SFCフォーラム事務局長）

第3回（12/21水）：「事例で学ぶ事業価値を高める知的財産活用術」田中雅敏氏

（明倫国際法律事務所 弁護士/弁理士）

第4回（1/4水）：「マーケティングの最前線」白根有一氏（ジョルダン株式会社 戦略企画部長）

第5回（1/11水）：「ベンチャーファイナンス」菅谷常三郎氏（みやこキャピタル 代表取締役）

第6回（1/18水）：「グローバル戦略」川島健一氏（Lenovo 戦略的投資組織 エグゼクティブディレクター）

第7回（1/25水）：DMZ提供コンテンツ①

第8回（2/8水）：DMZ提供コンテンツ②

3. 講義を振り返って

アントレプレナーシップとスキル同様に山梨大学にて構築した授業コンテンツの活用に加えて、大学併設インキュベーターとして世界一のランキングを誇るカナダのDMZと連携したコンテンツ（ファイナンスとマーケティング）を活用しました。座学メインの作りになったのと、普段触れ合わないような専門用語もたくさん出てきましたので、生徒たちも大変そうでしたが、授業中はもちろんのこと、その後も自ら調べるなどして必死についてきている様子を見て感心しました。超一流の講師陣からグローバルで戦うために必要なマインドセットとスキルセットの両方を伝えていく授業だったので、満足度は高かったのではないかと感じています。この授業は高校生、大学生、社会人という多様な構成でしたので、意見交換を行う際にもそれぞれの視点での意見となり刺激にもなっていたようですし、講師陣も同様に刺激を受けたと言っていました。山梨に居ても一流に触れる、ということを取り組んできましたので、一定の効果はあったのではないかと感じています。

4. 講義を通して見えた変化や効果

当初は慣れない専門用語や講師のインパクトに圧倒されていましたが、だんだん慣れてきて楽しそうに話を聴くようになっていました。グローバルで戦い、成功している方のマインドと自分を重ね合わせているようで、毎回のレポートも回を重ねるごとに、アウトカム（得られたもの）についてコメントする生徒が増えてきたように感じました。また、この授業を受けていた学生が私の会社のインターンとして関わるようになり、こういった刺激や具体的なアクションに繋いでいきたいという意志を感じ、感心しています。コロナの影響もあるのか、自己肯定感を高めていくような仕組みや仕掛けは重要に感じます。



アイデア共創実践

担当講師：戸田達昭、杉山歩

1. 科目の目的

自分がどのような社会を作っていきたいのか（よりよい社会を作っていきたいのか、或いは課題を解決したいのか）、ということを実業を通じて実現するのが起業です。多くの先輩起業家や専門家たちをメンターとして迎え事業をデザインしていく方法とそれを相手に伝える方法（プレゼンテーション）を学び、実践することを目的としています。

2. 授業内容

- 第1回（6/26日）：オリエンテーション
- 第2回（6/26日）：ワークショップ・メンタリング
- 第3回（6/26日）：ワークショップ・メンタリング
- 第4回（6/26日）：ワークショップ・メンタリング
- 第5回（7/10日）：ブラッシュアップ・プレゼン準備
- 第6回（7/10日）：ブラッシュアップ・プレゼン準備
- 第7回（7/10日）：プレゼンテーション
- 第8回（7/10日）：プレゼンテーション



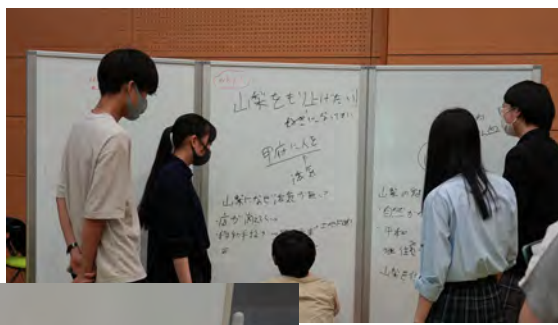
3. 講義を振り返って

休日二日間を活用して高校生、大学生そして社会人の参加者がチームを組んで、社会の課題は何か、どのように解決していけばよいか、具体的なアクションを起こすために、自らが何をするのか、ということ議論・意見交換し、プレゼンテーションを行うというワークショップ形式で行いました。

普段一緒に取り組むことが少ない組み合わせだからこそ、色々な意見が出て、活気のある講義になりました。また、この授業後の私の他の授業や起業家育成に係る事業に参加する生徒もいて、連続的な学びと実践へのキッカケになっていると思います。この授業のタイトルにあるように、自ら主体的にアイデア考え、それを多様な担い手と共創していくことは今後の社会を生き抜くために必要なスキルなので、まずは実感していただくきっかけになったのではないかと思います。改めてこういった授業の肝は課題の設定であることを強く実感しました。いかに共感力の高い課題を設定できるか、これはビジネスを行う上でも必要な項目なので、今後も生徒たちに伝えていきたいと思っています。

4. 講義を通して見えた変化や効果

講義当初は、初めて出会う方々とチームを組む形になったので当然コミュニケーションが難しそうでしたが、社会人参加者等が気を利かせてコミュニケーションを促しており、良い雰囲気で行われていたように感じました。どのような活動においても“なぜそれに取り組むのか”というWHYを問うことはとても重要なので、参加してくれた生徒たちにもインプットされたと思います。この講義を通じて出会った仲間たちで具体的なアクション（水素・燃料電池を活用した装置の開発やイベント）を起こすチームもあり、今後の活動に繋いでいってもらえたらと思います。



ビジネス共創実践

担当講師：齊藤浩志、今井久

1. 科目の目的

- ・今、世界はこれまでにない先行き不透明な状態にあります。そんな時代を生き抜くカギは、自分のしたいことを意識して行動できるかどうかにあると言えます。
- ・『やりたいことをやる』。それこそがこれからの時代、会社が倒産したとしても、リストラにあっても、どんな逆境に遭遇したとしても、独自に生きていく力になります。
- ・本講義では、「Mt.fujiイノベーションキャンプ」への参加を通じて、社会に存在する課題を自分ごととして捉える課題の発見力や共感力を育むとともに、不確実性の高い環境下でも未来創造や課題解決に向けた行動を起こしていくための精神と態度を学ぶ機会とします。

2. 授業内容

第1回（9月1日(木)）：「Mt.Fujiイノベーションキャンプ」に向けて
「Mt.Fujiイノベーションキャンプ」

< 1日目 >

第2回（9月23日(金)）：オリエンテーション、参加者・メンター・共創パートナー紹介

第3回（9月23日(金)）：メンターによるメンタリング・共創パートナーとのディスカッション

第4回（9月23日(金)）： //

< 2日目 >

第5回（9月24日(土)）：メンターによるメンタリング・共創パートナーとのディスカッション

第6回（9月24日(土)）： //

第7回（9月24日(土)）：イノベティブビジネスプランコンテスト（予選）

第8回（9月24日(土)）： //

第9回（9月24日(土)）： //

< 3日目 >

第10回（9月25日(日)）イノベティブビジネスプランコンテスト（決勝）

第11回（9月25日(日)）： //

第12回（9月25日(日)）： //

第13回（9月25日(日)）： //

第14回（9月25日(日)）：参加者どうしのフィードバック「振り返り」

第15回（9月29日(木)）：「Mt.Fujiイノベーションキャンプ」を終えて

3. 講義を振り返って

まずは本講義（イノベーションキャンプ）に参加する時点で、参加者全員がすでにアントレプレナーシップの基本的素養を有していると考えます。

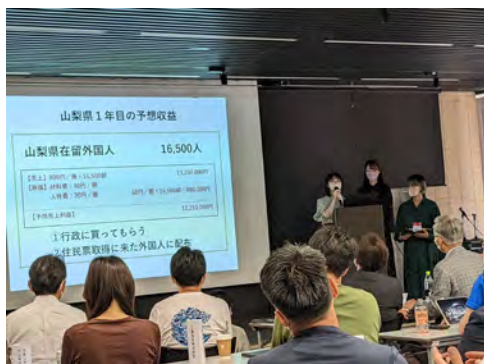
キャンプ本番のなかでは、全参加者がメンターである起業家や起業家支援の専門家の皆さんと積極的な議論や対話を重ね、自身のビジネスプランを練り上げたうえで、7分間のプレゼンと5分間の質疑応答に挑むことができた。

「Start」クラスに参加した全12チームの中で2位の成績を収めるチームもあった。

3日間という短期間ながら自身のやりたいことやその理由を突きつけられ、迷い、悩むことも多かったと思われるが、極限状態のなかでインプットとアウトプットを繰り返し行うことで、自身の大きな成長のきっかけとなったと思う。

4. 講義を通して見えた変化や効果

最後の振り返りにおいて、「3日間で自身の限界に挑戦できた」「来年もイノベーションキャンプに参加して優勝したい」「自分のやりたいことが見えてきた」との声があり、講義後に具体的なネクストアクションを起こす者も出てくるなど、全参加者にとってアントレプレナーシップを養う機会となったと考える。



アントレプレナー教育の一環として山梨県で起業・創業支援を行うシナプテック株式会社や一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジンと協力し、地方における創造的課題解決人材の育成を目的に特別授業を実施した。

参加人数

	参加形態	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	合計
学生	対面	-	3	3	-	-	-	2	-	8
	オンライン	5	3	13	7	2	2	3	4	39
社会人	対面	-	1	7	-	-	4	6	5	23
	オンライン	24	21	14	33	9	18	16	13	148
合計		29	28	37	40	11	24	27	22	218

※第1回・第4回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のためオンライン配信のみ

特別授業内容

第1回「これからの地域の資金調達の在り方」

開催日時：令和4年5月16日（月）17：30～19：00

内容：鎌倉投信は投資信託「結い2101」を立ち上げ、社会性のある企業、これからの日本に本当に必要とされる「いい会社」への投資を行っています。今回は、鎌倉投信が考える「いい会社」とはどのような会社なのか？鎌倉投信の取り組みについてお聞きしたいと思います。

登壇者：鎌倉投信株式会社 投資事業部長 江口耕三氏

第2回「大学における起業家育成の取り組み」

開催日時：令和4年6月20日（月）17：30～19：00

内容：各地方の大学での起業家育成の取り組みの特徴や仕組みをご紹介します。また、各大学の学生起業家によるピッチイベントも実施いたします。
登壇者：山梨県立大学特任准教授、Mt.Fujiイノベーションエンジン事務局長 戸田達昭氏
山形大学アントレプレナーシップ開発センター長 小野寺忠司氏
関西大学スタートアップ支援事業コーディネーター 鍛島宗範氏



第3回「挑戦することで得られる普通じゃないキャリア」

開催日時：令和4年7月25日（月）17：00～18：30

内容：クックパッド株式会社JapanCEOの福崎氏の体験談を通して、幅広く多様なキャリアについて学びます。

登壇者：クックパッド株式会社JapanCEO 福崎康平氏



第4回「広がる資金調達手段～そのメリットと留意点～」

開催日時：令和4年8月29日（月）17：00～18：30

内容：株式投資型クラウドファンディングをよく理解し、新たな調達手段として上手に活用する道を探ります。

登壇者：株式会社FUNDINNO 代表取締役 COO 大浦学氏
鎌倉投信株式会社投資事業部長 江口耕三氏



第5回「Mt.Fujiイノベーションキャンプ2022～参加者の声～」

開催日時：令和4年10月17日（月）17：00～18：30

内容：Mt.Fujiイノベーションキャンプ2022の参加者をゲストに招き、イノキャンを通じての変化や感じたこと、今後の取り組みについてお話いただきます。Mt.Fujiイノベーションキャンプとは、起業・創業、ビジネス協創を目指す3日間のプログラムです。

登壇者：山梨県立大学国際政策学部3年山本一郎氏
関西大学社会学部1年大浦涼介氏
立命館大学経済学部1年河川泰久氏
株式会社Clipy代表取締役長澤裕斗氏



第6回「研究活動の活性化から大学発ベンチャーの創出までの課題」

開催日時：令和4年11月21日（月）17：00～18：30

内容：URA（エナジー・リサーチ・アドミニストラー）として研究活動の活性化を支える方や大学発ベンチャーの創出に関わる方をゲストに招き、それぞれの立場から大学発ベンチャーの面白いところや今後の課題についてお話いただきます。

登壇者：一般財団法人SFC フォーラム URA 綿貫直子氏
立命館大学研究部衣笠リサーチオフィス URA 佐藤祐一郎氏
山梨大学理事・副学長 熊田伸弘氏
Mt.Fujiイノベーションエンジン 事務局長 戸田達昭氏
山梨県立大学国際政策学部 教授 杉山歩氏

第7回「医療・福祉領域における起業」

開催日時：令和4年12月19日（月）17：00～18：30

内容：医療・福祉領域で起業された方をゲストに招き起業しようと思ったきっかけや、起業するにあたっての課題等をお話いただきます。

登壇者：株式会社フレアス 代表取締役会長 澤登拓氏
KEIPE株式会社 代表取締役 赤池侑馬氏

山梨県立大学COCAR特別授業
×
Mt. Fuji Innovation Salon
参加費無料

テーマ：医療・福祉領域における起業

知財イノベーションラボは、創発にフォーカスしたテーマを扱い、知財イノベーションを促すプラットフォームです。本イベントでは、医療・福祉領域で起業された方をゲストに招き起業しようと思ったきっかけや、起業するにあたっての課題等をお話いただきます。

日時 2022年12月19日(月) 17:00～18:30

会場 リアル会場 山梨県立大学新田キャンパス100号棟
オンライン会場 Zoom 申込欄に記載いたします。
※リアル会場の座席は、先着順となります。

登壇者 株式会社フレアス 代表取締役会長 澤登拓 氏
KEIPE株式会社 代表取締役 赤池侑馬 氏

お申し込み方法
下記URLまたはQRコードからお申し込みください。
<https://forms.gle/6GazZ9j1WakYKMS9>
申込締切 12/19 (月) 18:00

協賛企業
山梨県立大学新田キャンパス100号棟
Zoom
SynopTech ENGINE

第8回「シリコンバレーの最新動向：日本のスタートアップの進出状況も踏まえて」

開催日時：令和5年1月16日（月）17：00～18：30

内容：日本のスタートアップの活動状況を含むシリコンバレーの最新状況をお伝えします。最近シリコンバレーで活動してきたばかりのスタートアップの経営者をお招きし、その体験談をお話いただきます。

登壇者：株式会社アドダイスCEO 伊東大輔氏
株式会社ビーコンCEO 廣田諒氏
ITPC代表 / Mt.Fuji イノベーションエンジン 理事 潮尚之氏

山梨県立大学COCAR特別授業
×
Mt. Fuji Innovation Salon
参加費無料

シリコンバレーの最新動向：日本のスタートアップの進出状況も踏まえて

本イベントでは、日本のスタートアップの活動状況を含むシリコンバレーの最新状況をお伝えします。最近シリコンバレーで活動してきたばかりのスタートアップの経営者をお招きし、その体験談をお話いただきます。

日時 2023年1月16日(月) 17:00～18:30

会場 リアル会場 山梨県立大学新田キャンパス100号棟
オンライン会場 Zoom 申込欄に記載いたします。
※リアル会場の座席は、先着順となります。

登壇者 株式会社アドダイス CEO 伊東大輔 氏
株式会社ビーコン CEO 廣田諒 氏
ITPC代表 / 知財イノベーションエンジン 理事 潮尚之 氏

お申し込み方法
下記URLまたはQRコードからお申し込みください。
<https://forms.gle/6GazZ9j1WakYKMS9>
申込締切 1/16 (月) 16:00

協賛企業
山梨県立大学新田キャンパス100号棟
Zoom
SynopTech ENGINE

04

令和4年度事業運営体制

地方創生人材教育協議会

1 所掌事項

- ・本事業計画等の提案や承認に関すること
- ・その他事業の連絡調整に関すること

2 構成員

山梨県立大学地方創生機構長 早川正幸、山梨県知事 長崎幸太郎、山梨大学 学長 島田眞路、山梨英和大学 学長 朴憲郁、(公財)やまなし産業支援機構 理事長 手塚伸、(公社)やまなし観光推進機構 理事長 仲田道弘、株式会社タンザワ 顧問 堀内 久雄、萌木の村株式会社 代表取締役社長 船木上次、昭和産業株式会社 相談役 岩下和彦、(公財)山梨県国際交流協会 会長 金丸康信、(一社)Mt.Fujiイノベーションエンジン 代表理事 岩崎甫

地方創生副機構長 相原正志、地域人材養成センター センター長 八代一浩、教育プログラム長 杉山歩、山梨県立大学 国際政策学部長 熊谷隆一、山梨県立大学 人間福祉学部長 高野牧子、山梨県立大学 看護学部長 名取初美、地域研究交流センター長・国際教育研究センター長 安達義通、キャリアサポートセンター長 吉田均、教育委員長 箕浦一哉

3 開催状況

(1) 令和5年2月6日(月) 14:50~16:20

- ・令和4年度の事業実施状況、事業評価委員会の状況、文部科学省の視察状況等について共有
- ・令和5年度の教育プログラム、事業計画について審議

事業実施委員会

1 所掌事項

- ・教育プログラム事業の企画・立案・運営に関する事項
- ・事業協働機関との連絡調整に関する事項

2 構成員

地域人材養成センター長 八代一浩、副センター長 今井久、教育プログラム長 杉山歩
 エグゼクティブコーディネータ 船木上次、プロジェクトコーディネータ 堀内久雄、プログラムコーディネータ 仲田道弘、プログラムコーディネータ 佐藤文昭、プログラムコーディネータ 手塚伸、プログラムコーディネータ 弦間正仁、プログラムコーディネータ 戸田達昭
 プログラム責任者・教育委員長 箕浦一哉、プログラム責任者 安達義通、プログラム責任者 長坂香織、プログラム責任者 安藤勝洋
 山梨大学代表者、山梨英和大学代表者

3 開催状況

(1) 令和4年5月31日(火) 15:00~16:00

- ・令和4年度の実施体制、事業スケジュール、数値目標等について共有
- ・県内就職率向上のための取組等について意見交換

(2) 令和4年9月28日(水) 13:00~14:30

- ・事業実施委員会の状況、各科目の履修者数、高校生履修者のアンケート結果等について共有
- ・令和5年度のプログラム等について意見交換

事業評価委員会

1 所掌事項

- ・進捗状況の評価に関すること
- ・成果の評価に関すること

2 構成員

北陸大学 高等教育推進センター センター長・教授 杉森公一(委員長)
 国際基督教大学 理事評議員・名誉教授・女子学院前院長 風間晴子
 株式会社テレビ山梨 代表取締役社長 原田由起彦
 株式会社クア・アンド・ホテル 代表取締役社長 三森中
 西武文理大学 学長 八巻和彦

3 開催状況

(1) 令和4年6月24日(金) 13:30~16:00

- ・山梨県立大学より、前回評価を踏まえた取組み、令和3年度の事業実施状況、令和4年度の事業計画等について説明
- ・令和3年度の取組状況について、委員により評価

05

補助事業に関する経費

令和4年度

金額(円)

収支区分	補助対象経費	内訳	事業全体	山梨県立大学	山梨大学	山梨英和大学	
支 出	物品費	設備備品費	332,200	332,200	0	0	
		消耗品費	1,700,493	1,146,110	52,753	501,630	
		計	2,032,693	1,478,310	52,753	501,630	
	人件費・謝金	人件費	25,821,219	22,966,889	2,854,330	0	
		謝金	1,969,485	1,969,485	0	0	
		計	27,790,704	24,936,374	2,854,330	0	
	旅費	旅費(うち国内旅費)	516,536	507,036	9,500	0	
		旅費(うち外国旅費)	0	0	0	0	
		旅費(うち外国人招聘旅費)	0	0	0	0	
		計	516,536	507,036	9,500	0	
	その他	外注費	10,376,785	10,376,785	0	0	
		印刷製本費	2,853,400	2,776,400	77,000	0	
		会議費	97,850	97,850	0	0	
		通信運搬費	176,155	176,155	0	0	
		光熱水料	0	0	0	0	
		その他(諸経費)(うち委託費以外)	1,393,214	1,386,714	6,500	0	
		その他(諸経費)(うち委託費)	0	0	0	0	
	計	14,897,404	14,813,904	83,500	0		
	合計			45,237,337	41,735,624	3,000,083	501,630
	収入	大学改革推進等補助金		44,647,000	41,147,000	3,000,000	500,000
		自己収入		2,704,413	2,702,700	83	1,630
合計			47,351,413	43,849,700	3,000,083	501,630	



<https://www.pentas.yamanashi.jp/>

問い合わせ

**山梨県立大学
地域人材養成センター 社会連携課**

〒400-0035 山梨県甲府市飯田5-11-1
TEL 055-225-5412 FAX 055-225-1150
Mail cocr-pentas@yamanashi-ken.ac.jp

